

しての故なりと言へり。

○秀吉西國の米を買はれし事

秀吉備中に陣して、毛利と和平せん事を計り、密に手段を運し、西國の米を價を貴く買はれしかば、城米を出して賣る者多し。小早川隆景一人固く制して賣せず。信長弑せられて秀吉と毛利家手切なる可かりしに、兵糧の豊ならざる故、終に和平に及べり。

○光秀居城を築く事附辛崎の松の事

明智江州坂本に城を築く時、三甫と言ふ者、

波間よりかさねあけきや雲の峯

光秀わきに、

磯山づたひしける松村

又光秀丹波龜山より愛宕に續ける山に廓を構へ、此の山を周山と名く。自ら武王に比し、信長を殷の紂王に例ふる心後に現れたり、と人言ひけり。又志賀唐崎の松、何時の比にか枯たりしを、

光秀植ゑつぎて、今の松なり。光秀咏める歌、

われならで誰かはうゑんひとつ松こころしてふけ志賀の浦かぜ

一説 青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記にて見れば、大津の城主新庄駿河守直頼舎弟松

庵玉雞齋壽 此雞齋天正十九年卯の秋植ゑられし由、其時の和歌に、

おのづから千代も經ぬべし辛崎のまつにひかるこみそぎなりせば

然れば今の松は此新庄の植ゑられしか。

○森蘭丸才敏の事

森蘭丸は三左衛門可成が子にて、信長寵愛厚し。十六歳にて五萬石の地を與へらる。或時刀を持たせ置れしに刻鞘の數を數へ居たり。後に信長側の人を集め、刻鞘の數言ひ當てなん者に、此の刀を與ふべき由言はれければ、皆推し料りて言ひけるに、森は先に數へて覺えたり、とて言はず。信長其の刀を森に與へられける。信長森が明敏を試みらるゝ事多かりけれども、一度も過無く、其才老年の人も及ぶべきに非ず。明智が恨有る事を察し、潛に信長の前に出でて、光秀飯を食ひ乍ら、深く思慮する體にて、箸を把り落し稍有りて驚きたり。是程思ひ入たる事別の子

細はよも候はじ。恨み奉る事云々なれば大事を企むならん。刺し殺すべし、と言ひけるを、信長、否とよ。佐和山をば終に汝に與ふべし、と言はれけり。此れは森之より先に、父が討死の跡にて候へば坂本を賜れ、と申しけるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ信ぜられず。果して弑せられき。

○光秀反状の事

光秀天正七年六月修驗者を遣して、丹波の守護波多野右衛門大夫秀治が許に、光秀が母を質に出し謀りければ、秀治其弟遠江守秀尚共に本目の城に來りけるを、酒宴して遇なし、兵を伏せ置て兄弟を始從者十一人を生虜安土に遣しけり。秀治は伏兵と散々に戦ひし時、傷を蒙り途中にて死す。信長秀尚以下を安土にて磔にせられたり。丹波に残り居たる者共明智が母を磔にしたり。明智遂に赤井等を攻め從へ、丹波を信長より賜はりけり。又信長或時酒宴して、七盃入りの盃をもて光秀に強ひらる。光秀思ひも寄らずと辭し申せば、信長脇指を抜き、此白刃を呑むべきか、酒を飲むべきか、と怒られしかば、酒飲みてけり。其後稻葉伊豫守家人を明智多くの祿を與へ呼び出せしを、稻葉求むれ共戻さず。信長戻せと下知せられしをも肯はず。信長怒つ

て明智が髪を搾み引き伏せて責めらる。光秀、國を賜り候へ共、身の爲に致す事無く、士を養ふを第一とする由答へければ、信長怒り乍ら偕て止みけり。東照宮御上京の時、光秀に馳走の事を命ぜらる。種々饗禮の設しけるに、信長鷹野の時立寄り見て、肉の臭かりけるを、草鞋にて踏み散らされけり。光秀又新に用意しける處に、備中へ出陣せよ、と下知せられしかば、光秀忍び兼ねて叛きしと言へり。然れば信長の暴なる固より論を待たず。光秀土地を略せん爲に老母を質にして殺しぬる不孝を信長の賞せられたる。君臣共に惡逆の相合へる。終を令せざること理なり。

○秀吉浮田を欺きて上洛の事

光秀信長を弑する時、秀吉備中より引返さる。此時備前の浮田八郎秀家幼少なれ共、長臣老將の面々如何なる謀あるや料り難ければ、先使を岡山の城に遣りて、一刻も疾く馳せ上り、弔軍を志候。岡山にて相謀べし、と云はせられける。浮田は固より光秀に心を通じければ、秀吉の歸路を塞ぐべきや如何せん、といふ處に、斯く告げ來れば、然らば城中にて討ち取るべし。願ふ處の幸なり、と窃に悦び合せて、其謀をぞ相議しける。秀吉六月七日の明がたに高松より引き返

し、午の刻計に宮内に著きて、聽て岡山に赴くべし。と言ひ振らしけるが、俄に霍亂したりとて打臥しければ、秀家の使來りたるに、近習の者共出で逢ひて、只今霍亂にて吐瀉せしが、腹の痛み少し止みて寢入り候、と遇ひて時を移す。其間に秀吉は奥州驪といふ名馬に乗り雜卒に雜はり、吉井川を渡り片上を過ぎ、宇根に馳著けたれば馬疲れたり。偕て使を岡山に遣りて、急ぐ事の候て脇道を通りて過ぎ候ひぬ、と言はせられしかば、浮田の人々皆呆れけるとぞ。

○黒田孝隆思慮の事

秀吉信長の弔合戦せんとて備中より引き返されし時、姫路に立ち寄らるべし、と人々も思ひけるに、黒田孝隆、姫路に馬を駐めらる可き事、少の間も然る可からず候。假初の旅にも家出は遅々するが人情なり。今度は主君の仇を討つべき爲の軍にて候。大和の筒井、細川を初め、明智が親み有る者共馳せ加りなば由々しき大事なり。如何にやせん、と思慮の未だ決せざる中に、急ぎて押著けられよ、と謀りたりければ、よくこそ言ひたれとて、一人も姫路へ寄りたらん者をば忽ち誅す可し、と振れさせられけり。孝隆先達つて人を走らかし、姫路の町人共河原へ出で、粥を仕度して軍兵に遇すべし、と下知したるより、食肴を河原へ持ち出でたりければ、立寄らずして

山崎表へ押附けられけり。太閤記に、姫路に二日滯留と言へるは誤なり。

○池田家の使者筒井順慶を試むる事

光秀信長を弑せし時、筒井順慶は光秀と親ければ、必ず與せしならんと人々思へり。池田紀伊守其臣日置猪右衛門、土倉四郎兵衛、丹羽山城三人を使として順慶の許に遣らせらる。三人承りて、順慶もし明智に黨せば刺し殺すべし、と申す。紀州公否とよ、汝等死せば我片手を折れたるに同じ、と制せられしかば、三人重ねて、順慶と軍せんに幾何の手負討死か候可き。然らば三人も討死す可きにて候。三人をもて多くの味方に代へ給へ。順慶を討取らば光秀必ず敗北すべし、と申して順慶が許に往く。順慶出會ひて、如何でか光秀が不義に黨すべき。疾く信長の弔軍せん、と言ふに、實にも偽ならぬ體なれば、三人悦びて歸る道にて、山城、今日順慶否と言はんに刺し殺さんと思ひて坐中を屹と見たりしに、側に十六七歳許なる男の順慶が刀持ちて居たりしつら魂只者ならず。順慶に飛び懸るならば、頭二つに切り割つべく見えし、と語りければ、日置も土倉も、然れば我等も然思ひつる事よ、と言ひけり。彼の小姓は牧野兵太とて、武者修行して世に聞ゆる剛の者なりけり。

○明智秀俊湖水を渡して坂本城に入る事

光秀信長を弑して安土の城を攻め落し、左馬助秀俊に守らせて山崎に打向ひ、秀吉と戦ひて敗北せり。秀俊安土を出て、光秀を救はんと京を指して進む處に、早や光秀討れたりと聞えしかば、坂本の城に入らんと、粟津を北へ大津を指して行く所に、秀吉の先陣堀久太郎秀政に行き會ひけり。秀俊小勢なれば打ち破られぬ。本道は敵に塞がれつ、湖水に馬を打入れ游がせければ、秀吉の軍兵共汀に並居て、湧れん有様を見よ、と笑合へり。秀俊は白練に雲龍を狩野永徳に描せたる羽織を著、二の谷と言ふ冑を著、大鹿毛と名附けたる馬に乗り、年久しく坂本に有りて、大津より唐崎までの遠淺は能く知りたり。手易く唐崎濱に乗り上げ、一つ松の下にて馬には息あひの樂を飼ひ、追ひくる敵を見て居たりしが、又馬に乗り坂本に入る時、十王堂の前にて馬より下り、手綱をもて堂に繋ぎ、矢立の硯取り出し、明智左馬助湖水を渡せし馬なり、と札に書きて手取鬘に結附け、坂本の城に入り、光秀の妻子は天守に入れ、安土より光秀が奪ひ取り來れる不動國行二字國俊の刀、藥研藤四郎の小脇差、檜柴の肩衝、乙御前の釜など言へる名物の器を唐織の肩衣に包み、天守より投げ落し、其の後女童を刺し殺し、火を懸けて自害せり。二

の谷の冑に羽織と黄金百兩添へて、坂本の西教寺に送りけり。後に山中山城守長俊が孫作右衛門友俊、冑を望み乞ひて得たりしが、程經て紀伊の土宇佐美造酒助孝定が許に傳はりぬ。羽織は行方を知らず。馬は無雙の駿足にて、秀吉濊嶽の軍に此馬に乗られしなり。

○東照宮和泉國堺より御歸國の事

信長弑せらるゝ時、東照宮は泉州堺に御座しましけるに、小勢にて斯る亂れに遙々三河へ如何でか引き取らせ給ふべき、と人々色を失へり。東照宮素より地理を知召され、河州飯森の宮は要害の地なれば、其地を守りて軍有らん、と仰せありて、森口に著かせ給ひし時、本多忠勝京都に御使に参りけるが、道にて變々聞き引返して來り、敵大勢にて候らはん。疾く御歸國然るべからん、と申すを聞召し、案内者は如何すべき。敵道を要らんは必定なり。闇々と討たれんは口惜からずや、と仰せ有りける處に、信長より馳走に附けられし長谷川竹丸、當國の交野郡津田の邊は、信長の恩を蒙りたる者の數多候へば、道しるべきせ候べし、と申す。宇津越を経て山城の相樂郡を過ぎ木津川を涉り、夫より宇治橋の上一里許東の瀬を涉り、江州信樂に出でられたり。伊賀の上野鹿伏兎越を、伊勢の白子に至りて船に召され然るべからん、と定められけり。忠

勝蜻蛉斬と名附けし鎗を提げ、其の邊の百姓を打具し、此殿の案内申せ、と言ひて、夫より道道の村々にて斯くしたりければ、津田よりも案内者來りぬ。其日は山城相樂郡山田村に宿らせ給ひ、所々より心を寄せし人々共、數多警衛し奉る。穴山梅雪は之迄從ひ奉りしが引き別れけり。宇治より木幡越を江州高島に至り、濃州に赴き甲州に歸るべき旨を申して引き別れしが、一揆の爲に山城の綴喜郡にて殺されけるとぞ。

其翌日木津川に至らせ給ふ。柴船一艘あり。忠勝借らんと言ふに肯はざれば、憎い奴かな切つて棄てん、と言ふに恐れて乗せ奉る。聽て涉り終らせ給ひて、二艘の船皆打割りて棄てたり。其の明けの日、一揆石原村に集りて待ちかけたり。大和より從ひ奉りし吉川善兵衛、其子主馬助柏の木を馬標にして、先駆して追ひ拂ふ。柏を家の紋にせよ、と仰せけるとぞ。夫より宇治田原の地士山口女蕃御膳を獻じて、宇治川に至らせ給へば船無し。榊原が士原田左衛門馬を乗り入れ瀬踏して打渉す。酒井忠次船一艘を探し出して渡し奉り、雑卒に至るまで皆渡る事を得たり。江州信樂迄は嶮路なれども、警衛に付き從へる人々多く、一揆手さす事もなし。多羅尾四郎兵衛光敏は、世々信樂を領しけるが、其子長兵衛御迎ひに参りたり。人の心計り難しと人々恐るゝ處に、忠勝、否々光敏御敵するならば、彼が家に入らせ給はずとも逃し奉らじ。一向入らせ給へ、と

申せば、皆尤なり、とて立寄せ給ふに、御饗應を設け人々勞を忘れたり。

又忠勝此時、多羅尾二心有りと見ば、捕へて刺殺すべし、と言ひける故、立寄せ給ふとも言へり。

五日には高見嶺を打越え給ふ。御供に候ひける服部半藏正成は、元伊州生れの人なれば、忠勝下知して伊賀の案内したりけり。國士數多参りて警衛し奉りて、上柘植より三里半許鹿伏兎越といふ深山を越え給ひて、六日に白子の浦に著かせ給ひて、長谷川竹丸秀一五郎を始として和州山州伊州の士に御暇給はり、時を得て濱松に参るべき由懇に仰せを蒙りけり。夫より三河に事無く歸らせ給ひぬ。伊賀は去年九月信雄攻め入りて打從へられし比、逃げ隠るゝ者を求め出し、殺害を專とせられしかば、國士共三河に参りて、御恩を蒙りたる人々多かりしかば、其從類皆警固し奉りけるとなり。聽て明智を追討の爲御軍を出されしに、伊賀の國士共集りつどひて参りけるを、多くは大番に入れさせ給ひ、恩賞に預りけり。

○小寺黒田始末の事

黒田美濃守職隆と稱すは備前國福岡の人なりしが、播磨の小寺藤兵衛政職に仕へて、子官兵衛

孝隆と稱す。共に功名有て用ひられけり。播州は其比所々に人々地に據りて守り軍せしが、小寺は五著に有りて姫路に小城を構へ、黒田父子此處に有りて、秀吉に頼みて信長の旗下に屬す。孝隆の子長政、其比は松千代と言ひしを、人質にして秀吉の居城近江の長濱に置きたり。此比毛利家の兵勢強かりしかば小寺約を變ぜんとす。孝隆、此は然る可からず。信長物荒き人なれ共、一旦天下に旗を擧げられん。行末は知らず先時の宜しきに隨ふべし。松千代を棄つるを悲み、斯く申すに非ず、と諫めけり。小寺聞き入れず、孝隆父宗圓に父子共誅せられぬべき密謀を告ぐ。宗圓物慣れたる士五六人呼び集め所存を問ふに、官兵衛、五著に到られなば危かる可し、と言ふ。孝隆然れば諫は尤なれ共、事も見ずして姫路に立籠らんは、君に弓を引くに非ずや。五著に赴きて力を盡し、奉公し叶はずば自害せん。其後人々心を合せ、父の御事頼み任する由決斷せられしかば、人々父子押隔てられんは如何候べき。只病とて五著の奴原に使をもて、媚び諂ひ欺くに如くべからず。討手來らば力無し。其後一戦を遂けて五著を打破るべし。罪無くて討んとする惡逆の人天の咎無からんや、と口々に言へども、孝隆、各存する旨は誠に理なれども、今病と言はんに實とは聞き入れじ。必ず主君に叛くと人に誹られん事士の志に非じ。君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは運の極なれば力なし。我一人誅せられたりとも如何にせん。此姫路をだ

に取られずば、天下の安危歲月を経ずして定るべし、とて止まる色の見えざれば、宗圓家の恥を思ひて身を捨てんと思ひ定むる事士の志なり。疾く五著に往きて事叶はずば自殺せよ。後の事は心安く思ひ候へ。君の志違ふとも我叛く可からず、と言ひしかば、孝隆打笑ひ、然らばとて座を立てば、人々、只今思召し切らしての仰は遺言に非ずや。若し五著にて難を遁れ給はずば、其時人々五著の城を枕にせん、と誓ひけり。宗圓、官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよ、と下知せられしかば、孝隆五著に赴きけり。宗圓見送り、子ながらも恥しき事なり。先だつべき親の留りて子に死ねと言ふこそ口惜けれ。然れ共君恩淺からざるは人の存する處なり。今讒言を信ぜらるこそ悲しけれ。孝隆を遣らざして引籠り謀叛して、命は惜き物ぞと教ふるは父の道に非ず。仇となりて身を殺すは恥を知る道なりけり、とて潛々と泣きたりけるが、さぞ五著にて謀りて見んに、今姫路に弓を引く設なしそ。酒宴して時々舞謠ひて日を送れ、と言ひしとぞ。孝隆は五著に行きて、心置くべき人の許に使用して求め來れる肴有りとして饗し、しめやかに語りて打解けたる體なれば、如何に繕ふとも心の外に現れぬ事はあらじ、など言合へり。又此を疑ひて、黒田父子は謀逞しき者にて良き士數多有り。城に籠る用意せん間に、官兵衛を以て欺く可きも計り難し、とて姫路の様を聞くに、宗圓金剛に舞舞はせて打解けたる體なれば、偕て

は別の事も有らじ、と言へり。此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戦ひ利あらずして有岡の城に引籠る。此由小寺聞きて孝隆を呼びて、我毛利に與すべきとは内々荒木と言ひ交したる故なり。今毛利家に頼らん事は我過なりと覺ゆるぞ。然れども此儘にて手切をせんに表裏者と言はれんも口惜ければ、疾く有岡に行いて荒木を諫めて、若し聞き入れば秀吉に謀りて信長と荒木和平を取行ふべし。攝州信長に従はば、我も眞に心を翻して信長に従ふべし、と言へば、孝隆聞きて、信長と荒木と和平は思ひ寄りも候はず。荒木度々信長に背きたれば如何で其言を信ぜらるべき。参りたり共、徒事ならん。然ども辭し申せば勇無きに似たり、とて有岡に赴く路、姫路に立寄りて父子對面し、有岡に至らば必ず首を刎ぬべきか、押へて囚とするか、二つの中に過ぎ候まじ。五著に死んより有岡にて死候へば、信長も聞き又世の譽ともなり候べし、と思ひ切つたる色を宗圓見て涙に咽び、暫時物をも言はざりしが、稍有りて、誠に困厄の至極なれ共、名に換へて身を捨つるは義を思ふ故なり、とて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺兼て村重に密に毛利に一味すべきに、黒田父子人質の松千代を信長に出し置きたれば、彼の父子は織田に内通の志有りと告げ知らせつれば、有岡の本丸に呼び入れ生虜りて牢に押込みけり。五著に此由聞えしかば、小寺僞て齒齧をなし、荒木が狼藉の次第遺恨深し。然れ共此上は信長に

一味の心を易へて毛利に與し、官兵衛を引取る謀や有るべき、と言はせしかば、宗圓怒りて、官兵衛生虜に成りしかば是非の論なし。年老たる身の子を失ひし事は誠に力なき次第なり。然るに官兵衛を救はん事謂無きに非ざれ共、先松千代を信長に出せし事は、君も又臣父子と相計れる處にて候に、今度官兵衛を有岡にて捕へたるは、荒木が横様の振舞なり。相計れる處の人質を棄てて、押し止めたる者を救くべきは逆ならずや。只順道に隨ひて天の冥見を待つに如かず。我若き時より度々の軍に臨み、小寺の家の危難を救ひしに、今齡傾き、頼み切つたる長子を棄て候事は口惜く候へ共、首を碎かる共、毛利に一味せよとの仰をば得承らじ、とて刀を抜き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が士共五著を攻め破らんと言へども川ひす。村重心有らば勞るべし。若し五著を攻めなば村重も官兵衛を殺害すべし。知らぬ様にて在れよ。斯く有らんと思ひて官兵衛が女房をば潜に此比引取り置きたり、とて驚かず。村重は小寺に頼まれて孝隆を生虜たれ共、己が仇にも非ざれば勞り置けり。斯くて信長有岡を攻むるに及びて毛利家の後巻もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中に呆れて有りける處に、栗山備後善助時々有岡に行きて忍びて商家を語らひ、牢の後の沼より姫路の事も語りし事度々にて、案内をしたりければ、牢に走り行きて見れば番人も落ち失せたり。此れはと驚き且悦びて、善助棄て置きたる斧

にて鎖を破り、引立てられ共三年居屈み、其上に濕瘡を病て起つ事能はず。傍なる牢中の人を頼み抱負はせて城を出で、寄手の陣に行き、偕て姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻め入るに及びて小寺は但馬に落ち行き、黒田父子危難を脱るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜り、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して智謀逞しく、秀吉の功臣第一と聞えしは此の孝隆なり。

○井口兄弟武勇の事

黒田孝隆播州にて秀吉の命を請け、長の坪といふ城を攻め落し、井口猪之介、三宅藤十郎に其城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其城より逃落ちたる者共一族を催し、其夜攻め寄せたり。井口三宅、人も少く、攻め破りて普請も未せざれば守り難し。殿未だ遠くは行かせまじ。切り脱けて参り後卷の事申すべし、と云ひ合せ、三宅は百二十人許にて搦手に有りしが人数を残り、二十人許を連れ圍を出づる。敵利を得て攻め入りたり。井口は大手にて防ぎ戦ひしが、翌朝辰の刻後卷の旗先見ゆる比、薙刀にて片股を薙ぎ落され、石垣に倚り居たれ共敵恐れて近附かず。最後に大音上げ、此城の大將井口猪之介ぞ首取れ、とて自害しけり。藤十郎は後三宅若狭とて武名あり。猪之介に三人の弟あり、六大夫、甚十郎、與一之助といふ。六大夫は播州北條の構を守りて討死しけり。

或時孝隆の士罪有りて討手に向けらるゝに、却りて討手を切つて兄弟三人町に出で、大なる屋に取籠りたり。甚十郎見て參らんと言へども孝隆許されざりしに、再三に及びければ、然らばとて許されたり。甚十郎其處に行くと忽ち門の潜戸を引き放し、楯に執りて飛び込み、戸を以て二人を打伏せ、一人を切殺し、打倒したる一人も切つて、首三つ取りて馬に乗り、二町許歸る處に、罪科人の従者主人の首を見て、鎗にて甚十郎が馬上を目掛け飛び乗りて突く。突かれながら其者を切つて棄てたれども、痛手にて馬より落ち、少時ありて蘇生したるを戸板に乗せ來る。孝隆膝を枕にさせ、手は如何、と問はるゝに、如此に候、と一言いひて終れり。兄弟三人皆我爲に死たる事報ゆるに詞無し、とて孝隆其父與二右衛門が宅に自往きて弔はれ、與一之助七八歳なるを呼び出さる。既に九つに成りける比、三人の兄は勇氣由々しき者なりけれども、人の性質は計難ければ試みんと思ひて、磔を見つるや、と問はるゝに、見すと答ふ。今夜は月明なり。其所の磔木の下に行き印を立て歸らんや、と言はるゝに、承り候、とて自御幣を切り竹に附けて與へらるゝを、與一持ち行き立てんとするに、磔木動くを見て、死きらぬか、留を指してとらせん、とて木に攀るに、驚きて磔木より飛び下り逃ぐるを、與一、偕は憎き次第なり。逃すまじ、と追ひかくる。詮方なく宮の有りし内へ入り戸を閉れば、何時迄待ちても出づるを切らん物を、と呼

る。種々にすかし名を言へども歸らざれば、殿の仰にて威の爲に來りたり。著せさせ給ふ帷子の片袖を證據に取りて許されよ、と言ふによりて歸りぬ。朝鮮にて竹も木も無き廣野に、一筋の道窪くて切通しに似て、其向ふ處大山の麓にて曲尺の如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて行きかかる。日本人數多射殺され屍相重れり。山陰の敵多少を知らざれば進む者無し。井口が從者山崎喜兵衛、見て參らん。馬を扣へて待たれ候へ、と言ひ捨て走り込む。井口も馬より下りて走り入り、山崎先射手三人を討取り、其首を持つて大音上げて名乗りたり。井口攻め入り追つ散らす。井口其時は兵助と言ひけり。此賞美に朱柄の鎗を許され候へ、と申す。卒爾には許し難し。一日に首七つ取りてこそ朱柄は許さるゝと申し傳へて候、と人々申しける故事延にけるが、其後井口一日に首七つ、山崎も六つ取りしかば、朱柄を兵助に許されたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり。

○吉田六之助首供養の事

別所家にて首供養したる人有りと孝隆聞きて、秦桐若首三十一取りたるに惜むべきは死したりき。吉田六之助正利供養すべし、と言はれしに、正利、首數二十七取りて候とて辭したりけり。孝

隆、小氣なる男かな、今年三十一歳なり。此後首取るまじとや。先供養して後に其數を合せよ、とて米百石與へ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戦、朝鮮の軍までに取りたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

○生田木屋之介武功の事

天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて城際に近づき寄り、懐中の小鋸をもて堀柱の根を切り目標をして、翌日城攻に彼の柱に鈎繩を附けて引倒し、先駆して城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ。日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時傍輩を討つて出奔し、播州に行きて孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるに留め置き、未だ對面せざる處に、其夜隣家に人を殺し取籠りたる者あり。夫を搦め出すに附即時に孝隆に申して、それより奉公しけり。攝州生田の城にて高名あり。之によりて生田木屋之介と姓名を賜はる。是その高名を永く顯さん爲とかや。

○備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺して討死の事

文明十五年十二月十三日備前福岡の戦に、

備前は元赤松氏世々領せしに、嘉吉元年赤松満祐滅亡の後、備前をば赤松相摸守教之に賜はり、教之が代官小鴨大和守備前に有り。應仁の亂の後、備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を細川勝元相語らひしかば、元成兵を集め小鴨を攻めんとするにより、赤松が家人散りふになりし者共元成に與し、小鴨を攻め落しぬ。赤松兵部少輔政則元成を賞して伊福の郷に置きぬ。山名宗全細川勝元共に病死の後、京都は少靜かなれども諸國は彌大に亂れ、松田が一族共備前西郡の中數多押領す。政則は將軍家より功を賞せられ、播磨、備前、美作を返し賜りぬ。山名右衛門督政豐之を怒り、文明十一年九月京都を出て但馬の國に馳せ下る。斯れば政則も播磨に馳せ著けて、此次手に備前の松田が恣に攻め取りたる所を治め正さんとせり。元成此由を聞き兵糧用意の爲にしたる所は返すべけれ共、伊福の郷に於ては、軍功に依りて賜はりたる處なれば返すべからず。是は事に托して我を打亡さん之の謀ならん、とて金川に城を構ふ。此城は麓には大川流れ峯高く、四方峻にて要害よき地なり。然れども後卷の手段を謀り、備後國山名俊豊に告げて備前を切取り進らす可し、と言ひければ、俊豊是を悦べり。政則備前に赴き、松田が押て己が地にしたる所々を取り

返しければ、文明十五年九月、山名も備後の尾道を出て同國國分寺に著き、三千餘を驅催し、十一月七日備前の國に打入りしかば、松田が一族相集り、邑久郡福岡の城の西北の山に陣取りたり。福岡の城は東西に大川流れ、中に島山有るを城に據りて政則の守護代浦上喜三郎則國を始として二千餘人立籠り、川上の瀬は長船右京亮等に野伏を添へて陣取りたり。十一月二十一日押寄せて合戦あり。浦上が家人に檜村與三兵衛、同又四郎とて兄弟あり。是より前に元成に奉公しける因有りしかば、密に語らひて十一月二十三日夜半風烈しき便に陣屋に火をかけたなり。寄手内通に力を得て應て攻め寄せたりしに、城中嚴しう支へ戦ひて追返す。其後事顯れて檜村兄弟を搦め捕り、之を誅しぬ。寄手其後相謀りて、十二月十三日に又富岡といふ小山に兵を出す。城よりも打つて出で散々に相戦ふ。寄手も城兵も討る者多し。

福井小次郎は元京都の人なりしが、四歳の比、父源左衛門當國の在番の時連れ下り、城中に在りしが、茲年二十一歳なるが、其日の軍に父子の間を敵味方に押隔てられ、父は城中に入りたると思ひ、走り入りて尋ぬるに見得ざれば、又城外に打出で、寄手に向ひて福井小次郎と名乗り、縦さま横さまに切つて廻りしが、餘りに戦ひ疲れしを、家人肩に掛けて城中に引入れしに、淺

手深手二十六所被りければ終に死にたり。父城に歸りて小次郎が手箱を開きて見るに、數多書き置きたる其中に、母の方へ幼少より別れ參らせて、此儘に討死せば御歎有らんこそ心に懸り候へ。暫時此世に残り給ふとも終には逢ひ奉るべきにて候へば、思し召し分けて慰ませ候へ、と細々と書きて、奥に、

生れにし親子の契りいかなれば同じ世にだに隔てはつらんと書きたりしに依りて、思ひ定めたる討死なり、と人皆惜みけるとぞ。

○再 福岡合戦藥師寺額田片岡三士討死の事

文明十六年正月六日又福岡にて軍あり。城兵敗北する處に藥師寺四郎左衛門薙刀を把り返し合せ、爰にて討死するよ、とて支へ戦ふ。同彌四郎等四郎左衛門を討たせじと取つて返し、津坂の山の麓より城際まで僅の兵にて多勢を防ぐ。拂ひ退きにしけり。寄手の中に福屋九郎右衛門とて剛の者、鍛形打ちたる冑を著、透間も無く四郎左衛門に切つて懸りしに、四郎左衛門が家の士返し合せて、福屋は討たれぬ、然れども寄手彌追ひ詰めしかば、藥師寺四郎左衛門、額田十郎左衛門、片岡孫左衛門三人引き返し枕を並べて切死にしたりけり。是は三人必死を約束した

る故とぞ。是より前三人物語せし時、四郎左衛門言ひけるは、此度の軍必ず味方打負くべし。松田は固より當國の者なり、後卷を味方より申せども播州の加勢も來らず。政則眞弓峠の軍に打負け、姫路に引退きしと聞ゆれば、味方は力を失ひぬ。然らばとても討死すべき身にて、人の後に存命へて在らんも本意に非ず。重ねて軍有らば必ず討死せん、と語りければ、兩人聞きて、我れ我れ同じく存する事ぞ、と互に同じ處に討死せんと約束しけるが、今日四郎左衛門打出るとぞ、唯今敵の手に渡べき首なり。最後の對面すべし、とて鏡に向つて莞爾と笑ひて出しとぞ。額田は岡本筑後守に向ひて、子にて候又三郎は一子なれば、取別けて不便に存するなり。我と一所に在らば必死を免るべからず。宜しく計ひ給はれ、と言ひければ、心得たり、とて引き分ちしかば、今日討死をせざりしとなり。片岡は我家來に向ひて、我首必ず敵に取らるべし。之を印に死骸を尋ねよ、とて小捻をもて左の二の腕を二重に結ばせたりしが、果して是を印に死骸を求め得たりとかや。

常山紀談 卷之六

○山崎合戦の時堀秀政寶寺の山をとる事

山崎合戦の時、堀久太郎秀政の士の子何某といへる者、明智が許に奉公して有りしが、光秀夜の未だ明けざる内に、寶寺の山に兵を押し上ぐべしと謀りしを、父の許に告げ遣りて、思ひも寄らず敵味方となり、明日は一戦に及ばん事を歎きける。其書状を則秀政に見せたりければ、秀政夜半に寶寺の山に押し上り陣し、待ちかけたりけるを如何で知るべき。夜明け方に明智が先手押寄せたる處を、秀政山上より鐵炮を打懸け不意に切つて懸り、追ひ崩して一戦に利を得たり。

○森寺政右衛門武名の事

山崎の合戦に明智が先陣と護國公の先陣と戦を挑む。時に侍大將森寺政右衛門忠勝、眞先駆けて敵を追つ立つる。森寺が馬印檜木笠なりしを、明智が者共見て、今日檜木笠の馬印持たせたる大剛の者、下知せし有様目を驚かし候。姓名を承らばや、と度々呼はりけるを、秀吉聞きて、今日

の軍、森寺が一人の武名を上げし、とて桐の紋附きたる羽織を與へられけり。

○則武三大夫功名の事

山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三大夫首を取りて吉晴の前に來る。吉晴、思ひしよりも出かしたり、と詞を掛けられしかば、則武怒つて首を提げて進み寄り、斯る時は大將も目の暗くなる物に候。則武三大夫が取つたる首よく御覽候へ、と罵る。吉晴も、憎き奴哉、と言ふ儘に、刀を抽て斬られしに冑の星を削りたり。則武眞一文字に敵の中に駈け入りて首を取りて歸る。吉晴は、必ず則武は討死せん、と悔み思はれし處に、則武來りければ大に悦んで、汝を先に褒めたる詞、賞する餘りに思ひしよりもと言へるは、剛の者に言ふべき詞に非ず。我過にてこそあれ、汝が二度の先駆大きに勝れしよ、と感ぜられけり。

○瀧川一益厩橋を退く事

天正十年瀧川左近將監一益は信長の命により、關東の管領として諸將の質を取り、上野の厩橋に在りける處に、六月七日信長弒せらるゝの變を聞き、老臣共事を祕さんといへども、一益惡

事千里といふ諺あり。秘すること能はじ、とて上州嶺の城主小幡上總介信眞、鷹巢の城主鷹巢三河守信尚、金山の城主由良信濃守國繁、館林の城主長尾但馬守顯長、小股の城主澁川相摸守義勝、倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景、白倉の城主白倉左衛門佐藤、岡の城主内藤大和守秋宣、安中の城主安中越前守、高山の城主高山遠江守重光、五閑の城主五閑刑部、小泉の城主富岡六郎四郎、石倉の城主長根縫殿介、大戸の城主大戸民部直光、木部の城主木部宮内貞利、和田の城主和田右兵衛大夫信業、那波の城主那波對馬守宗元、武州忍の城主成田下總守、深谷の城主深谷左兵衛憲盛、松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き、信長の變を告げ、各の人質を歸し、急ぎ上京して弔軍すべき旨を語る。諸將大に感じ、此一大事を告げて人質を歸されんと候に、如何でか二心候べき。人質を其儘置きて仰に従ふべし、と言へば、一益諸將の義心謝するに詞も候はず。北條の表裡定めて一益を討取りて上野を押取るべきならん。此方より打向ひ一軍せんものを、とて城には同姓の彦次郎忠往を守に置き、一萬許の兵を率ゐて神奈川に押出す。

一説に、北條家より人質を渡し、早く城を出でよ。然らば一戦すべし、と云送る。一益、吾信長の命を受け、關東の管領たり。今危きに臨んで何ぞ北條が下知に附くべきや、とて兵を出

せりともいへり。

北條氏直果して小田原よりの兵を出し、武州兒玉郡本庄に著きて、先陣北條安房守氏邦神奈川に押寄す。一益は川を後にして相戦ふ。大敵支へ難く討たる者多し。一益厩橋に歸り、其日討死せし人々の姓名を過去帳に書きて、黄金を添へて寺に送りて供養し、諸將を集め暇乞とて酒宴し、一益鼓を打ち、兵の交り頼有る中、と諺ひければ、倉賀野淡路守、名残今はと鳴鳥、と囃し、終夜酌み酔ひて太刀刀取出し、上州の諸將に引出物にし、懇に暇を乞ひて六月二十日厩橋を打出で、各人質を歸しけれども、皆請取らずして驛馬等の事沙汰し、是を送りて笛吹嶺に至る時、國人の人質悉く歸し、木曾路より歸京す。瀧川彦次郎は一益が長男三九郎、二男八丸を伴ひ木曾路にかゝる時、一揆起り八丸を奪ひ取られしを、一益が古市九兵衛一揆を追ひ拂ひ、八丸を奪ひ取りて一益と同じく長島に歸る。

一説、神奈川の合戦に八丸生捕れしを、古市追討ちて其敵を切り伏せ、八丸を奪ひ取つて連歸ると言へり。又管岡平右衛門、津田治右衛門踏留りて討死しける。其間に一益兵を納めて厩橋に歸るといへり。管岡平右衛門は一益の馬取より取立てられ、氏は管岡彦次郎是を與ふ。武功度々に及びて士大將となり武者奉行たり。又酒宴は倉賀野にての事ともいへり。

關東にて一益厩橋を引拂ひたる振舞殊に賞美しけるとぞ。

○光秀愛宕山にて連歌の事

天正十年五月二十八日、光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける。

ときは今あめが下しる五月かな

光秀

水上まさる庭のなつ山

西坊

花おつる流れの末をせきとめて

紹巴

明智本姓土岐氏なれば、時と土岐と韻を通はして、天下を取るの意を含めり。秀吉既に光秀を討ちて後、連歌を聞き大に怒りて紹巴を呼び、天が下知るといふ時は天下を奪ふの心現はれたり。汝知らざるや、と責めらるる。紹巴其發句は天が下なるにて候、と申す然らば懷紙を見せよ、とて、愛宕山より取り来て見るに、天が下しると出たり。紹巴涙を流して、是を見給へ。懷紙を削りて天が下しると書換へたる迹分明なり、と申す。殊勝にも書き換ぬ、とて秀吉罪を許されけり。江村鶴松筆把りにて天が下しると書きたれども、光秀討たれて後紹巴密に西坊に心を合せ、削りて又始の如く天が下しると書きたりけり。

○幸田彦右衛門が母義死の事

織田信孝秀吉と弓箭を執る時、信孝の乳の人を人質に秀吉の許に出し置かれしを、磔にして誅せらる。彼の乳の人の子は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり。是より前秀吉信孝の長臣等を謀はるゝに、岡本下野守は同心して信孝に背きけれども、幸田は背かず。幸田が母誅せらるゝに及びて子の彦右衛門に書を送りて、我今空しく成る事努々歎く可からず。親は必ず子に先だつ習なり。唯忠義を守りて君にな背き參らせそ、と言ひ遣はしければ、聞く人感じ合へり。天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に攻入る時、幸田兄弟潔く討死したりけり。幸田が母は實に漢の王陵が母の志とも云ひつべし。但し王陵が母は天下を知し召す可き高祖の事を識りたれども、只今危難に迫れる織田家に忠を盡せと言へる、眞に稀有き事なるべし。

○濊が嶽合戦秀吉智謀の事

佐久間立蕃盛政、柳瀬にて中川清秀を討取りける時、秀吉長濱より一騎駈にて來られけり。濊が嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里許なり。盛政使を以て、早くも軍を寄せられ候。相待ち

て候ほどに、夜明けなば矢合仕るべし、とぞ言送りける。秀吉聞きて、是より申さんに由々しくも承り候。明日潔く軍を遂げ候べし、とて使を返して後、吾に怠らせ夜討せんとこの事ならん。遠き異國の張良は知らず、我を誨るべき者日本に有りとは覺えず、とて野にも山にも籌を透間なく焚きて白日の如し。佐久間は敵人馬の行程を急ぎて疲れたる處へ、するりと押寄せ打破らんと思ひけるに、秀吉の謀に夜討の支度空しく成りにけり。

○堀七郎兵衛見切の事

濊が嶽の合戦に堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時、其臣堀七郎兵衛押留て曰く、勝家の陣より佐久間が陣に頻に使來ると見ゆ。疾く引き取れとの事ならん。若し引取らば立蕃本の道をば歸るべからず。然らば間近き所にて戦有るべし。立蕃引取らば勝家必ず來りて軍有るべし。此二つを出づ可からず。兵を分たずして待つ可し、といふに、立蕃も退かず、柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたり、と云ひしが、果して敗北しけり。又濊が嶽の事を老功の人に問ひしに、勝家の詞の如く立蕃引取らば勝利を全うすべし。立蕃が言の如く勝家押詰め來らば必ず敗軍すまじきなり。兩將互に猶豫して勝を失ひたり、とぞ語りける。

○濊が嶽七本鎗の事

濊が嶽にて佐久間が人數亂るべきを秀吉見て、近習の人々に向つて、爰ぞ鎗を合せよ、と詞を懸けらるれば、各競ひ進む。福島市松、加藤孫六郎、片桐助作、平野權平、脇坂甚内、糟谷助右衛門七人なり。其夜秀吉、今日の七本鎗の者と呼ばれけれども、誰といふ事を知らず。其時指を折りて數へられしかば、前に進み寄りたり。是より濊が嶽の七本鎗と世に唱へけり。中にも福島壹番に進んで鎗を合せたる上、首を取りたりしかば、五千石與へられけり。其餘は皆三千石與へられぬ。福島は紙の切裂じなひの指物、加藤嘉明は紫纒、清正は紙のしで馬簾、片桐は銀の切裂えづる、平野は紙子の羽織、糟谷は金の角取紙のえづるの指物指されたりとぞ。

○石川兵助戦死の事

濊が嶽の前夜、石川兵助と福島市松と口論し、既に刺違ふべき體なりしを、座に有りし面々、明日の軍に身を捨てて高名を遂げらる可きに、こは如何なる事ぞ、と押留めければ、石川、面々の前

にて口も得明かざる市松、何とて剛き鎗先に向ふべき。明日我後影を見よかし、と言ひ捨てて出でけるが、直に柳瀬に赴きて只一人真先に進みて討死しけり。人々其勇氣は嚴しけれども、其怒は戒とすべし、と言合へり。秀吉石川が弟長松に感状を與へられけり。其文に曰く、
 今度三七殿、依違貳軍、美濃大垣之處、柴田修理亮勝家出張柳瀬、欲遂一戰之時、兄兵助先赴合鎗令擊死、拔群之擯也。動發於眼前、見之。爾雖爲若輩、念兵助之壯志、與秩千石、向後愈可抽忠節一者也。

天正十一年七月五日

秀吉

石川長松殿

と書かれたり。

○佐久間盛政生捕るゝ事附久右衛門安次源六郎實政が事

濺が嶽の軍破れて佐久間を生捕來る。秀吉見て、汝は武勇逞しき者なり、助けて國を與ふべし。二心無からんや、と問ふに、盛政冷笑ひ、我に國を與へなば、汝を生捕り搦めん事、今日我身の上の如くせん。新に恩を受くるとも柴田を忘れんや、と言ふ。死す可きに及びて、大紋紅裃廣袖の

小袖白帷子に空炷して呉れられよ。一生の終りに風流を盡したし。是一つの望なり、と云ひしかば、秀吉其望に任せられしかば、大に悦んで是を著たりけり。立著其時二十七歳。衆人惜み合へり。

柴田亡びて後、其従士佐久間久右衛門安次、源六郎實政兄弟紀州に遁れ、粉川法師三池を謀らひ、河内霧坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして度々軍しけるが、遂に秀吉に攻め落さる。後に小田原に入り、北條亡びて兄弟金澤の稱名寺に在りと秀吉傳へ聞き、伯父勝家の爲に吾を仇とする志、誠に大丈夫と言ふべし。今日本平均しぬれば心を改めよ、とて安次に一萬五千石、實政に一萬石與へて蒲生氏郷に附けらる。兄弟氏郷に一禮しける時躓きけるを、人皆笑しかば、氏郷物の思慮無く、汝等が奉公ぶりに彼を競ぶる事よ。兄弟とも覺障の士に非ざる物を、と言はれけり。

○尼子家の十勇士

尼子家十勇士と世に唱へけるは、山中鹿之介、藪原茨之介、五月早苗之介、上田稻葉之介、尤道理之介、早川鮎之介、川岸柳之介、非筒女之介、阿波鳴戸之介、破骨障子之介なり。

○信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打亡さんと謀りて、先信雄の長臣岡田長門守、津川立蕃、浅井田宮丸、瀧川三郎兵衛を招き、懇に遇して後、信雄に自害を勧めよ。然らば恩賞厚く行ふべし、と語られけり。聞き入れずば首を刎ねん氣色なる上、神文を書けよ、と責めらる。四人力無く、承りぬ、と言ひて祀請文を書きにけり。秀吉も、約を背かじ、と神文を出されけり。是は一人宛語ふべきを、一同に招きたるは、信雄に告知する者有りて、残る者を誅せさせんと、の謀なり。又皆秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書きたれば、疑ひて一和すべからず、と思慮せられたるなるべし。瀧川素僧なりしを信長呼出し、四萬石の地を賜りし身なれば長島に歸られ、信雄に斯くと告げ申せば、頓て三人を誅せよ、とて長門は飯田半兵衛、立蕃は土方勘兵衛、田宮丸は森源三郎と討手を定められけり。土方承りて、長門をば臣に仰せ附けられ候へ。打留申さん、と言ふ。飯田、既に定りたる上は何の申條の有る可きぞ、と言へば、信雄、然らば長門をば土方討候へ。飯田は、既に下知したれば討ちたるに同じ、とて長門を土方に譲りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始彦三郎と云ひけるが、太く逞しく、胸より手足に至るまで毛生ひ熊の如くにて勇猛の士なり。長門常に土方

に語りて、殿は人の申す事軽々しく信ぜられて、日比我を疎まるゝよ、と度々云ひけるを、土方は戲か又は汝の心の違ひたるならん、と言へば、長門、否々此長門をば必ず誅せらるべし。其時汝討手なる可きよ。手易く討たるべき身に非ず、といへば、土方聞きて、討手の仰を承らんに、此勘兵衛ならで又誰か有る可き、と語りたるに、長門仰に因りて、此七つ胸切落したる脇差にて、汝が頭を斬り破らん、と云ひける詞に依て斯は申せしなり。天正十二年三月三日の禮に、岡田、信雄の前に出でけるを合圖とせられけり。岡田其日は脇差を横たへて進み出る。信雄、新に造らせたる鐵炮を見よ、とて指出し、此臺尻の穴は何の爲ぞ、と問はるゝに、岡田少し差し俯く時、土方つと寄り引組だり。岡田、己をや、と言ふ儘に脇差を七八寸抽けれど、大力に強く抱かれて抽きも放たず振合ひける處を、信雄、土方放せ、我自ら切らん、と詞を懸られしに、臣と共に斬せ給へ、とて放さず。信雄、放たざれば何時までも斬るまじ、と言はれしかば、土方岡田を突き放しざまに小脇差を抽いて指通せば、信雄透さず切つて殺されたり。津川は此騒ぎを聞きて走り來りけるが、信雄に行逢ひ刀を取延べて切りたりしに、廊下の長押に切つ附けたるを、飯田傍より刺殺しけり。浅井をば森討ち留めたり。是よりして秀吉と弓箭を取られけり。

○平松金次郎始末の事

平松金次郎重之、甲州の温井と同じく天龍川を渡る。平松先達つて陸に上り、船に残れる従者、温井に無禮の事有りて忽ち切り殺しけり。扱て平松に斯くといふ間もなく、と云ひければ、無禮する者は我も捨て置かじ、とて色も變ぜず。人皆平松を誹りける處に、幾程もなく長久手の軍に、平松と鳥居金次郎と先を争うて鎗を合はす。平松が相手は森武藏守長可の士山田八右衛門とて、始め播州三木の城主別所長治に仕へて、名高き勇士なり。平松肥え太りて小男なりしかば、東照宮、さぞ走り廻り不自由ならん、とて常に笑はせ給ひしに、其日御前に進み出で、不行歩者、今日鎗を合せて候。と立ちながら申して傍若無人の有様なり。賞せられしかども、猶不足に思ひけるに、前田利家の士山田出羽、其の時平一郎とて秀次に仕へしが、秀次に申して一萬石の祿にて招かれけり。平松是に約し京に赴く時、心易き朋友に暇乞して立ち去りけるを聞こし召し、追々討手を出させ給ふ。大剛の平松なればとて、第一番に渡邊半藏、續いて河村善七郎、大久保與一郎、部治兵衛、段々に追つかける。坂部袋井にて逢ふ。平松は久能へ行く木坂越に遠州可睡齋の禪寺立ち寄ると物語す。坂部は兄三十郎に用之事有つて横須賀へ行くとて

打連れたり。道の別れ際にて、久しく逢はじ、と馬より下の暇乞する時、坂部平松を一太刀斬りたるに、如何したりけん、切り外しければ、平松坂部が眉間を切る。坂部眩みけれども、さしもの者にて、落人あり打留めよ、と呼はるを聞き、近所の郷民群り出づるにより、平松可睡齋に入りたるを取り圍み、横須賀よりも馳せ集り、寺を取巻きけれども、平松は爰に居らず、といふを、小僧を捕へて責め問ふにより、平松、何方へも逃ぐる者に非ず。爰にて腹切らん、とて立ち出、坂部三十郎に向ひ、治兵衛は殊に親しく語りけれども、不便ながら身に掛る火を拂ひて、是非なく切りたり、と云ふ。三十郎聞きて、治兵衛疵淺し、と答ふ。平松、吾斬る程にて助かるべきや。日比の交故止は刺ざりき、というて腹切る時、三十郎、介錯せんとすれば、平松、治兵衛を吾が手にかけ、今汝に首を討たれんは心よからず。とて同心せざりしとなり。

又一説に、平松は度々口論の時後れ有り。殊に遠州新井の渡り舟にて、柏原新五郎、平松が従者を討ちたるに、おめくとして有ければ、人々嘲笑ふ。東照宮聞し召し、人は何ともいへ、平松が眼ざし剛の者なり、と仰せられしが、果して長久手にて懸り兼ねたる處に、平松茜の羽織を著、十文字の鎗を提げ、進み出、池田家の軍兵の真中に鎗を入れたりける。其後出仕の中にて、諸士に向ひ、吾胎内より厚恩を請け、猥りに一命を捨てじと思ひしが、

今は早思ひ残す事なし。誰にても出でられよ、撫切にすべし。昔の金次郎とな思はれそ。殊の外暴者に成りたり、と大言しけるに、一人も答ふる者なし。平松が勇名高く聞えて、先年天王寺勝曼の鎗、貝殻塚の鎗、備前八濱の鎗をこそ言ひ傳へたれ。平松が鎗は近き頃稀なり、と世の人賞しけり。秀次一萬石にて招かれしかば、平松立ち退きたるを聞き召し、小栗又市、渡邊半藏、河村善七郎、坂部治兵衛を追手に出させ給ひ、岡崎へ早飛脚にて、本多作左衛門にも御下知有り。平松遂に袋井の北なる可睡齋にて自害すともいへり。

○水野勝成高名附行状の事

長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて胄を著す。鉢巻したりけるを、父見て、汝が胄は濁り壺にしたるか、と罵られしかば、父ながら餘りの詞かな、眞先駈けて首を取るか、吾首を敵に取るか、二つの中よ、と言ふ儘に、馬引き寄せて打乗り、諸鎧を當てて駈け出す。忠重、あれは如何に、とて太田重助といふ士をして呼び歸されけれども耳にも聞き入れず。又水野喜右衛門寄せ來り引き止めんとするを、勝成はたと睨んで、疊の上の諫は聞きも入るべし。只今大軍の中に駈け入り、功名せん時止めとて引き返す様や有る、と言ひ捨て、秀次の將白井備後守が

陣に突いて懸り、胄首を取りて馳せ歸る。此日の一番首なり。勝成荒者にて人を物ともせず。忠重の心に忤ひ、虚無僧となりて國々を廻りて武者修行す。後に忠重死して東照宮勝成に三州刈屋を賜はり、日向守と稱して大坂の時、大和口の先陣として大功有りし人なり。勝成十萬石を賜ひて後愈士に下り身を賤くして、總て士に貴賤は無きものなり。主君となり従者となり、互に頼み合ひてこそ世は立つ習ひなれ。然れば、大事の時は身を捨てて忠義を爲す事ぞかし。汝等我をば親と思はれよ。我汝達を子と思はん、と常に士に言はれけり。年老て鷹野に出づる時、行歩叶はず、蒲團に乗りて士に昇れ、士番所にては蒲團と共に下に居て、年寄ての鷹狩可笑かるべし。烏捕らん爲に非ず。心有りての事なり、と度々言ひて打過ぎられけり。或時鷹狩の野にて昔勝成に仕へし士を見かけ、如何に懐しや。我方にて祿三百石なりしに、立ち去りて越前にて千石の祿と聞く。今爰に來られしは如何に、と問ふに彼士、仰の通祿は越前にて増し候へども、殿の下を勞り懇に遇し給ふ泥み、祿には換へ難く暇乞うて歸り候ひぬ、と申せば、勝成大に悦び、折にふれ思ひ出せしなり、とて即日祿を増し與へられけり。其の後勝成隱居して又鷹狩の時、彼士の家の門閉ぢたるを見て如何にと問はるゝに、美作守の心に背く事有りて暇を乞走りぬ、と答へしかば、彼者は越前の祿千石を捨てて、小祿の我家を慕ひて歸りし者なるに、如何に作州

は思へるにや。斯くいふ勝成は若き時、心得過ちて武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携へて虚無僧となりて日本國を廻り、或時は堂塔に夜を明し、或時は野にも山にも日を暮し、様様に艱難に遭ひ人にも誹られしが、一言虚妄を言ふ事なく、不仁の振舞せざりし故にや。今福山十萬石を賜りぬ。然れども下の情を知る事はこれ虚無僧たりし故なり。返すくも惜むべき士を失ひぬるよ。美作は下の事は知られぬぞかし。總て良き士は、主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず。假令少しの過有りとも、能き士は二度も三度も知らぬ體して、猶已難くば傍輩に諫めさせんものを。美作の政事歎かしきぞ、と泣かれけるとかや。

○本多忠勝忠勇の事附忠信の胃の事

東照宮小牧山に陣して御座しませしが、秀吉兵を分ち中入すと聞し召し、敵の迹に従うて向はせ給ふ。小牧には石川伯耆守數正、酒井左衛門尉忠次、本多平八郎忠勝を残させ給へり。然るに秀吉大軍を出して長久手に向はれけるを見て、忠次は、秀吉の本陣樂山へ押寄せ、火をかけて攻撃つべし、と云ひけれども、石川、秀吉後に變有りと聞きて、彌怒られなんと、強て押へて止りけり。忠勝は秀吉の馬印を見るより、僅に五百許引具し小牧に駈け出で、小川一筋隔てて秀吉に

相並び、長久手指て馳せ向ふ。路にて足輕を進め、鐵炮打かけ一軍せんとすれども、秀吉見ざる體にて取合はず。龍泉寺の前にて忠勝馬を川に打入れ口を洗ふ。秀吉、彼の鹿の角の立物の胃を著たるは大將よ。誰か見知りたる、と問はるゝに、稻葉伊豫守道朝、過し年姉川の軍に武者出立見知て候。本多平八郎にて候、と申しも敢へぬに、秀吉涙をはらくと流し、五百に足らぬ士卒をもて吾八萬の軍に駈け合はさんとす。千死に一生も無きぞかし。然るに道を隙取らせ、己が主君の軍に勝利有らせんと志、勇と云ひ忠と云ひ、誠に類無き本多かな。秀吉運強くば軍に勝たん。可惜者を討つべからず、とて弓鐵炮を制せられけり。斯て忠勝長久手に駈附きたれば、軍終りて敵味方ともに見えず。こは如何に、といふ所に、味方打勝ち小畑に入らせ給へり、と聞き、揉みに揉んで追附き奉り、御馬の傍に乗り寄せ、云甲斐無くも小牧に捨てさせ給ひ、斯る軍に合ひ不申、と申しければ、聞し召し取り敢へず、汝が躬は我身なりと思ひて小牧に止め、後に危き事無くてこそ軍には勝ちたり、と仰ありけり。其後天正十八年秀吉北條を打亡し、七月二十六日野州宇都宮にて平八を呼ばれけり。忠勝は下總の廳南に有りけるが急ぎ參る。秀吉諸大將並居たる中に呼出し、熊野より佐藤四郎忠信が胃を得させたる者あり。四郎が忠義後世まで語り傳ふ。四郎に劣らぬ人に著せなんとと思ふに誰か有る、と言はれしに、答ふる人なし。其時秀吉、四郎

に勝れる者は平八なり。子細は云々なり、と長久手の軍物語り、忠勝の有様詳に言はれて、即
 胃を忠勝に賜はりければ、忠勝而自身に餘る心地して出でられけるに、其晩又忠勝を招き、傍
 の人を遠ざけ、自茶を與へ、今日いくらも諸大將並居たる中にて、汝が武勇を褒め擧げたるは
 秀吉が恩ならずや。主君の恩と何れぞ、と問はるるに、首を低れて物言はず。頻に問はれければ、
 忠勝承り、誠に忝しとは申せども、累世の主君の恩と比ぶべきに非ず、と申されしかば、秀吉
 愈感ぜられけり。

一説に、忠信の胃を賜はりけれども悦ぶ色なし。如何にといへば、否とよ。忠信武勇然のみ
 羨しくもなし。主君と仰ぎし九郎判官も吾爵位も同じ。唯世々家に傳へたる鹿角の胃こ
 そよけれ、と言はれしとぞ。後忠信の胃は二男忠朝に譲り、鹿角の胃は嫡子忠政に譲られた
 りき。忠朝も思ふ所や有りけん。其の胃に鍔も附けずして置かれしとぞ。

○榊原康政秀吉を誹りて札を立てられし事

小牧陣の時榊原康政、秀吉の事を誹りて札に書き、織田家に向ひて弓を引く事、不義惡逆の至り
 なり、と書いて所々に立たるを、秀吉齒嚙して怒り、康政が首を取らん者には十萬石の地を與へ

ん、とぞ觸れられける。其後東照宮と和平して婚姻の約有りける。始の使に康政を賜はるべし、
 と秀吉申されて京に上りしに、秀吉對面し、小牧にて札を立てたる時、汝が悪き首を一目見ん事
 をのみ思ひしに、今斯和睦に及べば其志を悦び思ふなり。此事を直に言はんが爲に迎へたり。
 小平太と呼ばんは如何なり。敍爵然るべし、とて式部大輔とは此時よりぞ申しける。儲養禮有
 りて厚く馳走有りけるとぞ。

○初鹿傳右衛門の事

勝頼亡びて後、武田家の士多く東照宮に仕へ奉る。前に領したる祿知を書きて奉れと仰せ出さ
 れけるに、初鹿傳右衛門は加藤駿河守が二男にて、兄の源五郎は川中島にて討死しけり。傳右
 衛門其祿を受継ぎたりし故、祿地を書きて出しけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合せて書記
 せり。駿河守が嫡子丹波三男を彌平次と云ふ。兄弟共に、傳右衛門は源五郎が祿をこそ申すべけ
 れ。駿河守が祿を合する事の有るべきや、と言ふ事聞えて本領四百貫のみ下し賜りぬ。傳右衛
 門、人は皆親兄弟の祿地を記し出して其儘賜りたるに、吾獨不然、とて御朱印に墨を塗り、詔は
 ざる故に斯る有様なり、と言ふを、岩間大藏左衛門訴へ申して、無禮なり、と仰せ有りて祿を召し

放さる。翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に來り、眞先駆け三宅彌次兵衛と争ひて首を取る。傳右衛門は内藤四郎左衛門が傍に參て、申し給はらんや、と云ふを、其間十間許にて御覽せられ、傳右衛門連來れ、と仰せられしかば、御前に跪く。如何に汝が無禮なれども今日軍の先駆けしたれば許すぞ、と御詞に傳右衛門涙を流しける時、三宅、先に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へど傳右衛門は猶進みて首を取り候、と申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

○秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉二重湊の城の櫓に上り見遣りて、高山右近大夫幸任を呼で、小牧に書翰を送り一戦せんと思ふなり。十三萬の軍兵陣を整へて押出し、後に柵の木結ひて引退かざる手立せんは如何に、と云はれしかば、高山、是は思召し止らせ給へ。小牧よりの返書必ず怒らせ給はん事を申し來るべし、と云へ共、秀吉増田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立てよ、と下知せらる。高山色を變じ、仰なりとも行くな、とぞ制しける。秀吉、忠興は弓箭の激しき所へは思ひも寄らじ、剛の者を使にせん、と言はれしかば、忠興高山を睨みてつと立つて馬に乗り、竹に書翰を挟み乘行きて、村立つたる松原の小塚の上に押立て歸るを見て、秀吉悦ば

る。稍有りて小牧の陣より月毛の馬に乗り、紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。暫時有りて金の枇杷籠の指物さし、鹿毛なる馬に乗りたる武者、書翰を竹に挟み、元の所に立ててけり。彼れ取來れ、と言はれしかば、忠興又馬に乗り馳せ行きて取り歸るを、秀吉披きて讀るゝに、東照宮の返書にはなく、渡邊半藏重綱、水野太郎作正重が書簡にて、其詞に、後に柵結ひて一足も引くまじきと思ひ定めて、軍有らん事兎も角もの事に候。三河者下部に至るまで、一足も過ぐると申す事露計も不存候、とぞ書きたりけり。秀吉讀みも終らず怒られければ、高山、されば斯く候はんとて申したる事よ、と居丈高に成りて申す。秀吉冷笑ひ馬牽出させひたと乗り、僅四五騎許にて松原の小塚に上り、臀を打ち叩き、敵の大將是喰へ、と大音に呼はるを、小牧より唐冠の冑に孔雀の尾の羽織著たるは秀吉よ。剩すな、とて鐵炮を打ちかくる。秀吉、天下の大將軍には矢の中る物かは、と言ひて、靜々と歸られけり。

○東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入す、と告來る時、祐筆尊通といふ者、御出馬可被成者也、と書きけるを、東照宮、此可の字を削れ。今日に於ては一字も大切なり。大敵を前に置き可出馬とは後れたり。

出馬するとは其時を脱さぬなり、と仰せられけり。

○東照宮の御軍畧に依つて蟹江城降参の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城前田與十郎を御攻めあらん、とて打向はせ給ふ所に、加勢多く馳入りけるを御覽じて、敵如何程も城中へ入れよ、と仰せられしを、酒井左衛門尉忠次承りて、何とて押留給はぬぞや、と申す。東照宮、如何思ふぞ、と御尋ね有りしかば、忠次、城は堅固なり。多勢籠りなば争か攻め落すべき。如何なる御心か候、と申すを聞し召し、大將謀を言ふやうや有る、と仰せられけるが、其後援兵の乘來りける船を追ひ拂はせ、糧道を絶せ給へば、糧忽乏しく成りて城を渡し降参しけり。東照宮四十二歳の御時なりとかや。

○九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵を進む。秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乗り、蟹江の港に漕ぎ入れて打上り、堤を隔てて戦はんとせしが、引退きて船に乗るところに、入江の港に東照宮の兵船角新造と言へるを横様にして、左右に亂杭を打ち、真中に取圍まんとす。直政

は追懸くる。九鬼が者共多く討たれ、水主楯取驚き騒ぎて船を出し得ず。斯る處に九鬼が土村田七兵衛鐵炮に薬を込め、間宮造酒亮が舳先にて下知しけるに、大音上げて靜に相だめにするを、兩軍鳴を靜めて見物す。其中に九鬼が者共ひたく、と船に乗組たるは、村田が躬を捨てて沈めん爲の謀故なり。斯て村田思ふ矢坪に中りて間宮倒れしかば、九鬼が者共力を得鐵炮を打かけ、船を乗り浮めて港を出でにけり。

○中村一氏紀州の一揆を追拂はれし事

秀吉小牧に陣を出す時、紀州の根來雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔一氏を岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆秀吉大阪を打立つと聞きて、二萬三千許二手に分れ、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押寄る。早り雄の若者共二騎三騎城を出でて、寄手に向ひしかば、士大將早川助右衛門、川毛惣左衛門引歸れ、と使を遣るを、一氏聞きて、斯る時進んで行重りたる武者を引かんとすれば敗北するものよ。いざ打出でん、とて鐵蓋が峯と名附けし冑の緒を締め城を乗出す。先に進んだる者共菅笠の馬印を振り返り見て、すはや殿こそ出で給へ。軍は勝ちたるよ、と言ふ程こそあれ、一萬餘の紀州勢に面も振ず切掛り打破りて、七筋に分れて逃るを

追ふ。一氏は三百許にて、堂の池といふ所に控へて先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬櫛暗う見ゆ。是は堺に向ひたる敵の返し來れるなり。荒手の大軍に駈け合つて戦はん事思ひも寄らず。疾く城に楯籠らん、と口々にいへば、一氏、否々退くならば味方氣挫けて打負けなん。一寸も退く時は、先陣を捨殺し、城をも攻め落さるべし。一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切崩すならば、二陣は忽ち敗北すべし。我に任せよ、とて敵の一同に掛り難き地の理を料り、堂の池を前にして大敵を待たれけり。一氏、馬をば悉く城へ返し候へ。馬を引附け置く時は引退きたき心の起るぞ、とて將几に腰かけ、旗本三百許の勢、鎗を膝の上に置きて折敷たり。新藤勘左衛門強弓矢繼早の手利なるが散々に射る。射白まされて手負死人倒れ重りて躊躇ふ時、一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せ、と下知せられしかば、愈指詰引詰射ける矢に空矢無かりけり。一氏、魔を取り掛れ、と言うて立ち上る。黒田如水は大坂に在りしが、岸和田に敵押寄すると聞き、子の長政十四歳になりしが岸和田に在れば、いざ救はん、とて七百許にて敵の後に駈け來るを一氏見て、愈進み喚き叫んで切つてかゝり、追つ立て八百餘の首を取りたり。如水は長政如何にと思ふ處に、黄羅紗の羽織著し鹿毛なる馬に乗り、今朝討ち取りし首を、鞍の四方手に附けて馳巡るを見て悦はるゝ事大方ならず。秀吉一氏に感狀賜ひてけり。一氏は豊臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば、加

藤嘉明も羨み慕ひて、吾子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

○竹中重治の事

竹中半兵衛重治は美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀略有る人なれども打見たる處は婦人の如し。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める甲を著、木綿の羽織一の谷と名附けたる冑の緒をしめ、静り返りて居けり。重治向ふ度毎に士卒戦はずして既に勝ちたり、と勇み合へり。重治或時軍物語せしに、子の左京未だ幼かりしが、座を立ちければ、重治軍は國の大事なり。何方に行く、と問ふ。厠にゆく、と答ふ。重治、爰に溲をたるくとも、軍物語の大事の席を立つ事やある、と怒られけり。

○戦國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士、戰場にて必ず眞先に獨進み出、芒の如くなる所に居ける故、世の人は是を芒の治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃飛驒に隠れ無く、若き頃より功名有り。芋がら島、鎗澤一番なり、と言ふを、吾には非ず稻葉なり、と云ひて、互に讓りて決せず。澤は早く

進みたれども稻葉が母衣の手をしむる隙に先に乘込たり。實は一番稻葉なり、といふ。人皆是を賞しけり。有吉武藏が足輕鐵炮に鎗を持ち添へて鐵炮を搏ち、其上に壹番鎗を合せたるが、吾一番に非ず、園部儀大夫が母衣の手を締むるを見て駈け出でぬ。園部が一番なりと譲りしと同じ事にて、戰國に斯る士は稀なる事にこそ。

○羽柴勝雅敵を免す事

羽柴ト總守勝雅の許に二藏三藏といふ有り。何れの城にての事にや有りし、下總守城より出でて働き、引取りたるを敵附來る。二藏三藏門を固めて揚簀戸を下して敵を立籠めたり。勝雅下知して門を明け、敵二人を出して討ち取らず。近藤石見守加勢たりしが、其子細を問ふ。立籠められたるは死地に入りたる敵なり。是を討たば城兵餘多死傷すべし。打止めたればとて軍の勝敗に與らず、と答ふ。石見守武功の人なりし故大に感じたり。

常山紀談 卷之七

○前田利家末森城後卷合戦の事

瀧川一益、佐々成政等信孝を推崇て秀吉と弓箭を取りしに、天正十二年九月成政八千の兵を率ゐて、加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福後伊豫が守る所の能登の末森の城を圍む。成政旗本を以て後卷を押へ厳しく攻むる。此城だに打破らば、能登は一日に討ち従ふべし。後卷無き中に乗取れ、と下知しけり。奥村僅に三百許の士卒にて爰を詮度と防ぎけるに、餘りに強く攻められて、今は是までなり自害せん、と云ひけるに、助右衛門が妻小袖を掻い取り鉢巻をし刀を横たへ、女房に粥を手桶に入れさせ、堀裡の人々に自ら飲ませ、昔桶とやらん云ひし大將の、日本國を敵にして城に籠りたりと聞く。明日は金澤より後詰の候べきに、只一夜防ぎ給へ、と云ひて打廻るを、奥村見て、今日の振舞男子に優れり。此城を女の方にて持得んは口惜し、と自負の色あり。此城手易く落つ可からざるを見て、火攻にせんと云ふ者あり。成政、否々大手の城門を取りて富山の城門とすべし。又石動山の衆徒も吾に心を合す。火攻には爲可からず、と下

知して、既に二三の丸を攻取りて夜の明くるを待ち居たり。末森より金澤へ行程九里許、其日酉の刻に斯と告げて、夜の明くる迄は堅く守るべし、と申し送る。利家聞き、敢へず金澤の城の廣間へ出で、利長を呼んで、汝は城の留守せよ、と下知せらる。利長、否々眞先駈けて佐々を打破るべし。殘止らん事思ひも寄らず、と申されければ、利家、然らば父子打向ひ、敵の不意を討に利有らん。軍兵を整ふるに及ぶ可からず。馬に鞍だに置くなれば一騎駈に打出でよ。一足も疾出づるを今宵の功と爲可し、とて富田與五郎後越に、汝津幡に行きて不破彦三に末森の後巻の先手せよと言へ、と下知せらる。富田己が宿所に馳せ歸り、馬引き出し打乗り、諸燈を合せて駈け行きけり。利家、士卒皆汁を掛けて飯を喰へ、とて物具せらる。庭には黒の馬を引き立てたり。利家の北の方春院三方に鬨斗を入れ父子に參らせられ、扱人々聞き給へ。我は利長の母なり。今日の後巻は誠に大事の軍なるべし。各心を合せ功名し給へ。末森を敵に取られなば、各達も討死し給へ。我も人手にかかり候まじ、とて利家の側近く進み寄り、末森を敵攻め落しなば討死させ給へ。利長も母が此詞を能く聞かれよ。生死の別れなり、と言はれしかば、利家、あら心よや。成政を打破らん事必定なり、と言ひも敢ず、物具の上帯を締め、結べる端を切つて捨て馬に打乗り、父子の兵五百許に過ぎざりけり。利家馬上にて、味方の小勢は吉事なり。佐々が思ひ

も寄らざる所に切つて懸り打勝つべし。奥村討たせなば生き甲斐無し、と言ひつゝ、津幡の町を北へ打過ぎられたる時、富田乗り來る。津幡は金澤より四里餘の行程なり。利家、汝何處に寢て有りけるぞ、と罵らるゝを、富田聞きて、津幡に脚附き不破が門を叩き申し渡し、不破物具著て候を見て打出で候へば、はや門外に旗を指出し候ひぬ。何國にか寢申す可き、と言ふ。利家尙聞き入れざりしかば、富田怒つて其日の一番鎗を合せけり。是利家士を激するの術なるべし。利家の士卒追々馳せ附ければ三千餘りに成りけるを、一陣に分け、一陣は敵の後に打懸り、一陣は敵の旗本に突いて懸る。成政軍兵疲れし上思ひ寄らざる所に、奥村も門を開きて打つて出でしかば、成政大に敗北せり。是天正十二年九月十一日の軍なり。後に聞くに、成政山の尾崎を越え、敗軍を集め陣を立直し、見よ、今前田と言ふ男が、勝ちに乗り陣を亂して懸り來るべし。大返にして利家を打取るべし、とて物見二騎を出せしが、乗り歸りて、敵は城を後に當て、静り返りて懸り來るべき物色候はず、といふ。成政謀違ひけり。

末盛後巻の事、加越合戦記に見えし處、大同小異にて詳なる故併せて爰に記す。利家は加州の内石川北能登全州を治め、金澤の城に有り。成政は越中の守護にて、新川郡富山の城に有りしが、越中立山さらく越の難所を、僅に従者百許にて忍びて打通り、東美濃へ出

で、秀吉と織田家の弓箭、大敵に手易く勝ち難からん。成政、北國より攻登りて前後より挟み打ちて秀吉を亡しなんには、加賀、能登、越前三州を賜はり候へ、と信雄に相約し、又さらく越より富山に歸り、佐々平左衛門、神保安藝守と相計り。成政の二人の女有りし中、一人は秀吉へ人質に出し置きたりしかば、其妹を利家の二男利政に妻す可き由を平左衛門して言せしかば、兩家縁を結び目出度し、と言ひ合へり。天正十二年七月二十三日、成政の使佐々平左衛門金澤に赴き、祝ひの物取揃へ相贈りけり。利家篤實の人なれば、成政の奸謀有りとも知らず、引き出物して悦びの上、村井又兵衛を謝禮の使とせらる。成政、八月は忌み候、とて延置き、夜々北の櫓にて軍評定せられけるに、心附きて密に利家に知らず者あり、利家虚實辨へ難しと雖も、怠りて不意の變に打負けなば弓箭取る身の恥辱なり、とて加越の堺朝日山に城を構へ、村井又兵衛を大將として、千五百餘りにて守らしめん爲め柵を附け廻る處に、八月二十八日成政より佐々平左衛門、前野小兵衛に五千の兵を指添へて押寄せたり。加賀の者共居住の支度せんとして金澤に歸りたるも有りて、折節七八百には過ぎざりけり。然れども村井大剛の者にて、味方を勇め立つる處に、利家馬廻りの士阿波賀藤八、江見茂十郎見廻ひに参り合せしが、急ぎ歸りて注進を頼まばや、と云ひければ、兩人色を變じ、金澤に

在りとも斯る事を聞かば馳せ來る可きに、參合せたるこそ幸なれ。然るに空しく歸れと言ふ事や有る、と怒りければ、村井聞きて、誠に頼母しき事悦ぶに餘り有り。但し路次に一揆起りなんは必定なり。各歸りに恐あらば爰に止られよ、と云ひしかば、兩人此詞を聞きて、扱は路の一揆を恐れて歸るまじとや。然らば駈け歸つて申さん、とて馬に打乗り、金澤へ四里半許なる道を只一時に馳歸り斯と申せば、利家然らば後卷せよ、とて不破彦三、田野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隠岐、武部助十郎などを打具し、貝を吹せ揉に揉んでぞ急がれける。折しも大雨降りしかば、成政の兵も一時に攻破り難しと思ひけん、城を攻めずして引歸しぬ。是より和談破れければ、能州七尾には利家の弟五郎兵衛安勝、同孫右衛門良繼、高島織部、中川清六、長九郎左衛門等三千餘にて籠め置き、能登加賀越中の堺末盛に奥村助右衛門に千秋主殿助、土井伊豫を添て、千五百許籠められたり。加州津幡の城には前田右近、越中の堺鳥越には目加田又右衛門、丹羽源十郎を籠めたり。成政も俱利加羅の嶺に城を構へ、佐々平右衛門二千餘、利波の城には前野小兵衛に二千、青山の城には國士菊地伊豆守、荒山に城を築き、神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて七尾の押とす。神保は成政の聲なり。四千の兵をもて森山を守りけり。利家斯と秀吉に告げられければ、秀吉聞きて佐々

を疑ひ、加州に又左衛門を置きつるは吾謀りしに違はざりけり。利家兵少しと雖も必ず成政に切り勝つべし。頓て師を出し、成政を討亡すべきよ、とて使者に黄金三十兩與へられぬ。九月十一日成政末盛へ押寄せ、二里許傍の坪井山に切所を前に當てて陣し、佐々平左衛門、山下甚八、前野小兵衛を始として八千餘攻寄せ、外構の町家に火を懸けんとす。土井伊豫、敵に町家を焼かれては生甲斐無し、とて二百許にて突いて出で、散々に戦ひけれ共、大敵に掛け合はせ終に討死す。城兵も爰を専途と防ぎける間、速に落つ可しとも見えざりしかば、成政後卷、心元無し、とて神保安藝守氏春に四千餘を差添へて、川尻と言ふ所に陣して、加州の道を塞ぎたり。利家末盛より告げ來ると等しく金澤を打立ち、不破彦三、村井又兵衛を先陣とす。

一説に、成政嚴く攻めて、二三の丸水の手を乗取り、木丸に攻詰めたり。末森の飛脚息切るばかりに金澤に馳來り、文箱を投げけるとぞ。

十一日未の刻の事なり。末森は水に乏し、廣岡の水を汲みて榮螺に入れ、急ぎ追附よ。後卷の土産にせん、とぞ下知せられける。偕同國松任と言ふ所、金澤より三里許隔りて利長居城なれば、疾くく末森へ向はれよ、と言ひ送られけり。金澤より四里許なりける津幡の城

へ急ぎ押附けられしかば、弟の右近秀繼、廓外に出向ひ、利長を待る可きや、と言はれしかば城に入られしに、利長茂の刻ばかりに津幡に馳せ著かれけり。利家悦んで、吾成政と若き頃よの數度の軍に逢ひつれども、利家を越したる事一度もあらず。然れども成政侮るべきには非れども、無二無三に一合戦して勝利を得ん事掌の中に有り、と大音揚げて呼はり勇み進まれけるに、寺西治兵衛入道右近と相議し、早や末森は落ちたるならん。殊更川尻に神保多勢にて道を切り塞ぐと聞え候へば、後卷は如何候はん、と申す。利家大に怒り、汚き諫は必ず口にも出さまじき事ぞとよ。人は一代名は末代とこそ聞け。奥村や土井を捨殺して已來、假令日本の主となる共此恥辱雪ぐ可からず。成政大軍にも有らばあれ、吾馬廻り計にても快く軍して勝負を決せん事不足なし。如何に村井、汝は如何に思ふぞ。是非一戦と思ひ定めたるぞ、と詞を掛けられしかば、又兵衛聞きも敢ず。有無の一戦の外何の是非か候べき、と云ふ。利家悦んで、村井が心も吾に同じ、とて早打立たれしに、右近茶漬飯を進め、且上手の占師の山伏の候。召して軍を占はせられんや、と問ふ。利家氣色良からねど、夫々とて呼出されけり。五十許の山伏なり。懐より書物を取出す。利家ともあれ後卷に決定したるよ。能見よ、と言はれしに、山伏書物を懐に入れ、今日吉日なり、時も吉時なり、と言へば、

利家、汝功者なり。頓て打勝ち賞美すべし、と快けに打出で、勇み進んで押行きけり。村井、不破先陣、原隠岐、前田又次郎、片山内膳二陣、田野村三郎四郎、青山與惣兵衛、近藤善左衛門、前田慶次郎押續く。宮川但馬武者奉行たりと言へり。川尻の此方一里許、高松と言ふ所にて、利家冑を取つて著、忍びの緒の餘りたるを切つて捨てられしかば、諸は今日限の軍よ、と人人生きて歸るべしと思ひも寄らず。篠原勘六とて利家の近習の士二十三に成りしが、横根を煩ひ起臥も心に任せず。然れども是非打立つべき、とせしを、汝は残り留りて、吾討たれば堅く城を守りて秀吉の後巻を待ち候へ。叶はずば其時腹を切れ、と下知せられしかば残りけるが、乗物に乘り奥力の士二十騎打具し、川尻近く成りて馳附き、篠原勘六參り候ひぬ、と大音に呼びければ、是を聞く人々、天晴剛の者なり、と云ひ合へり。川尻よりは津幡に人を附けて窺はするに、馳歸りて、前田父子津幡まで出でたれども、後巻有べしとは見えぬ、と言ふを聞きて、神保は大に備を寛めけり。利家先陣に乘行きて、村井不破に濱際を一騎打に馬の舌を卷かせ、如何にも靜に押通れ、と下知せらる。神保は兵を押出し待ちかけたり、と物見の言ひしかば、又富田越後門といへりを物見とせらる。馳歸りて、敵は一人も候はず。川の杭の多く候を人と見誤りたるならん。疾うく押せられ候へ、と申す。利家、川杭とは何を證

にせん、と問はるゝに、越後、されば候、武者ならば並ひの揃ひ候事有るまじと存ず。猶も慥に見ん爲に、川中迄馬を打入れて心靜に見て候。是を見損じ候程ならば再び弓箭は取るまじ、と申す。利家、汝が見る所こそ正しけれ。士の手本にせよ、と悦はれけり。諸兵を進めて押通るに、神保是をば夢にも知らず。後れて聞附けたれ共、利家は今濱と言へる右の上なる山に兵を押附け陣せられしに、夜明けにければ利家馬を乗廻し、兵糧を遣ひ候へ。今日の軍勝つべき事心易かるべし、と下知して、皆馬より下りたり。爰にて見れば利長七八百許、兩先陣千三百許、旗本千五百には過ぎざりけり。利家、今日の軍に功名せん輩は取分て賞すべし。若討死せば必ず子孫を見放すまじ、と高らかに下知せられ、夫より山を下りて兵を進むるに、道二筋有り。一筋は末森の道、一筋は成政旗本への道なり。村井、坪井山へ押寄せ、成政を虜にせん、と申す。利家聞きて、尤なれども、成政必ず嶮を前に當ててや陣すらん。只末森へ馳附け敵を追崩し、城中の者共に力を附けんは如何に。村井承り、可然候。城中の士共只今の仰を承り、さぞ辱からん、と言へり。程無く末森近く押詰めたれば、村井が者共餘多首を取來る。末森には二の丸に籠りたる千秋主殿助、瀧津金右衛門已下寄手攻め入るを追出し、力の限り戦ひけるが、討死餘多に及べり。本丸も既に危く見ゆれ共、奥村助右衛

門少も氣を屈せず、支戰ひける處に、砂山に當て朝霧の晴間に利家の馬印見えしかば、力を得勇み悦ぶ事大方ならず。今少し後卷遅かりせば城陥るべきに、運を開きしは偏に利家迅速の兵機を得られし故なりけり。村井又兵衛、田野村三郎四郎を始として、鎗を打入れ散々に戰ひけるが、成政先陣の大將佐々與左衛門を村井突伏せければ、士三十餘人枕を並べて討死す。利家の先陣佐々を討ち取り、鬨を作りかけ切崩せしかば、寄手敗北しけるを、利家見て搦手へ廻られけり。寄手にも究竟の兵餘多有りて待ちかけたれば、利家旗本五十騎許靜に懸りける所に、半田半兵衛真先に進み、一番鎗と名乗りける所を、櫻甚助鐵炮にて撃ちたりしかば左の手に當り、鎗を抱きて倒れたり。半兵衛と甚介は從弟なりしが、指物にて見知りける故、甚介も、半兵衛存命へすば不便なる事を爲たるよ、と涙を流しけると後には聞えけるとかや。利家、敵の鐵炮烈し、延々にせば叶ふまじ。たゞ懸りて追崩し候へ、と金の切裂の采配を取つて下知せられしかば、會釋も無く競ひかゝりて押崩す。寄手餘多討たれて敗北せしかば、金澤の士勝鬨を嘯とぞ上げたけり。利家城中に乘入りて奥村を首詞を掛け、今度籠城の勵言語の及ぶべきに非ず。利家如何に思ふとも、汝が言ひ甲斐無くて城を明くるか。又攻落されなば口惜かる可きに、斯る功名やある、と勇め立てらる。其

時野村傳兵衛、山崎彦右衛門一度に鎗を合せたり、とて一二の爭論せり。利家、半田が真先駆したるに冥加無く深手負、志を遂げざれども勇士の志は顯れたり。二士一同に鎗を合せたれども傳兵衛名乗たれば、一番をば野村に極めたるぞ。と下知せられ、二人に千石の加祿を與へられけるとぞ。半兵衛は疵癒えて二千石與へ、士十五人與力に附けられけり。成政の旗本へも後卷の由聞えしかば、然らば一軍せん、とて八千許押出す。利家は是を見て、此勇める勢には百萬もあれ恐るゝに足す。先陣は又兵衛せよ。二陣は城主なれば奥村、三番は不破彦三と定められけり。能州の國士長九郎左衛門四五百許にて馳來る。敵味方分明ならねば物見を遣るに長が兵なり。遅く馳附きつる事口惜き事なり。弓箭の冥利に盡きたり、と憤りけるを、物見の脇田善左衛門、野村七兵衛聞きて馳歸りて具に中せば、利家長を感ぜらるゝ事大方ならず。皆とりぐに長が志を褒立つれば、努々後れたるに非ず。淺からざる譽なり、と誓紙を添へたる書を長に與へられたり。成政如何に思ひけん、打出したる兵を引き纏ひ、山に添うて引退く。折しも武者修行して來り居たりし本多三彌は、無二無三に掛りて成政を討ち取るべきに、と云ひけれども、猛將の成政なればこそ手軽く引拂ひたれ、と人々言ひしかば附慕はずして止みにけり。討取り、首七百五十三とぞ聞えし。利家は成政城

を攻め落さず空しく引返す事を怒り、引退く體にして津幡の城へ寄せんも計り難し、とて奥村を城に止め兵を數多指置きて末森を打出でられしに、追々に兵加はり一萬許に成りにけり。又不破村井を先陣として濱邊に指掛り、津幡に馬を入れられしかども、成政は津幡に押寄せずして引取りけり。佐々が軍兵金の鬘斗の指物したれば、坪井山は輝き渡りて見えけるを利家打詠め、天晴見事なる備立よ。頓て成政を攻亡し、我士卒に指さすべきよ、と言はれけるとぞ。秀吉此勝利を聞き、日本に比類少き武功と賞せられぬるとかや。利家奥村に其日持たせられし馬印、金の切裂の采配著けられし甲冑を賜りて賞せられしといへり。

○利家鳥越城を攻めらるる事

天正十三年四月八日、前田利家金澤を打出でて鳥越の城へ押寄せらる。鳥越の城は金澤より元兵を入れ置きたるが、去年末森の時城を明退きて、成政の軍兵入り替り守りければ、利家は憤りて攻め落さんとの志なり。城兵も久瀬但馬守、其外撰みたる者共五百許、門を開いて突いて出で、利家の先陣を追つ立つる。利家は傍なる山の尾崎に陣して馬を立てられしに、味方敗北するを見て、山崎少兵衛は如何したるや。早や返すべき鹽合なるに、と言ひも終らぬに、白き羽織に

て進み出でたる者の候、と言へば、利家、山崎出でたるよ。早味方勝ちたるぞ、と言はれけり。旗本の早り男の者共駈け出でんとするを、敵の勢競ひ懸りて足も踏止難き時なり。今少し待ち候へ、と下知せらる。徳山五兵衛、只今鎗を合せたと見えたり。地煙立ち候、と言ひけり。然るに近邊の越中の兵城々より助來て敵の陣は黒けれども、山崎が與力鷲津九藏と名乗り鎗を打入れたり。早懸られ候へ。左なくば九藏危しと言へ共、山崎静れ、と云ふ詞の中に九藏倒れたるを見て、山崎進み出で鎗を打入れ、押崩して城際まで追ひ打ちにしたりけり。城兵門を指固めければ、利家強て攻めずして引返されぬ。此軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居たるが、成政馬廻の將杉江彦四郎と組打して谷へ落ち組敷かれ、杉江刀に手を掛けたる處を、下より少藏小脇指にて具足の鎖のはづれを刺通し刎ね返しけれ共、氣疲れて首を取ることを得ざりしに、片山内膳が從卒來りて少藏を押退け、相討と云ひて首を取りたり。利家細やかに事を糺明して少藏が功名に定り、勘氣を許し鞍置馬を與へられけり。

○本多重次強諫の事

天正十三年三月、東照宮濱松の城にて疔を病せ給ひ、近習の若き人に膿を強く押させ給ひしに

よりの痛み甚しく、已に事切れさせ給ふ、と城下には申しける程の事なりけり。今はかうとや思召けん、御遺言を仰せ出されしに、本多作左衛門重次参りて、先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が薬を附させられよ、と申しけれ共、聞し召し入れさせ給はざりしかば、作左衛門大に怒り、殿は徒に死し給はんよ。此作左衛門は年老いぬれば、只今自害して待ち奉る可し、とて座を立ちけるを御覽じて、如何に作左衛門氣狂ひたるか、未だ存命へたるに自害とは何事ぞ。吾亡からん後こそ大事なれ、と申されし時、作左衛門、夫は人に依りての事に候。若き時より幾度と無き軍場に數ヶ所の手を負ひ、世の中の崎といふ崎は身一人に掲げ候ひぬ。今日まで殿の御情にて人がましくも候なり。只今殿過ぎさせ候ひなば、北條を始として敵國攻め來らんに、殿に後れ奉り、はかなくしく軍する者や候べき。國は忽ち滅亡すべし。其時作左衛門は路の邊に餓死せん。彼れこそ徳川家に奉公せし本多作左衛門よ。何を頼みに存命へたるなど、人に嘲り笑はるべし。近きは武田の内にて甘利殿とて人の敬ひたる人も、武田の運盡きぬれば、今は本多平八郎が組となり、屈まり居るを見るも哀なり。是は人の上ならず、勝頼の不道にて滅亡したるも、殿の薬を嫌ひ給ふも同じ理に候、と申せば、東照宮尤なりとて長閑を召し頓て薬を奉り、灸を大にして作左衛門据る奉りければ、夫より痛み稍軽くならせ給ひければ、作左衛門聲を上げ泣いて悦び

しとぞ。

○秀吉東照宮に和を乞はれし事

天正十四年正月、秀吉織田源五郎長益、羽柴下總守勝雅、天野作左衛門三人を使として、東照宮に和平を乞はれけり。三人歸りて、和平思も寄らず。重て來らば首を切らん、と徳川殿申されし由申し入る。又重ねて三人を三河へ遣し、強ひて和平を請はせらる。東照宮三河の吉良にて、左の手に鷹を据ゑさせ給ひて三人に御對面あり。三人申しけるは、信雄卿の厚恩を忘れての事には候はねども、秀吉計略し、瀧川三郎兵衛に羽柴の姓を與へ下總守になし、神戸の城主として三萬石の加祿し、其外數多都に妻子を置き、自ら人質と成り候ひぬ。科々の謀候へば、此度和睦候はずば秀吉軍を出し、清洲にて勢揃へして打向ふべきことなり。四國中國の兵も相加はり、去々年小牧の時より兵十萬も多かるべし。由々しき事に候、と申しければ、東照宮聞し召し、去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平の時、我方にも已來別の事あらじ、など云ひたるも、我を謀るの謀にて、吾家の石川伯耆守に十萬石與へて我に背かせたり。吾弓箭を取つて發向せんと思ひしかども、織田殿の國を打過ぎて軍せん事如何にと怒を押へて止みぬるに、無禮の事共なり。秀

吉清洲にて勢揃せんことを望む所なれ。鳴海表にて一軍參るべし。然らずば東美濃に打出て土岐、遠山、惠奈三郡を切り取べし。とて鞭を指上げられ、此鷹一もとにて手配すべし。とて打笑はせ給へば、三人歸りて秀吉に斯くと申す。秀吉聞きて、さても大勇將かな。今夜思慮すべし。と言はれし時、丹羽長重進み出で、必ず軍は思召止り給へ。長重が士共刀の鞘袋を設けし故、子細を問ふに、鞘に三卷を拵へ、合戦の時は鞘袋を捨てて三河武者に紛れ、命を助るべき支度なり。と申しも果てぬに、蒲生氏郷、堀秀政も、皆々士卒其心得に候。萬に一つも利候まじ。と言へば、秀吉、よしよし徳川家を打破りて各に見せん物を、とて止みければ三人退出し、道にて、彼猿は死所無くて物に狂ふや、と私語きたり。翌日諸將を集め、三河を打滅さんは安けれども、智勇の大將なれば、吾日本を治むべき事を相談せん爲に縁を組み、妹を嫁して和平せん。とて又三人を遣れしかば、東照宮三ヶ條の誓文を御所望有り。秀吉許諾して和平に及ばせ給ひけり。四月秀吉の妹濱松に御座まして、後に京に登らせ給ふ可き旨を秀吉請ひて、秀吉の母の大政所を質とせられしかば、都に登らせ給ふ可きに定りけり。長臣共、是は危き事なり。然る可からざる由諫め申せども聞し召入れ給はず。其時申しけるは、和平又破れ秀吉攻來り候とも、素より鋒先の強きは言にや及び候べき。何十萬の大敵なりとも打負候まじ。強て思召止り給へ、と申しければ、東照宮聞し召

し、諫むる旨尤理なり。然ども秀吉に畏れて行くには非ず。日本久しく兵亂にて四民安堵せず。此頃稍治りたるに復秀吉と弓箭を執らば、何時の世にかは靜謐せん。只疾く秀吉に對面して日本大平の基とせん。若し危難に及びなんには、萬民の命に替らんにか惜かる可き。とて九月二十日濱松を御首途有りけるに定りければ、人々、二十日は四ヶの悪日とて千人出て一人も不歸と申し傳へ候。一日御延引然る可からん、と申す。東照宮、千人行きてこそ大事も有らめ。我今度一萬二千の軍兵を引具し上京す。此軍兵一人も生きて歸らずば吾爲の大吉事なり。とぞ仰せられける。井伊直政を御留守居とし、此度秀吉許を構へ變に及ぶとも危からじ。尾張大納言信雄は必ず吾に告げ知せて味方たるべし。丹羽五郎左衛門は秀吉に恨有れば心を合せなん。其外吾に志を寄する人多し。去ども我も亦其備無からんや。秀吉不意に謀をなすならば、京都に火をかけ東寺に楯籠るべし。其時素より立て置きたる汝が組一萬を五百づつ二十に分ち、外に酒井柳原が今度京に上る供の外留置きたる兵一萬、是も二十に分ち、佐屋の渡を越え千種を押上るべし。若し大津にて支ふるならば、武田四郎が長祿にて懸りし如く切つて懸らば、上方武者一支も爲べからず。又瀬田の橋を焚きたらば宇治より攻め入るべし。新七、籠之介と云ふ角力取二人は宇治の案内者なれば召具すべし。斯の如くならば秀吉聚樂を退きて大坂に引取らん所を、

東寺と清水と兩方より挟みて打破らんに恐るゝに足らず。秀吉詐妄の謀を爲さば、吾天下を掌に握るべき兆なり。と仰せられ御出馬有り。秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり。然れば危しとは知し召されけるが故に、萬民の命に替らんと御詞、天地神明も感應して遂に國運を永世に開かせ給ひけるにこそ。

○東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事

東照宮聚樂にて秀吉に御對面禮有りける日、秀吉白き紙子の羽織に纏したるを著られけり。蒲生氏郷其頃三十二歳にて、狐紙子と名附け呼れしとなり。

淺野彈正長政、彼羽織を御所望候へかし、と私語きければ、東照宮、漫に人の物を貰ひたる事無し、と仰せあり。長政又、御所望候ひなば秀吉大に悦ばれ候べし。素此羽織は物具の上に著んと設なれば、一旦は辭し申されんを、強ひて乞得させられなば、秀吉何事の悦か是に増るべき、と強ひ申せば、東照宮止事を得ずして許容ましくけり。儲聚樂の城門にて毛利、浮田を始め居並びて拜謁し、さて茶を奉りて後、東照宮彼羽織の事を仰せ出されしかば、秀吉悦びて手づから著せ奉り、扱大名に向ひ、我に物具させまじとの事ならずや。誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なり。

とぞ語られける。東照宮歸らせ給ひて後、長臣達に聚樂の事ども御物語り有りける時、吾に羽織を贈りて後、秀吉吾に物具させまじきとの志なりと諸大名に向ひて云はれしは、斯る後は争か秀吉の鋒先に向ふべきと中國西國に語り次ぎ言ひ次いで、普く世人の口に有るべし。筑紫の末までも聞えなん。是天下の大名に威を示すの謀畧なり。其遠人の謀軌く測る可きに非ず。力を以て是を推さんとすると及び難き秀吉なり。去れども吾志す所は別に有り、とぞ仰せありける。

○本多正信遠謀言上の事

太閤東照宮を禮有りしに、かけ盤を始め器不殘葵の御紋を蒔給にし、誠に美を盡したる次第なりしを、東照宮本を正信に語らせ給ひ、如何なる思慮や有らん。吾も亦遠き慮有る可きなり、と仰せられしかば、正信承り、されば候。小笠原與八郎氏次は勇將の譽世上に聞え候て、誰々も旗下に附けばやと志し有りしに、氏次同心仕らで御家の旗下仰に従ひ候ひき。彼が内々の志は信長と朝倉と一戦有らん時、必ず三河より御加勢に御出馬有るべし。其隙を窺ひ御家の領國は己が掌の内に握らんと存じ候て、偽りて二心無き有様に候ひし。彼が計りし如

く姉川の合戦信十援兵を乞はれしに、小笠原を先陣に命ぜられし故、心中に扶む所有りと雖も、辭すべきやう無くして姉川にて御勝軍なりき。小笠原が一心無き體に見えしに、御乗りながら御心に乗せられぬ所有りし故、姉川の先陣小笠原と御定め有りて彼が支度相違せり。人の乗する所を乗らじとするも一物有て候。乗する處を乗りながら乗らぬ心有るを善しとす。豊臣家の乗する所の謀にてあへしらはせなん事然る可し、と申しければ、東照宮尤なり、と深く信じ給はせけり。

○東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女を北條氏直迎へて、兩國和平なれ共御對面無かりしかば、天正十四年三月使をもて拜謁して、要害國境の城々守りの兵を緩め候べし。黃瀬川を渡り伊豆に至る可きか、と仰遣されしに、酒井忠次、黃瀬川を越え氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候と同じ事にて候。今徳川家は五州の御主なり、如何でか北條家の旗下に屬すべき。徳川家の瑕なり、と諫め申す。東照宮、去れば其位争無益の事なり。過し比武田上杉和平して犀川を隔てて對面の時、馬より早く下りたる方旗下に似たりとて忽ち事破れ、其場より鐵炮を打合ひ、諸卒血に染み

て相引にしたりき。其時信立二十七歳、謙信十八歳の時なり。夫より和平して京を指して上らんに、信長も吾も争か支へ得べき。其故に兩方に使を以て道理至極せりと言はせしかば、兩將二十四年の間和平せざりき。其中に信長は近江和泉を打從へ、吾も援を出して信長を後にして根を深くするの謀をせしが、信立死して勝頼父に優るべきと威を振ひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長じ、様々善らぬ事のみ有りて終に弑せられぬ。斯の如き大將は滅びて終を善くせざる事理なり。夫を見て戒とせず、位争をするは悪き事なり。氏政吾と一心無く言ひ交さんに、兩旗にて東國を打平けなん。其時に及んで州數多領する者上座に在ん。位争ひ更に益無き事なり、とて伊豆の三島にて氏政、氏直に御對面あり。

○信長公平手政秀を惜み給ひし事

附 小瀬浦菴信長記太閤記を著せし事

信長弓箭盛にして畿内を打從へられし比、近習の者共諂ひて、斯強大に及ばせ給ふ事を知らで、平手中務が自害しけるは短慮にて候、と申しけるを、信長怒つて色を變じ、吾斯弓箭を取る事皆中務が諫めて死けるに恥ぢ、悔るて過を改めし故なり。古今に例無き中務を短慮なりと言ふ汝等

が志無下に口惜き事なり、と言はれけり。

小瀬甫菴後に此事を傳へ聞きて、信長記を編まざる已前ならば必ず其中に書入るべき事を、遅く聞きて残多し、と言けるとなり。中務大輔政秀は備後守より信長の傳に附けられたり。信長甚だ善からぬ事多かりしかば、度々諫争ひて後國の亡びん事を料りつゝ、一封の書を留置きて自害して失たる事、世に普く知りたれば具に記さず。中務始は清秀と云ひける故、諸書には皆清秀と記したれども、後に政秀と改めける故、諫死の後信長尾州名古屋に一寺を建られ政秀寺と稱し、寺領二百石寄附せられ、臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて、中務の墓も其寺に有り。寺の縁起に、政秀葬送の時信長柩に手を懸けられたる山記せり。小瀬甫菴は冊醫にて加州金澤に居り、利家の臣横山山城守長知の許に心安く常に來て毎夜伽しけり。長知は尾州の人にて織田家の事能く覺えたりし故、信長の事を甫菴毎夜尋ね問ひ、日秀吉の事をも問ひける故、長知或は委しく或はおろく、語り聞かせけるを、甫菴退きて書記し、信長記、太閤記二部の書を著し、世上へ出しけるを長知聞きて、信長太閤の事を書き記さん爲めに尋問ひたらんには答へんやうの有るべきに、遺漏も多く残多き事なり。其事を聊も知らせざるに依りて、只一座の物語に云ひ聞せたるを其儘に書き著したるは、今に於て甚

遺憾なり。甫菴馬鹿者なり、と長知言ひしとなり。長知は初浪人にて叡山に寄宿し、諸國を武者修行して後前田家に仕へ、大膳と云ふ。加州大聖寺、小松、越中、末森などの軍に武功有りて一萬五千石領し、其後同州太田但馬守を放討にせよとの命を受け、太田の祿一萬五千石を合せて三萬石を與へらる。長知大功の人にて人の勇武をさのみ目に掲げず、大方の事は稱美もせず。只武士の有る可き事と心得たりし故、甫菴に語りたる事遺漏多くて悔みけるとて。

○謙信信玄二將の批評

信玄死れし事、深く隠したるに、北條氏政聞きて謙信の許に告げ遣られけり。謙信は春日山にて湯漬飯を食せられしが、是を聞き打驚きて箸を捨て飯を吐出し、英雄とは此人なり。關東の弓箭柱を失ひたり、とて惜まれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて大威徳明王の法を修し謙信を呪詛せられし。其文今に高野山に傳はりけるといふ。

信玄勇才は人に起えたりと稱すべし。父を逐ひ子を殺し、降將を殺して其子を妾とし、其餘不仁怨毒算へ盡すべからず。姑く此二事を併見ても二將の賢否、論を待たずして明なり。

又甲陽軍鑑に記せし處附會詐僞、しひて拵へ設けて信玄の惡を隠し他を蔑にせし事、是又數へ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戰ふ毎に利有りと見えたれども、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨てて甲州へ逃入りたりと聞えたり。甲陽軍鑑に是を忌みて津浪に旗を取られしと記したり。假令北條五代記の説誤りたりと言ふとも、津浪に旗を取られしは陣所の地理に暗きに非ずや。

○甲陽軍鑑虛妄多き事

甲陽軍鑑を、高坂彈正書きたりと世に傳ふる事久し。勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて、甲州の滅びて後、引籠り隠れ居しが、書きたる物には香坂と記せり。姓も違へり。偽妄多き書なりと雖も、軍國の事情をよく書き取りたる故に、其虛妄を人疑はず。控弦の家専ら讀む可きものと古人も言ひしなり。然れども其の事實を案じ、其の眞偽を考へずば、大に惑はされん事必然なり。川中島九月十日の合戰の事、其の記せしによりて是を論ずるに、信玄の敗北たる事疑ふ可からず。卯の刻に始りたるは越後方の勝、巳の刻に始りたるは甲州の勝なりと記せり。軍は

芝居を踏へたる方を以て勝とする事、甲陽軍鑑に論明白なり。然れども其日の戰信玄芝居を踏へられしとは言ふ可からず。既に山本勘介が其の軍を豫め言ひたりしにも、二萬の兵を一萬二千、謙信の陣西條山へ指向け、合戰を始めなば越後の軍勝つとも負くるとも、川を越え退かん處を、旗本組二陣を以て首尾を打たんと謀りしなり。然れば謙信客戰なるが故に、思ふ程利を得たりとも、越後に引返すは極りたる事なり。是主戰の敵に勝ちたればとて、空しく其地に有る可きに非ざるを以てなり。是を以て言へば、信玄芝居を踏みたればとて勝と言ふ可からず。是一つ。又信玄芝居を踏へたりとも言ひ難きにや。甘糟近江守、犀川を渡りて三日留りたるを、甲州より押寄せて軍する事能はざりき。是越後の軍芝居を踏へたるに非ずや、是二つ。昔老人の物語に言ひ傳へし事有り。信玄嫡子義信を殺されしは繼母の讒言有りしと雖も、其實は川中島にて信玄、義信將機換をして、信玄は廣瀬の方へ引き退く。敗軍と言ひ乍ら義信を捨殺すべき勢なりし故、義信深く恨を含むを以て、遂に不和に及んで殺されしに至れりとなり。信玄其場を踏む事能はずして逃げたるを以て、芝居を踏みたりと言ふ可きや、是三つ。謙信素より甘糟を以て、川を渡るの後殿と定められしが、三日留りたるを以て見れば、甲陽軍鑑に、甘糟が兵散亂せりと記せるも、虛妄なる事論を待たず。甘糟三日芝居を踏みたるに、謙信何事に狼狽し

て、主従二人高梨山に懸りて走る可きや。謙信既に其前軍評定ありしに、計りし如くなる旨、甲陽軍鑑に記せし處明かなり。初の合戦に打勝つて、巳の刻まで徒に敵の歸り來るを待ちて敗走す可きや。謙信の弓箭を取れる越中の戦は、父の市合戦なり。信濃に師を出すは、村上義清に頼まれて其の求めに應じて是を救ふなり。相摸の軍は上杉憲政の來るを容れて、已む事を得ざるなり。故に其詞にも強て勝敗を見るに非ず、當る處の爲さで叶はざるの戦を爲すと云へり。信我を守るを、大將の可慎事にせり。爰を以て深く頼みたるは始終約を變へず、又其兵を用ゆる、信玄の可及にあらず。山の根の城を攻め落せしに、信玄氏康兩旗にて後援する事能はず。遙々と敵の中を旅行して京都に赴きたるも、勝れたる事ならずや。信玄は、謙信小田原へ攻め入る跡に附きて爲したるは、爲し易きにあらずや。甲陽軍鑑に、長沼に城を築かれし時、判兵庫に信州水内郡にて百貫の地を與へ、信州戸隠にて密供を修す。爰に北越の輝虎讒臣を企て、此次切れて見えすと記せり。永祿十一年謙信戸隠山にて、謙信を信玄咒詛直筆の書を見て打笑ひ、弓箭取る身の恥なり。末代の寶物にせよ、と神職に言はれし由語り傳ふ。今其の書紀州高野山に有りといふ事、詳に書き記せる物あり。實に謙信を恐る事虎の如しとも言ふ可きにや。村上義清再び信州に歸り入りし事、甲陽軍鑑に載せずと雖も、永祿年中、信州の中四郡

謙信に屬し、義清を信州へ入れられし事、記せるもの有り。甲陽軍鑑に、長坂長閑、跡部大炊助二人を奸曲の臣として、勝頼寵せられし事を深く憤れるは然る事なれども、二人權を執るは、勝頼に始まれるに非ず。信玄の時より寵せられし故、勝頼に至りて愈權威有りき。信玄の時、北條の兵に跡部敗れ走りしを、皆寵愛を憎みし由を、甲陽軍鑑に載せたるを以て知る可きなり。又言ひ傳へし説に、甲陽軍鑑を著せし本意は彈正にて、筆取は猿樂彦十郎といふ者なり。彦十郎は甲州滅びて後、大久保忠隣の所にて、東照宮の御事を書き加へて一書となしたるなり。又或人の云ひしは、川中島合戦の事を前夜に論じて、謙信強敵たるの故、對々の人数にてさへ危きに、まして信玄八千謙信一萬三千なり。勝つといふとも、討死數多有るべしと武田の各存するは理なり、と言ひし事を甲陽軍鑑に載せれば、勝は謙信に有る事分明なり、と論ぜし人もありき。又同書に載せたる、持氏生害、兩上杉おごり恣にて、武州河越にて北條に負けたるは天の罰なり、といへり。持氏と兩上杉と時變れり。持氏の滅亡は永享十一年にて、氏康とは遙に百八年を隔てたるを、同時に記せり。北條早雲は延徳二年に相摸に打入りたり。其頃上杉顯定は越後に在り。顯定は越後信濃の境、長森原にて高梨に討れぬ。早雲さへ兩上杉と如斯を、氏康未生れざる已前の事どもを、甲陽軍鑑に記せしこと誤なり。天文六年丁酉七月十五日、

管領朝定と北條氏綱と、武州河越にて夜軍あり。朝定討死なり。此の合戦を、兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや。同十五年丙午四月二十日、持氏五代の後、古河の晴氏と管領上杉憲政と共に河越にて氏康と合戦有りて、晴氏憲政敗北なり。是を甲陽軍鑑に兩上杉と氏康軍とせり。されば五代已前の持氏をば公方と記し、五代已後の管領を兩上杉となせるなり。持氏の四男成氏、成氏の長兄公方政氏なり。同人の長子高基、高基の長男晴氏なり、と言へり。又甲陽軍鑑に載する高名の事とも虚妄多し。中に就きて采配を手に懸けて在りし敵を討取りて、首を得し事を記せし事、幾ばくといふ事を知らず。總じて甲州に敵せし士は、采配を手に懸けしと見ゆ。誠に笑ふ可き書の記し様なり。其餘虚妄勝て計ふ可からず。然れども其時に居て、戦國の勢を能く知り、且士の情に達せし者の書きたる書なる故、弓箭取る者の翫ふ可き書にて、虚妄を以て乘つ可きには非ず。

吾友の松崎惟時が語りけるは、其の師なりし寶山流の劍術の達人武藤十右衛門の論せしに、戦には巧拙有りと覺ゆ。太閤秀吉は戦に拙きなり。小牧にて十萬に及ぶ兵を帥るて東照宮に對陣し、誠に一刃も合はする事能はず。東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ。然れども三方ヶ原にて甲州の兵と御一戦有りしに、衆寡敵し難き故にや、利を失は

せ給ひぬ。さらば信立は、海内無雙とも云ふ可きに、謙信と軍する度毎に打負けられたり。是を以て思ふに、戦の巧拙は遙に其科有るにや。然れども天下に旗を揚げ、世を治め、國を平にするの道は別に有りて、戦の巧拙にはよる可からず。と語りしとぞ。是又奇論とすべし。

常山紀談 卷之八

○仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんと思ふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして九州に間者とし、山々浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見、兵を分ち攻め入るべき道々を計られけり。

○島津家久島原合戦の事附惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻入り、島原の城を攻落したる所に、龍造寺隆信大軍にて押寄せたり。家久僅に三千許なりしを幾重とも無く取り圍む。家久是を物ともせず。明日の合戦吾先陣すべし。貝を相圖に切り懸るべし、と定めて夜の明くるを待つ。朝霧深く物の色も分たず。家久將机に倚りて晴間を待ち、稍朝日出て晴渡りしに、子の又七郎豊久十五歳になりけるを近附け、天晴武者振よ。只上帯の結び斯くするものぞ、とて結び直し、脇差を抽いて其端を切りて後、よく聞け、若し軍に打勝つて打死せずば此上帯我解くべし。今日の軍に屍を戰場に曝さんに、島津が

家に生れたる者の思ひ切つたりと敵も知り、我も黄泉に悦はん物を、と言ひも敢へず貝吹き立てさせ、眞先に隆信の旗本へ切つて懸る。島津家の弓箭は先驅の兵は矢一筋持たせ、射放ちて弓を捨て長き刀を抽いて切つて懸る。今日も又而したりけり。隆信の旗本亂れ立ちて敗北すれば、隆信、蓬し返せ、と下知し、遂に踏み止り討死せられけり。家久勝ち誇らず、人数を纏め陣を整へける所に、龍造寺の臣惠藤某首一つ血に染みたる刀に持添へ、大將は何國に御座まし候ぞ。功名の印の候、と云ひて家久に近附寄り、首を投捨て馬の上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心突く馬より飛下りたれば、左の草摺を切つて餘る刀膝に當りけり。惠藤を中に取り込めて討たんとすれば、家久、可惜者を討つな、と下知しければ、生捕らんとすれども素より今日を最後と思ひ定め、切つて廻りし程に終に討たれけり。惠藤とのみ言ひて名をば名乗らず。家久惠藤が首を膝の上に置き、並び無き剛の者、義勇の士とは是をこそ言ふべけれ。生捕りて對面し龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戦死せられしかば力及ばず、とて近所の僧を請じ、惠藤が弔の事念比に沙汰し、其有様詳に記して、其僧に頼み故郷に遣られけり。諸豊久を呼びて、今朝の約の如く上帯を解きたりしとかや。家久は島津家の士大將なり、豊久後又中務と稱したり。關ヶ原に於いて義弘の身に代り討死有りしは此人なり。

○立花道雪行狀の事

立花道雪は、

始戸次と言ふ。立花の跡を嗣ぎし故立花と稱す。始の名は鑑連、男子無く高橋紹運の子を養ひて嗣とす。

若かりし時雷に震たれ、足痿へ歩行心に任せず、常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども道雪心を變ぜず。武勇逞しき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戰に臨む時は二尺七寸有りける刀と、種ヶ島の鐵炮を手輿に入れ、三尺許の棒に腕貫をして手に提け乘られ、長き刀挿したる若き士百餘人手輿の左右に引具し、軍始れば手輿を此士に昇かせ、棒を取りて手輿を敲き、えいとう聲を上げ、此輿を敵の真中に昇き入れよ、とて拍子取り遅き時は輿の前後を敲かれけるに、敵に北けたるよりも恥として面も振らば昇き入れければ、手輿の左右の士三尺餘りの刀を抽連て一文字に切つて懸りけるに、先陣の者共、すはや例の音頭よ、と言ひも敢へず、我先にと競ひ懸り、如何なる堅陣をも切崩さずと言ふ事無し。若先陣追立らるゝ時は道雪大音上げて、我を敵の中へ昇入れよ。命惜くば其後逃けよ、と眼を見出し下知せられし程に、守

り返して勝ざる事無し。斯れば道雪の士は一日に幾度鎗を合せたりと言ふ者多し。又道雪常に士に弱き者は無きものなり。若弱き者有らば其人の悪きにはあらで、其大將の勵さざるの罪なり。吾士は言ふにや及ぶ、下部に至りても度々功名無きは非ず。他家にて後れたる士有らば吾方に來り仕へよ。取り換へて逸物にせん。吾士の四月朔日左三兵衛は、若き時初て後れし事有りしに、何時の頃よりか血臭き事に會ひて次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世に言はるゝぞかしとて、偶武功無き士の有れば、明き碁ぎの有るは武功の事よ。弱からざるは我見定めたり。明日にも軍に出でんに、人にそゞろかさされ必ず拔懸して討死し給ふな。夫は不忠なり、身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各を打連たればこそ斯年老いたる身の敵の真中に有りて、ひるみたる色を見せざるぞ、といと懇に睦しく言ひて酒酌交し、其世流行ける武器取り出して與へられければ、是に勵まされて、重ねて軍の有らん時必ず人に後れじ、と勇みて、聊も武者振の能見ゆれば呼び出して、彼人々見候へ。此道雪が見し所に違ふ可きに非ず、とて勝れたる剛の者の名を呼びて頼み候程に、能引き廻してよ、と言ひ、又人々の心を合せらるゝ事、此道雪は天の冥加に叶ひたる事よ、と勇め立て、若し若き士の席上にて心得違ひたる事の有る時は、客の前などに呼び出し打笑ひ、道雪が士不束にこそあれ。去れ共軍に臨みて火花を散し候鎗は、

此人々こそ能くすれ、とて鎗追つ取りたる真似して譽められしかば、人々感じ涙を流し、此人の爲に命を捨てん、と勵みけり。

○道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕ふる女に心を通はす者有りけるを、知らぬ體にてぞ有りける。是を知る者有りて、或夜物語の時申しけるは、東國の大將に誰とは知らず候。寵愛の女に密に情を通はす者の候ひしを誅せられき、と有らぬ事を態と言ひて道雪の答を試みけり。道雪打笑ひ、若き者の色に迷ひたるは、必しも誅せずとも有りなん。人の上に居て君と仰がれんには、假初の事に人を殺せば人背く因よ。國の大法を犯したるに異なり、とぞ語られける。彼者傳へ聞きて心に慙ぢ、又道雪の仁愛に感ず。其後薩摩の軍鎧が嶽の城を攻むる時、道雪城を出て戦ひしに、大軍押懸り危かりしに、彼者大音上げ、亂れける味方を恥しめて散々に戦ひける。其間に道雪城近く引取りたるに、敵猶嚴しく進み來て城門を閉て敢ぬ計なりければ、彼の者又取つて返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各是にて討死せば城をば敵に奪はれじ。返せや人々、と言ふ儘に鎗を横たへ折敷きければ、返合する者三人あり。面ら振らず戦ひて討死しける間に城門を閉ぢたりける。

○立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加はる事附道雪死去の事

天正十二年、大友宗麟猫尾の城を圍みて數十日攻むれども落ちず。大友の兵、長陣に氣疲れたりと立花道雪、高橋紹運聞きて、宗麟に馳せ加はり然るべし、と相謀り、俄に兵を出し、二夜の腰兵糧を附けよ、と陣觸して、八月十八日打立ちたり。士卒是は何方へ向はるまやと怪みながら、下知に従ひて、三笠郡内山江原へ打上る。是より黒木の猫尾へ押行くべし、と下知し、紹運先陣たり。今宵ははや夜半過ぎたり、月傾きぬ。筑後川の邊にて夜は明けなん。然らば敵の中數十里押通る事は如何あらん、と紹運の從士言ひければ、道雪へ斯くと言ひ送らるるに、道雪色を變へ、あはれ早く夜の明けよかし。見晴して敵出でば、撫切にして通るべし、とて乗物を叩かれしかば、使者に行きける萩尾大學、山なき使をして恥辱に逢ひたるぞ、とて馳せ歸る。紹運の從卒の謀し如く、筑後川へ押著くれば夜明けたり。渡る處はかたの瀬と言へり。瀬踏にも及ばず、混々と打入れ渡る。秋日種實の士、芥川兵庫といふ者、五十騎許にて星野城より番代して歸りけるが、何方より、誰の軍を押させられ候哉、と問ふ。紹運、餘すな、と下知し取巻きて、一人も残らず討ち取り、首を小高き處に並べ軍陣の血祭したり、とて夫より石垣原へ押出し、後

陣を待ち揃へ、耳納山を越えんとする處に、秋月種實、筑紫廣門の兵共、所々方々より兵を出し、爰のつまり、彼處の切所に待ち受け、鐵炮を打ちかくる事敷を知らず。中にも大木を小楯にして、其蔭より顔計出して鐵炮を搏つ者あり。殊に手練にて手負數多に及べり。道雪の乗物昇きたる人にも中りて倒れしかば、乗物をはたと落しぬ。道雪怒りて、彼を討て、と下知して傍より頻に鐵炮を搏ちかけたれども、面計さし覗きて鐵炮を打出せば、狙ふべき透間無くて、中當らざりしかば、道雪、如何に紹連の士に手練は御座さぬか。彼討たせ給へ、と詞をかくれば、紹連市川平兵衛といふ士に命ぜられけり。平兵衛承り候、と言つて、鐵炮を構へ待つ所に、又彼の木蔭より面を差し出しければ、市川手利き早に搏ちたりしに、眉間に中り轉び出て、俯伏に倒れ死す。敵前後より取挟みければ、後陣の由井雪加より道雪へ使を以て、唯今討死を遂ぐべし、と申し送るを聞きて、紹連大返に返さずば味方の後陣危くて、此の切所を越え難かるべし、とて取つて返し、敵を拂ひて耳納山の嶺に押上げたりしかば、早や夕日に及べり。諸卒遙々と押來りしかば、疲を休めよ。今宵は爰に陣す可し、とて曠原に折敷かせたり。俄に雨降り來れども、兩將打廻りて士卒に詞をかけ勞はらるゝに、本より兩將の恩恵に懐き服したる者共なれば、些とも疲を覺えざりしとぞ。斯くて一夜は其處に陣し、明けの夜黒木に押附けられしかば、

豊後の兵競ひ合へり。宗麟も、兩將の舉動鬼神の業なる可し、とて崇敬し、諸卒に及ぶ迄遇し爲られけり。然れども宗麟には人々思ひ放れたりし故、田原親家も俄に心替して、兵を引具して豊後に歸りければ、思ひくにて事ゆかず。宗麟も引き返されしかば、兩將も高良山に陣して其の年も暮れぬ。明る天正十三年の夏に及びければ、陣替爲可しとて、紹連は赤司に屯を換へ、道雪は北野村天神の壇に移られしに、病み附て次第に重くなりしかば、吾死したらば屍に甲冑を著せ、高良山の好巳の岳に、柳川の方へ向けて埋む可し。此事背きなば、我魂魄必ず崇を爲すべし、と遺言して、九月十一日七十一歳にて終られけり。斯くて此の由、十時攝津守を使として、立花の城に遣り、統虎に斯くと申す。屍骸を只一人棄置かん事、人の誹も免れ難し。立花へ歸し入る可き旨答へらる。十時陣所に歸り此由を言へば、由井雪加、然れば仰の趣は不可なるに非れ共、遺言の重ければ背き難し。雪加先づ爰にて腹を切り御供に參る可し、と言ひければ、由井大炊、某も腹を切り、右脇の御供に我立つべし、と言へば、誰も争か残る可き、と殉死すべき人餘多に及べり。その時原尻宮内少輔熟々と聞きて、各達、唯名聞を好みなんには然るべけれども、統虎公の御爲に善かりなんや。夫程に存するならば、嗣君にも御腹召させたらんこそ良からめ、と荒らかに言ひければ、雲加聞きて、尤に候。然る上は我思ひ止るべし。棺をば立花へ歸し參らせ候

らはん事然るべし。祟のあらんには、雪加が一族罰を蒙るべし、とて九月二十四日陣拂して、道雪の棺の供して立花へ引き取りけり。

○稻葉一徹罪人を免さるゝ事

稻葉伊豫守一徹ト人罪有りて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命惜きや、と云へば、彼罪人、否々命を惜みて泣くに非ず。命あらば一太刀恨む可きに、斯成り果つる事の口惜くて泣くなり、と言ふを人々、憎き奴哉。疾うく斬棄てよ、と聾めくを、伊豫守聞きて、夫助けよ、とて繩を解かせ、如何にもして我に一太刀打てよ、とて追放ちければ、忝なき由再三言ひて立ち去りけり。其後年經て一徹病重くなりし時、彼下人來りて、力を盡せしに本意を遂げず、とて又泣く。頓て一徹死て葬の後、彼下人一徹の墓に詣でて、吾今日迄存命へたるは、君を一太刀恨み申すべしと申せしが故なり。君隠れさせ給ひしに生きて居たらんには、刑死に及びて泣きしは、命惜きに泣きたるなりと人の申さん事恥しく候、とて腹搔き切つて死しけり。是を以て見るに、戰國の時上の人下の人、其情の太平無爲の化に浴したる時の人に異なるを思ひ知る可きなり。

○高橋紹運討死の事附立花統増薩摩に囚るゝ事

島津義久、島津圖書忠長、伊集院右衛門大夫忠棟を大將として、兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む。岩屋は要害の地に非ず、寶満が嶽に楯籠て防ぐべし、と言ふ者有り。紹運、爰を去て寶満が嶽に入りたればとて勝つ可きに非ず。敵に恐れて逃たりと誹られんも口惜し。此城を墓に定めたり、とて眇とも動かす。四方を圍みて嚴しく攻めたりけれ共驚く色も無し。義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞ひて、城中に申す可き事の候、と呼はりければ、紹運聞て、何事にか候、と問ふに、新納申しけるは、紹運の武勇世に名高しと雖も、大友家に組せられ、亡び衰へられん事近きに有り。大友家は切支丹を崇め、無道にして復家の興る可きに候はず。古き詞に一張一弛と申す事の候。疾義久と和平せられ候へ、と言ひければ、紹運聞きて、斯申すは高橋家にて麻布外記と申す者にて候。只今承り候旨紹運に申す程の事にも候はず。聊義の當れる所を申すべし。人々能聞れ候へ。凡盛衰消長は時の運にて、古の細川、畠山、赤松、山名を始として今川、武田、近國にて尼子、大内等、一度は盛にて一度は衰へずと言ふこと候はず。紹運今の限に成りてよも胃を脱ぎて降參せうと存す可きや。大友の家も右大將頼朝卿の時より子孫國を受傳へぬれど、日向

の軍に敗れしより貳心有る者多く出で来て、今斯く衰へたり。然れ共今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせ給ひ、薩摩に攻め入られんに、鹿兒島の破れん事も遠からじ。勢盡き運衰へぬるを見て志を換ふるは、弓箭取る身の耻辱にて、人に爪弾せらるべし。松壽千年終に朽つる事ぞかし。人生は朝露の日影を待つが如し。只永く世に残らんものは義名に有りと覺え候程に、降參は仕らじと高聲に呼はりければ、新納も又言ふ事も無かりけり。外記とは名乗りけれども、紹運ならで斯る詞戰せん人や有ると云ひ合へり。斯くて猶降參を勧めて莊嚴寺の僧を使にしけれども聞き入れず。然らば攻めよとて天正十四年七月二十七日四方より押寄せ、関の聲を作りかけ、えいゝ聲を出して攻めたりけり。城中には思ひ設けたる事なれば、爰を限りに防ぎけれども、終に打破られけり。三原紹心は、

うつ太刀のかねのひゞきは久かたの天津空にも聞えあぐべき

と一首の歌を堀の柱に書き残して討死す。弓削平内は強弓の手利なり。矢倉に上り差詰め引つめ箭種を惜まず射伏せけるが、左の手に痛手を負ひ、敵の中に駈け入つて討れたり。高橋越前守伊部九藏も聞ゆる弓の手練にて、物具の爽なる敵を目に掛けて數多射倒し、矢種盡きければ太刀の切先を揃へて討つて出で、散々に戦ひ一足も引かず討死しけり。尾山中務が子太郎次郎十

六歳なるが、父と一所に死なんと出でけるを、母袖を控へけるに、振切つて敵の中へ駈け入り討死しけり。其片袖母の手に残りけるとなり。寄手も討たれし屍に四方の谷を埋みぬ。既に城兵残り少くなりしかば、何しに猶豫す可き、とて討つて出で、喚き叫んで戦ひけるが、最期の軍も人に笑はれじ。いざ、とて或は腹を切り或は敵と引組んで刺違へ、枕を並べて討死す。紹運は江淵右衛門大夫、三浦式部、黒岩隼人に、女童共皆刺殺して敵の手に懸けそ、と下知し、薙刀打振薙いで廻られしが、今は是迄なり、と和歌を門の扉に留められけり。

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ雲の空に名をとゞむべき

(一説、ながれての末の世遠く埋れぬ名をやいは屋の苔の下水)

斯くて行年三十九歳にて自害して失せられけり。士卒を憐み深く義厚かりしかば、救も無き城を守りて千八百人の士卒一人も逃散る者の無かりしは、例少き事なり。紹運始は鎮種と申しけり。

一説に、城中の婦人は悉く圍るゝに先だちて寶満が獄に入れられし故、害に會はずと言へり。又紹運薩摩の軍を見渡したるに、馬煙黒く押來る。紹運人々に向ひ、今押來る敵六十已下二十歳已上の者共なるべし。今軍に打勝て吾者共悉く討死すとも、彼敵兵も又三四十年を

過ずして野原の白骨となるべし。人生は朝露の日影を待つが如し。義名を萬世に残しな事武士の本意なり、と言はれしかば、城兵勇氣十倍せし勢を透さず、一陣に成りて薩兵を切崩し、一人も残らず討死すと、言へり。又寄手の大將島津家久なりとも言へり。紹連の物具の引合に一封の書有り。島津中務殿と書きたれば、家久是を讀むに、今度降參を勸めらるゝの諫に従はず、是義の故なり。別に一封の書を大友に送り届け給はり候へ、となり。中務類稀なる勇將を殺しけるよ。此人を友とせば如何ばかり嬉しからんに惜き事よ。弓箭取る身ほど恨めしきものは無し、とて僧を供養し葬禮を執り行ひ、壇を築きて家久香を燒き再拜しければ、義を感ずる國風にて薩摩武者を燒香して涙を流し、紹連を稱美しけると言へり。又一説に、天正十四年六月、島津圖書頭、伊集院右衛門大夫、兩先陣にて筑後國高良山に押入り、島津義久、同兵庫頭義弘は肥後八代に旗本を陣し、所々を燒働す。筑紫廣門の方には兼て懈りて有りしかば、俄に騒ぎ立ちて防戦の備す可き様も無し。七月七日薩州の軍筑後川を涉り、其明の日廣門の館を取圍み廣門を虜りたり。同月十三日先陣の兩將太宰府觀世音寺に著陣す。其外龍造寺政家、秋月種實を始として相加り十萬餘に及べり。岩屋の麓筑山橋岳二日市太宰府の邊尺寸も透間無く陣し、兩將より莊嚴寺の僧を使として、此

度太宰府に攻め寄せ候は、紹連に對し弓箭取る可きに非ず候。筑紫廣門一心有るに依り是を討つ可き爲にて、既に廣門を生捕りぬ。寶滿が嶽に紹連の實子を置かれ候て、堅く守らせられ候事謂れ無きに似たり。疾くく寶滿を渡され候へ、とぞ云ひ送りける。紹連、承り候ひぬ。素より一言の仰無く、押て大軍を以て某が守り候城下を馬蹄に蹴散され候事、弓箭の禮に非ずと申すべし。扱統虎もて立化と稱す紹連も今に有りては關白秀吉に屬し候へば、寶滿も岩屋も關白の城にて候を、渡し參らす事存じも寄らず候。との答を使僧歸りて云ければ、とても弱々と城を渡す可き紹連に非ず。去ば圍む可し、とて諸手口々の攻手を定め、七月十四日よの柵をふり、矢合を始めた。然れ共城堅く守りてひるめる體も無く、未申の方尾山中務が持口より、鐵炮弩弓を以て城へ攻め寄せたる。手に打懸け數百人打殺し、手負は數を知らず。或時嶺の手の寄手より矢留を乞ひて、新納藏人と申す者にて候。紹連公に申す可き事候。と言へば、紹連麻布外記と名乗りて詞戰ひに及べり。藏人詞を盡し利害を説き、大友殿には切支丹の宗門を尊信有りて、神明佛法を蔑にし、天道に背かれし故人心散々に成り、滅亡近きに候とて、島津に屬せられ候やうに申し給はらんや、と言へ共、紹連節義を説きて屈服の色無く、來春は關白九州へ兵を出さる可く候。然らば島津家の存亡も計

るべからず。主の盛なる時は忠を致し、衰へたる時も操を替へざるを以て、弓箭取る身の道とす。各達島津家滅亡の時に臨んで、躬を隠す謀を剋らされ候へ。只今夥しく目に餘る十萬の士卒も、百年の齡を保つ可きか。斯る心も候ひなんには士の義たる道をこそ存せざる可けれ、と答へて、降る可き事は思も寄らず。兩將重ねて莊嚴寺の僧を使として、八ヶ國の大軍を引受け、堅固に城を守らるゝ事廿日に及べり。紹運公の武勇九州に無雙たるべし。寶満立花岩屋とも子細候まじ。和談を取結び軍を返し、圍を巻ほぐし申すべし。然れ共十萬の軍兵の覺にて候間人質を一人賜りなんや。然らば此後大友島津和談は、紹運公の心に有るべし。事成りたらんには其時人質を返し、九州一統島津に屬しなん。其後中國に押渡り、島津家天下に旗を立て候べし、と云ひ送りしかば紹運許容せず。人質を關白が大友家に出さん事はさも有りなん。秋月種實龍造寺に組し、夫より一同に九州の亂に及べる根本の人なれば秋月に腹切らせ、薩州の兩將より、今度の弓箭は京都又豊州への遺恨に非ず。筑紫廣門が反心を糺明せん爲なり、と神文を書きて賜はり候ひなば、紹運、事能く計り候べし。然らずば此城を以て墓所とす、と答へられしかば、和平も事遂げず。遂に七月二十七日に諸軍一同に押寄て、卯の刻より軍始りて午の刻の終まで、寄手大軍入替へて攻めたりけるに、手

負討死言ふべからず。去ども死骸を踏み越え息をも繼せず攻戦ふ。今日を限りと思ひ切つたる以兵、各持口を一足も引かず切死にしたりければ城陥りぬ。紹運の左右には名を得たる剛の者共五十人許に討ちなされたるが、後度の勝負をも思はばこそ、今を最期の軍なれば、當るを幸に向ふ敵に切先を揃へて討つて懸り、一陣二陣を遙の谷底へ捲り落しければ、半時許は攻め入り得ざりけり。紹運手負討死の士卒を見廻りて、死たる者には無二の忠節謝するに詞なし、と一禮し、息の通へる者には自ら氣附の藥を口に入れらる。斯る際に及んで軍兵に愛を盡されける有様。數年城をまもり度々の軍に功を顯し、今度は萬に一つも運を開く可きに非ざる大敵の圍に、士卒一人も落散らざりし類無き事よ、と言ひ合へり。其後紹運薙刀を提げ、思ふ程戦ひて辭世の和歌を扉に書き附け、三十九歳にて腹を切られしかば、寄手攻入りて、敵ながら斯る大將も又有るべきや。士卒一人も降參せず、逃げ散る事無かりしを惜まぬ人ぞ無かりける。内室を始め刺殺すに暇なくて虜となりけれ共、深く寄手も勞り養育しけるとぞ。統増此時寶満が嶽に有り。薩摩の兩將使を以て、城を渡されよと云ひ送る。統増今年十五歳なり。城中以ての外軍兵少く、防ぎ戦ふ可き事思ひも寄らず。秀吉の出師を待ち受く可き間、暫く生き延びて時を窺ふに如かず、と相謀り、統増を立花

に送り届け給はりなんには和平すべし。然らずば城を枕に切死すべき、と答へければ、兩將より、子細あらじ、と許諾し、神文を書きて送りしが、俄に約を變じ謀りて立花に送り返さず。其後肥後の吉松と言ふ所に移し番兵を附け置きたり。紹連の内室は筑後の北の關と言ふ所に移し置き、楮立花へ使を以て、降參せられんやと言ひ送る。統虎實父にて候紹連は、關白の爲に自害を遂げ候ひき。我又紹連の爲に自害を遂ぐべし、とて、軍兵を寄せられよ。此城の切岸にて箭一つ仕らん、と答へられけり。斯る處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し、秀吉師を出して打向はる、由云ひふらせり。疾く兵を返す可し、と有りければ、八月二十四日兩將太宰府を引き拂ひぬ。統虎陣を押し出し、高取の城を攻落し、城主星野中務大輔兄弟を始め悉く討取り、夫より岩屋に向はる、所に、立花の内小野理右衛門と言へる者忍び入りて火を懸けたりしかば、狼狽て騒ぎ一支もなく逃げ落ちけり。秀吉感狀を賜はり、大に稱せらる。統虎又密に龍造寺に、北の關に押込められし母を奪取り給はらんや、と頼れしに、龍造寺も薩州と弓箭を取るべき志有りしかば、心得候、とて堀江覺仙と言へる者に軍兵數多指添へて、北の關に押寄せ、薩州の番の者を追散し、紹連の後室を奪ひ取り頼て立花へ送り届けたり。後室此比は法名を宗雲と言ひしとぞ。斯くて薩州には統増を八代へ移し、高津

加の法華寺に置きて、警護の兵に嚴しく守らせたれば、附添ひたる者共種々に謀を廻らせども、本國とは遠ざかりぬ。謀も爲可き術なく日を送りけるに、尙心元無くや有りけん。薩州に移し下堂院と云ふ所に置きけり。秀吉九州へ渡海し、先陣薩州千臺まで進まれしかば、統虎使を以て、統増を渡し給はらんや、と義久の陣へ云ひ送られければ、義久子細に及ばずして返し參らすべき由答に及びしかば、十時攝津守を遣として下堂院に遣し、附添ひたる面々も残りなく引取り、千臺へ行く道海邊を過ぎけるに、秀吉の軍兵船を掛並べ居たるが、落人と見て剩すな、とて小船に乗り、ひたくと陸に上り取圍まんとす。十時勝れて賢き者にて、邊に有りける小船を借り本船に漕ぎ寄せ、統増なる事を斷りければ、大將と覺しき者船屋形に上り、采配を取つて諸卒に下知し静めければ、虎口を遁れて千臺に著き、兄統虎の陣に入りて對面せられけり。此統虎は後に左近將監宗茂とて驍勇無雙の大將なり。過にし天正十年十月六日、秋月と道雪、紹連、宇龍野にて軍有りし時、紹連自薙刀を把り烈しく戦はれしに、統虎十六歳にて初陣なりし。其器量を見て、道雪養子にして家を嗣す可き事を紹連に乞ひて、吾子にせられしとぞ。

○紹運齋藤鎮實の妹を娶られし事

紹運若き時彌七郎と言ひし比、兄の鑑理齋藤鎮實の妹を彌七郎に妻せられよ。と約束せられけり。其砌豊前中國と軍有りて殊に騒ぐて、迎へ取らずして打過ぎぬ。其後彌七郎鎮實に對面の折から、兄が申し交せし如く迎へ取る可きに、軍の最中にて斯は遅はり候。頓て迎へ申さんと語り、れしに、鎮實實にくし申し交せしは可忘も候はねど、其後妹は痘瘡を煩ひて以ての外に醜く成りぬ。中々彼が有様にて見届けらる可きに非ず。今にては參らせん事叶ひ難し、と言ひし時、彌七郎色を變へ、夫は存も寄らざる仰を承りぬるなり。齋藤家は先祖大友家にて武勇逞しき弓取にて御座すれば、兄にて候者の迎へ申さんと約束しつる事に候。夫に辭退も候まじ。我は少も色を好む心に候はず、と頓て婚禮あり。其腹に二人の男子出來にけり。此迎へ取し頃紹運二十歳に及びたりしとかや。

○志賀親次山海が嶺に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入り、志賀太郎親次獨義久に降らず。義久松の尾の城に在り

て秀吉大軍にて九州に渡らるると聞きて、薩州に引退く。親次大に悦び、嶮岨の地に兵を伏せて打破る可し、とて鐵炮の手利二十人擇み出し、山海が嶺の林に待たせけり。然る處に首藤五郎大夫、堀八郎と言ふ者、此度の撰に残りけるを口惜き事に思ひ、密に道に隠れて薩摩武者二騎打落してけり。扱は伏兵有るぞ、と言ふ程こそあれ、大軍林に入り草を分けて探しければ、二十人の者共力無く、藥を惜まず散々に打懸け、追ひ來る者共打殺して引退く。親次大息吐いで、義久をば山海が嶺は越すまじき物を、天の祐に逢ひたる義久なり、と云はれけり。

○高畑三河功名の事

豊後國合志常陸介を大友義鎮攻むる時、佐伯紀伊守一説に彈惟教大將たり。佐伯が士大將高畑三河、一日に十三度の功名あり。其後人問ひて、僅に鎗刀一兩度迫り合ひても大に疲れ、息切れて小兒にも負く可きに、一日十三度の功名は、假令志は飽まで剛なりとも、力も息も續きぬるこそ訝しけれ、と言ふ。高畑聞きて打笑ひ、別の子細も無き事なり。我戰場に打臨みて勿論の事とは言ひながら、死生存亡の間に於て少しの思案を費す可き事無し。然る故に人は騒しくても我は靜なり。大方は鎗を合せ、太刀を打違へざる已前に力を出し氣を張るならん。是に依て

精神草臥疲れたるならん。我敵に逢ふ時、我首を敵に取らするか、敵の首を我取るか、此二つの
中天命に有りと思ひて、初は緩きに似たれ共、打合ふ時一決して一鎗の中に勝負分るゝ故に、疲
るゝ事無く候なり。不入處にて氣を苦しめざる故、幾度事に逢ひても胸中安閑なり、と答へけ
るとぞ。

○森迫親正討死辭世の事

同じ城攻に佐伯に屬したる森迫一本關三十郎親正、首を取り、又戦ひて討死す。時に十七歳な
り。常陸介が從兵山本十郎と言ふ者、其の首を取る。小鍛形三本菖蒲の冑なり、短冊を附けた
り。

命より名こそをしけれ武士の道にかふべきみちしなれば

常陸介感じて其首死屍を高畑が許に送り歸しけり。親正は豊後大野郡三重郷の人なり。

○薩摩勢根白の砦を攻むる事

天正十五年二月秀吉島津を討たる時、大和大納言秀長、近江中納言秀次八萬餘、島津が豊後府

内より薩摩へ引退く後を追うて亂れ入り、高城賤部の城を取圍み、附城五十一ヶ所築きたり。中
にも耳川を越えて、根白の砦には宮部善祥坊繼潤、木下平大夫貞基、龜井新十郎廣政、鹽屋隱岐
守光成、福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是は島津が後巻を防がん爲なり。頃は四月十七
日の朝、島津使を根白にたて、高城の城を渡すべし。士卒を助け給はり候へ、と言送りければ、宮
部五十丁隔てたる秀次へ此旨申して後、兎角の返答を申さん、とて使を返して後、斯欺きて怠ら
せ、思ひも寄らぬ所へ寄すべき謀なり。其用意せよ、とて人夫千人俚に山々の竹木を伐らせ、陣
の前に深さ二間廣さ二間許の空堀を構へ、柵木を結ひて我もく、と物具して待つ所に、物聞に出
したる者共走り歸り、敵押寄せ候、と言ひも、果ぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ、関を揚げて攻め
寄せたり。宮部木戸口に進み出で、一番鎗と名乗りて相戦ふ。田中九介其子彦六、國友半右衛門、
三村三郎右衛門を始め、大剛の兵共先を争ひて切つて出で相戦ふ。義弘も義久の子にて素より
聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ真先駆けて、只今此城踏み破れ者共、と呼はり、多勢堀を越え冑の
鍔を傾け、蟻の如く柵の木に附きて引破らんとする時、兼て巧みたれば控の綱を断ちて柵を堀
の中へ倒せしかば、薩摩武者討るゝ者八百餘人に及べり。義弘愈怒り進んで、屍を踏み越え
て内の柵に攻め寄り、透間も無く戦ひけるが、内の柵をも打破り、十八日の朝三の丸を攻め取つ

たり。宮部を始め愈死地に入りたれば、爰を限と防ぎ戦ふ。斯りしかば秀長三萬許にて耳川に打向ひ、根白の方を見渡せば、薩摩の軍兵雲の如く取巻きて、鐵炮の音関の聲天叫相交り、天地も動く許なり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣、秀長の馬の轡を取つて、義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白吉も叶はせ給ふ可からず、と強て留ければ、既に川へ打入りたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手勢を率る川を渡し、搦手より根白に駈け入り自ら鎗押取り、敵數多突き伏せて宮部に力を合せけり。黒川孝隆同長政も手の者を引分け進み行く道より、村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して、唯今秀長六萬の兵にて後卷せられ候、と呼はらせければ、宮部を始め大に勇み悦べり。長政の士栗山後藤川を涉り、義弘の陣に切つて懸る。秀長の士大將羽根田長門守と千許の兵にて、黒田父子に劣らじと鎗を打入れ攻戦ふ。小早川隆景も三千許にて耳川に来る。秀長今敵陣に懸る可きと存すれども人々同心せられず。如何すべき、と問はるれども、隆景冷笑物を言はず。斯る所に井上伯耆就遠、浦兵部宗勝、古き背破の物具著て進み出で、島津は今日の客人なり。訪ひ来るに出迎はずば弓箭の禮儀に違ふべし。軍評定と申す事や候、と秀長を嘲りけれども、進む氣色の無りければ、隆景馬を打入れて川を渡り、敵の後陣を取切らんと進まれければ、是より薩摩の軍亂れ、敗北しければ、義弘の従子三郎忠

親踏み止りて討死しけり。黒田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵炮三千許左右の嶺を取り切り打立つる程ならば、義弘を打取らん事掌の中に有り、と申されけれ共、知宣堅く留めて追はざりしかば、義弘敗軍の士卒を集め、所々に火をかけ引取りたり。後れたる士卒五十餘人戦ひ疲れたるを生捕りて引來る。助けて歸さん如何に、と言へば、是見られよ。生きて又歸らじと紙に書いて髻に結附けて候ぞ。疾首を劔ねられ候へ、とて皆殺されけり。薩摩の人の勇氣こそ由々しけれ。秀吉宮部には日本無雙と言ふ感狀を與へ、尾藤は領國讚州を召放されけるとかや。

○巖石城合戦坂小坂先登の事

秀吉島津を伐たる時、蒲生氏郷、前田利長巖石の城を攻めらるるに、氏郷の先陣蒲生源左衛門此頃は坂小坂と言ひけるが、眞先に進んで、假名にていちばんと墨黒に書きたる白き吹貫を門の眞中に押立て、喚き叫んで相戦ふ。雨の降る如く鐵炮を打出せば、吹貫は芭蕉の秋風に破れたるが如し。大音上げて、一足も引くな者共、と下知し、面も振らず攻入りけるを、後陣より、是ぞ聞ゆる蒲生が内の士大將小坂と言へる大剛の者よ、と口々にぞ譽めたりける。寺島美濃守此頃

は半左衛門と言ひけるが、是は黒き吹貫押し立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衛を始として先を争ひ攻入り、終に城を攻落して首四百餘打取りたり。秀吉氏郷に感狀を與へられ、小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ。

一説に、小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して刀を與へられけるに、坂申しけるは、一番の賞にて候へば栗田其一人なり。栗田は黒き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて目に立ち申したるなるべし、と譲りければ、秀吉愈大に感じ、刀を栗田に與へらるとも言へり。

○野矢甚右衛門功名の事

野矢甚右衛門は敵五人討取り、首五つ提けて氏郷の前に來る。氏郷、容易くも首多く取りたるかな。如何して、と問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存候時射出せば、中らぬ矢は無き物なり、とぞ申しける。

○秋月種長降參の事

秀吉島津を伐たるゝ時、秋月種長小熊の城を出て、秀吉の陣に至り降參しければ、秀吉對面降

參の禮を受けて後更に心置く事無し。家に傳はりたる檜柴の茶入とて名高き物有るとこそ聞け。あはれ一目見ばや、と問はれしに、種長、速に取り來り候べし、と云ふ。秀吉、然ば使を以て取寄せよ、とて秋月の從者を返して彼の茶入を取來る。秀吉見て、聞きしに優れる物なり。家の寶たれども我に得させてんや、と懇に言はれしかば、種長、既に兜を脱いで參り候上は、何條惜む可き様の候べき、と申す。秀吉殊に悦ばれ、久しく我陣所に在りて軍兵共怪しみ危む可きよ。疾歸れ。我を防ぎしは弓箭取る身の習なり。降參の上は吾恨露も不殘。領地本の如くなる可し、と言はれしかば、種長悦びて馳歸る。種長が士卒、若秀吉種長を害せらるゝならば、秀吉の陣に駈け入り、切死にせんと思ひ定めて居たりけるに、歸りて委しく秀吉の詞茶入を乞はれし有様を語りければ、皆、思ひも寄らぬ事よ、と言ひ合へり。斯くと聞傳へて九州の敵多く戦はずして降參せり。

○新納武藏守豪氣事の

新納武藏守忠元は島津家の士大將なり。勇名を以て指を折る時第一なり、とて大指武藏と稱しけり。義久秀吉に降參の時、新納は肥後の堺泉の城に在り。一説に大に日本國の軍を引受け一戦を

せずして降参せんは弓箭の無禮なり。疾陣を寄せさせ給へ。一軍して討死仕らん、とぞ申し送りける。秀吉頓て師を城下に進めらるゝに、彼の城の路三四里が程は、馬の鞍を下し鞆の紐を解くばかりの峻難にて輒く打入り難し。武藏守暫く支へて後、一説に義久斯くと聞きて大に驚き疾今は是までなり。主君既に降参せし上は家臣の身として争で其の心に背かんや。弓箭の禮儀を以て斯く申したるにてこそ候へ。日本の軍を城に引受くる事、士の一面目にて候、とて城を出でにけり。

一説に、島津降参の後、鹿兒島の外の城々は壊つ可き由秀吉下知せられしに、新納は城に籠り専ら防戦の手段を爲し、其身も病と稱して引籠り居たりしに、秀吉聞かぬ體にして歸京ありけり。其後島津上京し武藏守も供したりしに、程經て秀吉、何とて新納が城をば壊捨てず、合戦の設したるや怪しき事なり、と問はれしに、武藏守人々の答を待たず進み出て、仰せ出されし旨義久下知せしか共、承り入れずして軍を志し居たりしに、踏過ぎて通らせ給ひしこそ恐多く候へども恨しく存候へ。其子細は、城を開く事も古より其例無き事に非ず。只今日本の主と世に稱し申し候關白様、遙に筑紫の果迄引出し奉り、鹿兒島に申請候事は島津が家の譽とや申さん。新納の城を破り棄てずば、悪き奴め踏潰せとて軍兵を向けられん

は必定なり。其時一戦仕らば、關白の御馬を向けさせられたる城なりと末代迄も申し傳へなんには、子孫の面目是に過ぎたる事や候べき。討つて出で火花を散し、一足も引かず討死したりとも、是又武名とや申すべき。敵に箭一筋も射かけずして城を破り捨て候事口惜く候ひき。新納は日向口に在りて、宮部善祥坊を始として先陣の人々に迫台ひたりしに、島津降参の由告げ來り引返し候ひぬ。島津が兵を以て日本國の大軍を引受け、合戦始終の勝利を計る可きには候はねども、新納肥後口を防きたらんには、地は峻なり。關白殿下如何に智謀逞しく御座しまし候とも、輒く攻入り給はん事は思ひも寄らざる事なり。嶺々谷々より種ヶ島の鐵炮を打掛け、思ひの儘に先陣を打惱し申す可きに、今に至りて残念なる事共なり、と恐るゝ所なく申しけるを、秀吉聞きて、新納は聞き及びたる勇將なり、とて大言の咎は更に無かりけり。

常山紀談 卷之九

○黒田家岐井谷合戦の事

竝小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を斬る事

秀吉黒田勘解由孝隆に豊前國を與へられしに、一揆處々に起る。中にも岐井谷友房は元下野國宇都宮彌三郎友綱が次男、鎌倉の比より地を領したる子孫なり。毛利壹岐守勝信に誘れ、地士を驅催し民屋に放火す。黒田父子は馬の岳と云ふ城に有りけるを、城下に押寄する。長政其時十六歳。岐井を討つ可きと勇まれけれども孝隆同心せられず。長政其頃は吉兵衛と言ひけるが、若士共引具し切つて出づれば、一揆共一支もせず敗北するを追掛けたり。岐井は山中の嶮路にそびき入れ、多くの大石の陰に逃げ隠れたり。大野小辨と言ふ若武者眞先に進みたるを、一揆起り合せ七八人取巻きて馬より突き落しけり。後藤又兵衛、小河傳右衛門、久野四郎兵衛馬の首を引返し敗北しけれども、長政の馬廻は眞丸に成りて、一揆勝に乗り押詰めけれども鎧を合す。一揆は木蔭谷蔭より五人十人駆け出で、狩場の鹿を射る如く竹の鎌の矢にて雨の降る様に射た

りけり。長政馬より下り立ち討死すべき色なりしを、近習の者共馬に搔乗せ退きければ、一揆頻に追駈けり。長政の馬矢に中りしかば爰にて自害せん、と言はれしを菅六之介政利、己が馬に召され候へ、と言へ共聞入れず。早上帯を解かんとせられけるを三宅三大夫若狭走り寄り、大將の自害の所にては候はず、とて搔抱き馬に打乗せ、片手に馬を牽き片手に長政を把へて、我等生残りたるに殿を追討つとや、念もなく候。地の利を見て引返し、一揆の奴原追崩し申さん、とて引退く。菅は長政の鞆の組違に手を掛けて少も離れず。木屋兵右衛門は長政の鎧を持ちて歩立にて續きたり。一揆長政と見知り餘さじと附慕ふ。三宅菅、木屋を始として岡本彌兵衛、小河久大夫、坂本七左衛門已下五十人許丸く成りて、思ひ切つたる色を見て靜に詰寄せて、二里許追駈て其後は慕ざりけり。後藤は如何したりけん、猩々緋の羽織を脱捨たりしを長政取らせ歸られけり。後藤度々の武功有りて一萬四千石與へ小隈の城に在りしが、後に岐井谷の軍物語に及べば俄に病み出でしとぞ。木屋兵右衛門は長政に向ひ、後藤、小河が有様大臆病の男にて候を、親子共に取分て懇に爲させ給ひ候。此兵右衛門は誠にあるにもあらぬ體に候へども、敵追詰め來りなば一番に討死して御目にかけて候べし。偕もく歎かはしき御眼力や、と飽くまで罵りて退きけり。其後長政筑前を賜はりしに、小祿の士皆祿を増したりしに、兵右衛門は六百

石に鐵炮の者二十人司れり。さのみ賞美無かりしかば、人々、木屋に殿を岐井谷にて罵りたる事を、嫉く殿は思召して斯は有るならん、と言へば、木屋、我も左思ふ事よ。此憤ならば首をも刎ねられなんと思へどもさも非ず。是より後も軍有らば度毎に大言を吐きちらし、只今寵愛に誇る奴原の中に武者振の悪き者有らば、恥を與へん事我思ひ出なり、と言ひければ、聞者、汝は下部の所謂口に倒されなるべし、と諫めければ、今の祿を削らるゝとも口はきゝたき事よ、とて笑ひけるとぞ。

孝隆は馬の岳の矢倉に上り、長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば、側より、危く候、疾加勢をせさせ給へ、と口々に言ひけれども、否々引き後れたる味方の眞丸になり、靜々と道を引退くは吉兵衛なるべし。危ふけもなし、と言はれしが、果して長政事故無く引返されたり。長政敗軍を口惜しとて引籠り、夜の物打被きて臥し居たり。孝隆物主を呼びて、弱敵をば恐れよ。初の勝を勝にするものなり。勝すぐれば必ず敗の本なり、と戒められけり。鹽屋善七郎といふ侍長政の近習に仕へしが、京に使に行き、此日の暮頃に歸りて長政の寢所に行き、今日の敗軍是非も無き事に候。然ばかりの者共小辨を捨殺し、殿をも捨てて逃げたりと承り候。殿もよき討死の所にて候ひき。何とて敵に後を見せ給ふや。父祖の高名に瑕附き申すこそ口惜しけれ。善七郎が御

馬の傍に在るならば鎗を合せ、一揆の奴原追立て引取るべきに、後藤奴穢き振舞に候はずや。重ねて一揆と軍有らんに必死と思召し定められよ、とて坐を立ちければ、長政も髻を拂ひ思ひ切つたる體なり。翌日善七郎又申けるは、あながち口惜しとな思召され候ひそ。一揆押寄せ候はば眞先駆けて切崩し恥を雪ぎ給へ。善七郎は御馬の先にて討死せん。逃げたる奴原も勵まされて軍する程ならば、鬼神なりとも恐るゝに足らず、と云ひ慰めければ、長政起き上り物語せられけり。長政は面目無しとて父の前に出ず。孝隆、扱は必死を期したるなりと察し、老功の者數多長政に差添て早りたる下知を禁ぜられけり。一揆又上毛郡へ押寄せければ、長政火隈の海近き所の山に上り、待ちかけて思ふ圖に引受け、一同に乗出し馬の駆け場よかりければ、縦横に乗り割り、一揆敗北する處を追立てたり。鬼木鹽田など言ふ者討たれ散々になりけるを、長政鹽田内記を手づから討取り、尙も追ひ駆けんとせられしを、老臣共馬より飛下り押へて陣を整へけり。鹽屋善七郎は敵の中に乗入り鬼木掃部が首を取り、右の方を見れば長政敵の首を取りたりしかば、又馬引寄せて打乗り、追詰めて首二つ取りしが、痛手負ひて精神も亂れたるが、尙も若殿の功名を問ひ聞きて、嬉しや先日 of 恥辱を雪がせ給ひぬ。此上は思ひ置く事無し、と云ひけり。長政善七郎が枕元に居寄せられしかば、長政の手を取り、此後能く心得候へ。殿に討死し給へと申す者は無

き事に候、と云へば、長政涙を流し、汝を先立つる事の残多さよ、と咽はるれば、善七眼を見開き、先の頃諫め申せしは必死を思ひ定めたる故に候。今度の高名こそ目出たけれ。今生の御目見只今を限りなり。人は一代名は末代と申す事の候、と言ひも終らず空しくなりけるとぞ。比類無き者なり、と云合へり。翌日孝隆火隈に來りて對面し、若き者は懲る事無くては思慮の練れぬものぞかし。終の勝を計れ。只勝つべきとのみ思へば敗を取るなり。良將は時により緩に見ゆれども、卒爾の軍は爲ざる故に終の勝を全うするよ。と教へられぬ。長政又押寄せんと云はれしを、孝隆制して要害を設け、兵糧の道を塞ぎ馬の岳に歸られけり。斯で一揆勢盡きければ、毛利輝元を頼み和平しけれども、友房は病とて出ず。中津川より三宅三大夫、岐井谷より傳法寺兵部、使者往來して互に物語しけるに、或時三宅言ひけるは、友房内室なしと聞く。勘解由に妹あり、婚禮あらば如何に、と云ふ。傳法寺、夫は悦ばしき事なり。能計はれんや、と言ふに三宅、我年若ければ老人と相計りてこそ、と言ひけり。傳法寺は敵の妹を人質に取らんは然るべしと思ひけん、わりなく三宅を頼みけり。三宅、我主君の心をも知らず容易にも申出でたる哉。事調すば面目も候はず、など言ひて、長政に斯と告げて孝隆にも告遣りしかば密謀をなし、三宅に孝隆書を與へ、縁を結ぶは末頼母しき事なれども、例の僥忽ならん、とぞ書れける。三宅傳法寺に語りて潜に其書

を取出して見せ、吾をば常に僥忽者と戒め候が此度も、又然なり、と言へば、傳法寺、是は既に聞届けられたるなり、と悦び、斯と友房に告げて、是より心置なく中津川へ出づべきにぞ定りける。三宅又迎に往けば友房三百人許にて山中を打立ちけり。三の丸の大手にて人を留め次第に滅じてけり。本丸の書院にて對面あり。吸物を出して酌は小川傳右衛門なり。野村太郎兵衛肴を挾むを相圖に、傳右衛門一の太刀、太郎兵衛二の太刀と定めたり。長政盃を指しける時野村肴を持ちて出けるが、持ちたる臺を友房に投附飛びかきり眉間を切る。小川後れたり、と脇指を抽いて切附くれば、さばかり遅しき友房即討たれけり。供の者をば所々に手當して物具したる者共鎗竦にして殺しぬ。岐井谷へ軍兵を指向けて打滅されけり。小川野村一二の定有りしに違ひたりしかば、小川怒つて其夜野村に言ひけるは、岐井を吾初太刀たるべきに先を越れ面目を失へり。如何に、と問ふ。野村打笑ひ、左思はるゝは理なり。能く聞かれ候へ。年を言へば吾は弟なり。汝功名は四度に及び我は唯二度なり。是程劣りたる者、そなたに先をさせて、我後れなば是こそ面目を失ふと言ふべけれ。栗山か又我兄の多兵衛とならば前後を争はれん事似合たるべし。斯く劣りたる我に争はれんは大人氣無し。只免され候へ、と言ひければ、小川、素より心易き事なり。但心安くも切られたり。尤、とて愈親みければ、人々、野村が理も聞事なり。小川も能

く聽入れたたり、とぞ感じける。

○豊臣關白北條征伐出陣の事附本多重次放言の事

秀吉北條を討たる時、諸將浮島が原に並居て秀吉を待つ。秀吉糸緋威の物具著て、唐冠の冑黄金を鑲めたる太刀佩きて、土俵の大なる羽壺に征矢一筋指し、仙石權兵衛が參らせし朱の滋藤の弓持ちて、七寸有りける馬に金の瓔珞の馬甲かけ、靜に歩ませて打通られけるが、東照宮信雄と共に迎ひ給ふを見て馬より下り、如何に貳心有りと聞きたり。いざ一太刀參らんと太刀の柄に手を懸けらる。東照宮左右の人に向はせ給ひ、軍始に太刀に手を懸けられ門出の目出度候、と高らかに仰有りければ、秀吉何とも言はずして又馬に打乗り通られけり。

秀吉此出陣の時、濱松の城に宿せらる。本多作左衛門折節御使に參りて歸りけるが、旅装の儘にて諸將の中に進み出で、東照宮を見かけ奉りて、如何に殿は何時より斯く愚になり給へるや。國を持つ人の城を人に貸す事や候。然らば女房を人に貸し給はんか、と罵りける。東照宮、彼は本多作左衛門と申す剛の者にて候が、家久しく昵くて只今の様なる事を申すにて候。無禮の詞を申し候、と仰せ有りければ、人々承り、偕は承り及びたる本多殿に

て候ひけるよ。斯る事申す人多く有るべきや、と賞し合へり。作左衛門物荒き人なりけるに、三奉行の中に命ぜられ政を執りしに、甚だ仁愛の事のみにて獄訟を斷るに理正しく、四民昵き服しけり。東照宮の神慮淺からぬ御事なり。

○井伊直政關白を討たんと言はれし事

東照宮小田原に向はせ給ふ時、先陣は榊原康政と命ぜられ、井伊直政御旗本と定め給ふ。直政毎も先陣を好まれしに、此時は少も辭退の氣色無かりしに、小田原にて秀吉側の人僅に引具せられしを見て、唯今取圍みて討取るべき時に候、と進め申せしを、東照宮聞し召し入れられざりしかば、然らば先陣たらん、と言はれしとぞ。

○鳥井源八郎先登士志を論ずる事

山中の城を攻むる時、木村常陸介師春が士鳥井源八郎先驅して城に附名乗りけり。羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き來り、汝は首取源八と世に言はれたる譽の士なれども、田舎育なる故武功を辨へず。斯る場にては人は呆れ氣後する物なる故、爰にて名乗れば是に心附きて我先に

と進む故、思ふ儘なる獨功名もならず、物の譯も知らず、名乗るまじき處にて名乗るなり、と笑ひければ、鳥井聞きて、平三郎は志の士と聞きしに、眞の士志をば知らざるよ。人の呆れたる時は尙高聲に名乗りて人に心を附け力を添へて、多くの人を用に立つるこそ武士の義なれ。獨高名をせんとするは小事なり。言ふに足らず、と答へしかば、平三郎言ふ事無かりけり。

○南部越後攻口の事

小田原を圍む時、國清公の攻口は搦手の山の上なり。目の下に見下し鐵炮を打入れけるに、城中より上げ矢に打つ鐵炮烈しく、士卒進み兼たる時、南部越後銃口を空に向けて打たせたり。其玉雨の降るが如くなりしかば、城中ひるむ所を見濟し、鐵炮を出ばなに並べ、透間無く打たせて攻破りけり。

○上様日和といふ事

同時九鬼大隅守嘉隆日本丸と言ふ大船を乗廻し、南の海上を取巻きけり。此所は荒海にて、東風吹く時は波浪山嶽を倒しかくるが如し。船をかけ並ぶる事思ひも寄らぬ所なるに、秀吉城を圍

まれし間五十餘日風靜に波穩かなり。是よりして小田原海邊風無き日を上様日和と言慣しけり。

○伊奈熊藏兵糧を司る事

同時東照宮伊奈熊藏を召して仰出さるゝ事共有り。其時伊奈、去年より兵糧の用意して沼津に運びたりき。然るに此箱根山中に穀物の價江尻沼津と相同じ。遙に運漕せんより爰にて求むる事然るべし。心得難き事なり、と申しけるを、東照宮聞し召し、夫は長東大藏大輔が謀なり。長束は武功勝れたるにも非ざれども、斯る謀は長じたる者なれば、秀吉城主として寵せらるゝぞかし。汝が職にては兵糧運漕の事能く心得べきに、心得難しと言ふは吾も心得難し、と仰せ有りければ、伊奈汗を流して退出しけり。

○蒲生氏郷の陣夜討の事

附氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事

同時蒲生氏郷金の三階菅笠の馬印許され候へ、と申されしに、秀吉、夫は聞る佐々成政が馬印にて容易くは免し難し。今度小田原の武功によりて望む所に任せん物を、と言はれしかば、氏郷今

度の軍に人の目を驚すか。去らずば討死と思ひ定め、繪像を描せて日野の菩提寺に籠め打ち立たれける。斯て五月三日の夜搔曇りけるに紛れ、城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり。氏郷も、今夜は夜討入る可きよ懈るな、と下知せられしに、果して廣澤兵庫秀信助重 大將にて押寄せたり。氏郷の物見の兵町野萬右衛門に行逢ひぬ。弓取直し指詰め引詰め射けれども、叶はずして引返せば、敵進み來て柵の木を打破る。蒲生源左衛門郷成、田丸中務直政、町野右近幸知切つて出で、爰を専途と戦ひけり。氏郷銀の鯨の尾の冑の緒をしめ、

氏郷の許に新に仕ふる士に、吾家にて銀の冑を著たる兵、度毎に眞先に進み出て働くなり。此男に劣らず振舞ふべし、と言はれけり。氏郷彼冑著て毎も眞先駆けられしとぞ。

兼て一丈餘の鎗を設け置かれしを提げ、追立てく進まれけるに、廣澤兼て鐵炮を後陣に並べ置きたれば、追來る寄手を打立てけり。廣澤は聞ゆる剛の者なるが、鎗を横たへ片足を堀の中へ踏入れ、大音上げ、一鎗參らん、と呼るを、氏郷聞きて飛びかゝり突合ひければ、蒲生左衛門郷可、同五郎兵衛郷治、佃又右衛門等駆け來り喚き叫んで攻戦ふ。廣澤は、今宵夜討の大將廣澤兵庫一番鎗、と高らかに呼びけるを、氏郷目にかけて、堀の中に飛入りて撃取らん、と面も振らず冑の鏝を傾け、鎗を取延べ叩き立てられしに、敵兵二人氏郷の鎗を取らんとする事七八度に及びし

かば、氏郷廣澤をば討漏されけり。寄手餘り激しく戦ひければ廣澤も叶はじとや思ひけん、城を指して引退く。氏郷何處迄もと云ふ儘に先に進んで追はれしかども、門を閉ぢて鐵炮を打出せば、引返されしに、冑に矢二筋折掛け、物具に鎗の疵透間無く、十文字の鎗籠の如くなりしかば、秀吉感狀に彼の馬印 免されけり。

○武藏國八王寺城落つる事

武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭は、小田原に有りて家臣留守したりしに、前田利家、上杉景勝攻めんとて、先に降參しける北條氏邦に使を城に遣らせ、小田原既に破れぬ、疾城を渡し候へ、と言ひ送る。中山、近藤、狩野等従はず。氏昭降參せば證書を賜はりて城を出づべき旨下知すべし。然らずして降參せば士の瑕瑾なり。氏邦が如き臆病者は一人も城中に候はず、と答へけり。利家景勝も其義に感ずと雖も、扱止むべからざれば、一萬五千の兵をもて圍まれけり。甘糟清長攻入つて火を掛くる。狩野一庵、近藤出羽助實、金子三郎右衛門家重死狂ひに切つて出で討死す。横地監物は氏昭の第一の長臣なり。火燃え上れば今日を限りに散々に戦ひけるに、寄手討る者多し。中山勘解由家範は武勇の將、殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ、關東無雙と世に稱

せらるゝ人なり。大敵に少しもひるまず、二百許にて突いて出で、爰を最期と切つて廻るに、寄手新手を入替へ攻めければ、僅十五六人に討爲されけり。利家、誰か中山縁有る、と問はるゝに、松山の降人根岸主計定直が妻は中山が妻と兄弟なり。小岩井雅樂助は中山が馭法の弟子なる山を申す。利家、疾く中山に味方に屬せよと言ふべし、とて兩人を城中へ入れられしに、中山既に自害して其妻も自害したるが、未だ息かゝりて有りければ、詞を交して馳歸り、斯と言へば利家大に惜まれけり。監物は切り脱けて逃げ出でけり。北條家關東の城々多しと雖も、豆州葦山の城外は多く降参しけるに、八王寺の兵城を枕に戦死せし事を東照宮聞し召し、其義を感じ思召され、中山が嫡子助六郎昭守二男左介信吉に祿賜はり、昭守が子信守大坂の軍に功有り。信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す。狩野一廣が子主膳も仕へ奉りけり。

○大音藤藏雨森彦二郎功名の事

八王寺の城攻に城兵切つて出で死狂ひする時、利家の小姓大音藤藏一番首を取りたる處に、雨森彦三郎續きて首取つて、利家の前に至りて實檢に備ふ。一番は大音なり、と申して二番首の帳に記させたるを利家大に感ぜらる。其頃大音は利家の勘氣を蒙り居たる故、數度高聲に姓名

を名乗りしかば、諸人一番乘と言ふ事を知つてけり。

○信雄卿那須に誦せらるゝ事

北條亡びて後、秀吉石垣山の本陣に諸將を集めて酒宴に及ぶ時、信雄は舞の上手と聞き、天晴一曲觀申し度し、と秀吉言はれしに、信雄吾を侮ると口惜くや有りけん、不吉の詞を舞れたれば、秀吉、斯る悦の中に忌々しき事共心得ず、とて那須に追遣られけり。此時までも千餘騎の士を具せられしが、僅に打連れて那須に赴かれぬ。時を計らず勢を知らず、無益の空言に國を失はれし事のうたてさよ、と人皆言ひ合へり。

○坂部岡江雪免さるゝ事

北條滅亡の後、秀吉坂部岡江雪齋に、汝先年北條の使として上京し、約せし所忽背きて名胡桃の城を取る事、氏直の姦計にや。又汝が詐なるか、と責問はるゝに、直に申さんと答へしかば、秀吉大に怒り、手枷足枷を並べ江雪を呼び出し、刀を奪ひ取り、左右の手を引張り庭上に引据ゑて後、秀吉罵りて曰く、汝が約せし處に背く事誠に憎むに餘り有り。且日本國の兵を動かし主

君の國を滅せし事汝に於て快きや、と譴めらるゝに、江雪色も變ぜず。氏直更に約に背く心無
 く候。邊鄙の士愚にて名胡桃を取り、終に弓箭に及びて北條の家亡びぬる事、江雪が思慮如何と
 も爲べき様の候はず。誠に家の亡ぶべき運命にや候らん。然れども日本國の兵を引受くる事北
 條家の面目なり。此外申すべき事無し。疾く首を刎ねられ候へ、と言ふ。秀吉顔色打解けて、汝
 は京に引上せ磔に懸けんと思ひしに、大言を吐きて主君を辱めず。大丈夫と言ふべし。命を助け
 ん吾に仕へよ、とて許されけり。坂部岡を改めて岡と稱しけるは此時よりの事なり。

○關白鶴ヶ岡參詣の事

秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣でて、八幡宮の戸を開かせ頼朝の像を見られしが、脊中を打叩き、微賤
 より出て、日本を掌に握る事我と御邊と二人なり。然れども頼義父子鎮守府將軍として東國
 の者共久しく親み多かりき。蛭が小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂れ無きに非
 ず。我は土民の中より斯く日本を思ひの儘にすれば、功尙高し、と言はれけり。

○關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事

秀吉陸奥に赴く時、宇都宮にて佐野天德寺を呼び、

野州佐野辛澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱、天正十三年討死して子無し。家臣連判の起請
 文を小田原に送り、氏政の弟氏忠をもて家を繼ぐ。宗綱が伯父天德寺了伯は佐竹の一族の
 中を乞ひて、佐野の家を嗣んとすれども是を川ひす。了伯は夫より京都に赴き、黒谷に閑
 居せしを、秀吉北條を伐たる時、嚮導とせられしなり。

物語させて聞れしに、武田上杉の弓箭盛なりし事を申しければ、秀吉冷笑ひ、如何に天德寺謙
 信信立といふ坊主も疾く死たるこそ幸なれ。今に存命へ居ば一人には薙刀を擔けさせ、一人に
 は吾輿の先なる朱傘を持たせて、馬の前に召具すべきに、此世に無ければ力無し。何條車か
 かり、坐備、皆戲言なり、とぞ言はれける。

○蒲生氏郷大志の事

秀吉陸奥に赴き、蒲生氏郷に八十萬石の地を賜はりけり。氏郷退出し柱に倚掛りて涙ぐみける
 を、山崎の某居寄りて辱く思はれん事尤なり、と言ひしに、氏郷私語て、吾都近き所にて小き
 國一つ賜はらば終に天下に旗を揚げなんに、邊鄙に棄てられたれば何事か仕出すべき。志の

空しく成りたるに依りて覺えず涙の流るゝよ、とぞ語られける。

○奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年、奥州葛西大崎一揆の時氏郷名生の城に在り。會津に飛脚をもて、鐵炮の玉薬を人に見咎められざる様を計りて運び來れ、と下知せられしかば、山伏を談ひ笈の中に玉薬を入れて、頭巾螺貝杖を携へて湯殿山に詣つる有様して送りけり。是蒲生左文が謀なり。

○蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏郷笠井大崎にての軍に、佐久間備前、同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知せる事氏郷の心に叶はず。此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏郷に賜りたる侍大將なり。氏郷、明日の軍は神田修理、外池信濃、岡野左内、蒲生源右衛門等先陣せよ。佐久間兄弟は見物せよ、とぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立悪きとて斯く仰承りぬ。各討死したりとも、己が躬を捨てて只汚名を出さざるまでの事にて、斯仰を承りたる甲斐も無くては御大將の恥辱なり。然らば進退の節内馴しせずば叶ふまじ、とて先陣の軍兵を打具し、平野に押

五度及びけり。六人をして、明日の軍は殊に大事なる故、斯様に馴しに及びぬるよ。人々の進退以の外調はず、如何にも能く心得候へ、と再三詳に申し聞せ、さて采配を取り下知するに、進退節に當りしかば、去ば明日の軍は思ふ儘なるべし、と悦び勇みて、果して敵を切斷け大勝を得たり。淺野長政秀吉の命にて陸奥國に有りしかば、其軍の有様駆引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なり、と褒められたりとなり。氏郷も大方ならず悦びて、六人に感狀を與へて、種々の物添へて賞美有りけり。

○氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓るゝ事を心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎と言へる十六歳に成りける者、容貌勝れて艶なりしに、密に工める事を語り聞せ、田丸中務少輔が兒小姓に出して奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親み有れば、來られん時便を伺ひて刺殺せ、との事なり。清十郎が父の方へ遣しける書を關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押入れ、此事を秀吉に告ぐると雖も、秀吉遠く慮りて強ひて伊達家と和平せさせられぬ。氏郷、清十郎を呼び出し、吾過ちて罪なき義

空しく成りたるに依りて覺えず涙の流るゝよ、とぞ語られける。

○奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年、奥州葛西大崎一揆の時氏郷名生の城に在り。會津に飛脚をもて、鐵炮の玉薬を人に見咎められざる様を計りて運び來れ、と下知せられしかば、山伏を談ひ笈の中に玉薬を入れて、頭巾螺貝杖を携へて湯殿山に詣づる有様して送りけり。是蒲生左文が謀なり。

○蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏郷笠井大崎にての軍に、佐久間備前、同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知せる事氏郷の心に叶はず。此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏郷に賜りたる侍大將なり。氏郷、明日の軍は神田修理、外池信濃、岡野左内、蒲生源右衛門等先陣せよ。佐久間兄弟は見物せよ、とぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立悪きとて斯く仰承りぬ。各討死したりとも、己が躬を捨てて只汚名を出さざるまでの事にて、斯仰を承りたる甲斐も無くては御大將の恥辱なり。然らば進退の節内馴しせずば叶ふまじ、とて先陣の軍兵を打具し、平野に押

五度及びけり。六人をして、明日の軍は殊に大事なる故、斯様に馴しに及びぬるよ。人々の進退以の外調はず、如何にも能く心得候へ、と再三詳に申し聞せ、さて采配を取り下知するに、進退節に當りしかば、去ば明日の軍は思ふ儘なるべし、と悦び勇みて、果して敵を切斷け大勝を得たり。淺野長政秀吉の命にて陸奥國に有りしかば、其軍の有様駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なり、と褒められたりとなり。氏郷も大方ならず悦びて、六人に感狀を與へて、種々の物添へて賞美有りけり。

○氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓るゝ事を心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎と言へる十六歳に成りける者、容貌勝れて艶なりしに、密に工める事を語り聞せ、田丸中務少輔が兒小姓に出して奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親み有れば、來られん時便を伺ひて刺殺せ、との事なり。清十郎が父の方へ遣しける書を關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押入れ、此事を秀吉に告ぐると雖も、秀吉遠く慮りて強ひて伊達家と和平させられぬ。氏郷、清十郎を呼び出し、吾過ちて罪なき義

士を獄に入れ辱を與へたるよ。其君の爲に命を捨てて忠を致す、賞するに餘り有り。疾くく伊達家に歸るべし。と禮義正しく遇して歸されけり。記せし書に清十郎が姓を漏しぬ。惜しき事なり。

○氏郷佐々木が鐙を細川忠興に贈らるる事附黒塚の歌の事

氏郷の許に佐々木が鐙と言へる名高き器有り。細川忠興いと懇に、我に賜はれと乞はれしかば、巨理某、是は世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へ、と言ひければ、氏郷、なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとはばいかゞ答へんと言ふ歌の恥かしきよ、とて彼の鐙を贈られけり。

蒲生は元江州の士にて、佐々木の臣なり。氏郷伊勢松坂十二萬石なりしが、後曾津を賜りける時は四十歳の頃なり。佐々木承禎が子四郎、太閤の時僅二百石與へ、太閤の咄の席に呼出されしが、伏見にて太閤の前より退出する時、氏郷昔の故に四郎が刀を以て従はれしとなり。又安立郡に川あり、向うに黒塚あり。安立は氏郷の領地なりしに、黒塚は伊達政宗の領地なりとて争の有りしに、氏郷、平道盛の歌に、

みちのくの安立が原の黒塚におにこもれりといふはまことと、と詠める事有り。如何に、と申されしに、聞く人、黒塚は安立が原に屬したる事分明なりとて政宗争を止めてけり。

○本多忠勝萬喜が舊臣を呼び出されし事

本多中務大輔忠勝に、上總の小瀧十萬石を賜はりしかば、小瀧に赴き、土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士共を呼び出して祿與へたり。彈正は同國萬喜の城に居し故、世には萬喜少弼と稱して武勇の譽有りし人なれば、此を問ふに、舊臣申すは、萬喜常に房州の里見義高と弓箭を取候が、敵を怠らせん爲に舞臺を設け、踊を爲せ、城門を明けかふるとて果さず、船著の險しきを平し候。里見が將正木大膳時綱寄せ來り船より上る時、慶岸城に飾りたる紙旗を絹の旗に立て換ふると等しく、古き門より不意に討て出で、忽ち切り崩したり。是より土岐が地に攻め入る事候はず、と語りければ、忠勝聞きて、土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なり、と稱し、其後舊臣に其の家の事を問ふ時は、必ず萬喜殿とぞ言はれける。

○東照宮武田北條の跡御制度の事

勝頼亡びて後、東照宮甲斐を治め給ふに、法度は信玄より用ふる處を改め易ふる事勿れ。年貢は少く納めん、と仰出されしかば、百姓大に悦び合へり。小田原亡して後、地を治め給ふも又同じ。諸民大に悦び、數百年の恩義相結べるに同じかりき。

○東照宮武田の舊臣を召して御物語の事

同じ頃、東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召して、信玄の事共物語させて聞召さるゝ時、御坊の時火繩は如何したる、と御尋あり。柿の澁に石灰を入れて火繩を染め候へば、年経ても用られ候、と申す。横田又は城意庵などに、信玄の事をば御坊と仰せ有りけるとぞ、又武田家にて鑊を寛く詰め候は敵の肉の中に鑊の残らん爲なり、と申すを聞召し、士の軍に臨むは皆其君の爲ぞかし。射伏せられたれば吾軍の利となるべし。後迄人を苦しむるは不仁の業にこそあれ。今日より我家の士は鑊を堅く詰めよ、と仰せ出されけり。

○東照宮物具の御物語附小野木笠の事

東照宮仲に、物具の美麗なるは無益の事なり。又重くするも益なし。井伊兵部は力も有りて重き物且しつれども度々手負ひしなり。本多中務はさもなく薄手負ひたる事も無し。只戦ひ易からんやうを心懸くべきなり。下部は薄き鐵の笠を著せたるぞよき。急なる時は飯をも炊ぐべし、とぞ。

鐵の笠は甲州にても下部は著たりしとかや。畿内の方には無かりしに、丹州龜山の小野木縫殿助、足輕已下の者に鐵の笠を著せける故、其頃は小野木笠と言ひけるとなり。

○秤御定の事附壹歩金辨當挾箱始の事

東照宮關東御打入の後、甲州に在りける秤を造る守隨兵三郎といふ者、井伊直政に申して、關東黄金白銀等を商賣するに、定りたる秤を用ひられん事を願ひければ、夫より今の制は定めさせ給ひけり。

京に後藤德乗といふ彫刻師在り。東照宮關東御打入の後德乗が弟子を召しけるに、遠國を

嫌ひしに、後藤庄三郎、我行かん、とて關東に至り、寵せられしかば、後天下を知し召さば願のつ叶へ給へ、と申す。何事ぞ易き事よ、と仰有り。然らば黄金を四つに切りて通用せばや、と望みけり。果して海内東照宮に歸しければ、庄三郎が志の如く仰せ出されけるより、今の壹歩金といふは生まれり。但し甲州には信玄の時碁石金といふ物あり。然れば夫より前には碁石金の外には無かりしにや、壹歩金は碁石金に倣ひたるにやあるべき。又信長の時の辨當といふものは安土より生まれり。其始は小芋程の中に、如何で色々の物入れられんとて人信ぜざりきと言へり。挾箱も同じ頃造り始めたりといふ。又大坂の津田長門守始めて造り出すとも言へり。

○酒井金三郎本を忘れざる事

原吉丸、酒井金三郎共に東照宮の近習に仕へ申しけり。伏見にて御庭に出させ給ふ時、原御太刀を持ちて庭に下り、草履はくに違なく、跣にて蒔石の上に有りけるに、酒井草履を與へければ、人々譏るを聞し召し、子細を御尋あり。酒井承り、原は元下總の笛井の城主原一郎が子にて候。臣が先祖原に仕へしと承りぬ。昔の主君の縁、跣にて炎天に居たるを見るに堪かね候、と申

しければ、本を忘れざるの士なり。吾子孫にも如斯なるべし、と大に御感あり。

○成瀬正成忠信の事

秀吉大坂にて馬揃の時、千貫矢倉に上り觀られしに、黒き馬の太く逞しきに乗りて、紅の沓を後輪に附けたる者有り。何者ぞ、と問はるゝに、徳川家の士成瀬小吉なり、と申す。祿は如何に、と問るゝに、東照宮、二千石與へ置きたり、と仰せられしに、秀吉、天晴吾に奉公せば五萬石與ふ可き、と言はれしに、其後東照宮成瀬を召して、云々の事有りき。秀吉に仕へなんや、と仰有りければ、成瀬承り、こは御情なき事に候、と申す。否とよ、汝秀吉に奉公せば我爲にもよかりなん、と仰せられしに、成瀬涙を流し、不肖の身祿を貪り、主君を捨て奉らん者と思召しけるを知ざりけるも、愚に候。只疾く自害して心を證さん物を、と申ければ、其由を秀吉に御物語有りけり。後に東照宮長臣數多召され、古に聞きし三尺の孤を託すべきと言ひし人は成瀬にてこそ有れ、と仰せられけり。小吉正成後隼人正と言ひしなり。

○東照宮相摸培御打廻の事

北條家亡びて後、東照宮甲斐相摸の堺三増嶺を御打廻りの時、過し永祿年中の戰場を御覽あり。元山なりし故信玄兵を押し通し、容易く軍に勝ちしなり。北條家武略に拙くて山林を伐り荒したる故ぞかし。生茂りたらんに如何で信玄陣を敷くべき。山を林にせよ、と仰出されけり。

○豊臣關白五腰の刀の主を察せられし事

秀吉伏見にて或日廣間に出でられしに五腰の刀を見て、試に其名を言はん、とて指されしに、違はざりければ、前出立以、誠に神智の御座し候よ、と驚きたりければ、秀吉笑ひて、何の子細も無きぞとよ。秀家は美麗を好むが故に黄金を鏤めたる刀是なるべし。景勝は父の時より長劍を好み、寸の延たる刀を是に當てたりき。利家は又左衛門と云ひし時より先陣後殿の武功により、今大國を領すれども昔を忘れず、草卷たる柄の刀是他の主に非ずと思へり。輝元は異風を好む、異なる體に飾なせる刀是ならん。江戸大納言は大勇にして一劍を頼むの心なし。取繕ひたる事も無く又美麗もなき刀其志に叶ひたり。此を以て察しけるに違はざりけり、と言はれけり。江戸大納言とは東照宮の御事なり。

○竹俣兼光の刀の事

謙信の許に赤小豆粥、竹俣兼光、谷切とて三の刀有り。竹俣兼光は元越後の百姓持ちたりしに、或時山中を通りしに雷烈しく鳴りたりしかば、あはや落掛るかと思ひて、刀を抽き頭に指當日を塞ぎ居たり。稍有りて空晴れしに、刀の鋒より血流れ般に染みたり。又或時大豆を袋に入れて歸るさに、袋の綻より一粒づつ零れけるが、鞆に當りて二つに成りしかば怪み見しに、鞆の破れて刃は縫に出たりしに當りし故なり。雙なき刀とて竹俣三河守を得しが、謙信後に差れけり。弘治年中川中島合戦に、信玄の兵輪形月平大夫といふ者鐵炮をもて狙ひしを、謙信馬を乗寄せ、一刀に切伏せて駈け通られけり。後に甲斐の兵共是を見るに、輪形月は物具かけて切られ、持ちたる一兩筒は二の見通の上より切り放したり。如何なる刀にて斯くは切られし、と言ひ合へるに、則彼の兼光の刀なりけり。景勝の時京にて研がせしを越後にて人々に見せて、京の水にて研ぎたれば刃の光殊更勝れし、と悦ばれしに、三河守熟々と見て、此は贗物にて候。子細は此刀鏹より上一寸背に馬の毛の通るべき計の穴の候。是を知る人外には無し、と申す。然らばとて竹俣を京に遣りて探し求むるに、眞の兼光の刀を清水の南坂より取出す。斯くと石田三成に告

けて、贋物したる者十三人日の岡にて死刑せられけり。竹俣越後に持歸りて、彼の穴に馬の毛を通して景勝に見せけり。其後此刀太閤に奉る。秀頼亡びて落武者取て和泉河内の方へ行きたりと聞えしかば、此刀を獻する者には、黄金三百枚賜るべき由仰せ出されしか共、其行方終に知る人無しとぞ。

○本庄 正宗の刀の事

本庄越前守繁長は越後の勇將なり。後景勝上杉十郎憲景が祿を本庄に與へらる。本庄出羽の庄内大寶寺義興と戦ひ勝ちて、一男千勝丸に庄内を與へけり。本庄最上義光と出羽の千安が表にて軍しける時、最上の軍敗北せしに、義光の士大將東漸寺右馬頭口惜き事に思ひ取つて返し、首一つ提けて越後の兵に紛れ、繁長を目に懸けて、只今敵の大將を討つて候。實檢に入れ奉らんと言ひて馬に鎧を合せ、駈け寄りて正宗の刀を以て冑を打つ。明珍の冑なりしかば筋四つ切削りたり。繁長右馬頭と切つて落し、首に添へて景勝に出したり。刀をば本庄に返し與へられしが、後故有りて東照宮の御刀となり、本庄正宗と言へるは此刀なり。

○冑の名様々有りし事

加藤嘉明の冑は形を富士山に造り爲して、名をも則富士山といふ。具足の胸に天人の雲に乗りたるを蒔繪にしたり。竹中重治が冑は一の谷、明智秀俊が冑は二の谷といふ。攝州一の谷二の谷相並べり。又柴田伊賀守勝豊が冑は鐵蓋が峯といふ。是は一の谷より高く峙ちたる山なれば斯く名附けしとかや。此餘浦野若狹守が小水牛、黒田長政の大水牛、日根野が唐冠の冑、原隠岐守が十王頭、福島正則の四また鹿の角、本多忠勝の倭藤四郎が冑、蒲生氏郷の銀の鯨尾、伏木久内がわり蛤、武田信玄の諏訪法性、秀吉の八日の月、加藤清正の長鳥帽子、矢田作十郎が鯉の冑、藤堂新七が帽子等言へる多し。細川忠興の山鳥の尾の冑と言へるも名高し。關ヶ原の軍に忠興彼の山鳥の尾の冑を著、銀の天衝の指物なりしに、遙に見て唯舞鶴のやうに有けるを、東照宮、冑と指物と映合ひて面白し、とて乞得させ給ひ、台徳院殿に參らせらる。

○伊藤七藏高名の事

信長江州小谷の城攻に伊藤七藏先駈したるに、從者取附きたる故、上帯切れて刀も脇差も堀下

に落つ。七藏少しもひるまず乗込んで、柵の木取つて敵三人叩き伏せ功名しけり。七藏父を若狭といふ。相州の人にて武者修行し、尾州前田村に居ける頃、信長呼び出されけり。七藏尾州三本木の軍に、事急にして編笠を冠りながら一番鎗を合せける故、信長大に賞美して編笠と呼ばれけり。後秀吉に仕へて度々功名有りしかば、紫紬井筒の紋廣袖の小袖を與へられければ、甲の上に著たり。秀吉の旗奉行と成りたり。

○井伊直孝用意の事

井伊直孝の曰く、人毎に具足櫃を持たせて早く取出す志を用意する者あり。取出す間も遅き程の事有らば、何時も素肌にて駈附けてこそよけれ。具足を著たると著ざるとの差別無き事なり、と申されけり。

〔補遺〕(以下八章異本に據りて補ふ)

○黒田孝高法體の事

黒田孝高は智謀衆に超えし良將にて、常に天下の望み有りけるが、或時豊臣秀吉孝高を召され

酒宴を催し尋ねけるは、如何に孝高、今天下に英雄豪傑多く在りと雖も、天下を保つべき程の者は誰と思ふや。孝高打笑ひ、某の如き者に争でか之を知る事を得べけんや。秀吉、我れ試に論はんと思ふなり。先づ言うて見られよ。孝高己を得ず、某考ふるに、當時天下に威名高く、天下をも掌握すべき者は中國の毛利輝元なるべし。秀吉莞爾と笑ひ、誠に輝元は今十餘ヶ國を切り隨へ、其威破竹の如くなりと雖も、是れ皆父祖の餘徳にして輝元が器量の爲めに非ず。然れば何んぞ天下を保つこと叶はんや。其外に一人在り知らずや。孝高驚きて問ふ。秀吉、眼前にありと。孝高、眼前とは何れに居り候や。秀吉、即ち其方なり、と聞きて孝高大に驚き、額に汗を流して、何條愚昧の某斯る大器に當らんや、と對へしが、孝高は我が胸中を秀吉に見抜かれ、針の筵に座する心地して、其日の酒宴を退出し、我館に歸り、所詮秀吉に見抜かれし上は、我が身の命も危し、と夫れより世を悟り直様入道し、是れまでの望みを水の泡になさんと云ふ心にて如水と號し、家督を子息甲斐守長政に譲りて隱居をなしにける。

○眞田幸村謀計を以て大里を退く事

第二回上田籠城の役、關東の大軍上田の城を十重二十重に取圍み、空堀に飛入りく堀に登り

て既に城中へ乗り入らんとなしける所に、城兵共堀の上に立現れ、豫て用意の竹の皮を幾許となく投出しけるに、固より片々然たる物にしあれば、寄手は更に事ともせず、拂ひ除けくして進みける所を、長き柄杓にて煮騰りし白粥を注ぎ掛けし程に、其粥寄手の鎧武具の隙間より肌はだに浸透しみ透み、軍兵共は熱に堪へ兼ね、あな苦しや、と遁出せば、先きに何の意なるを知らざりし竹の皮に迂りつ起きつ又迂りつ、人馬共に焼爛れ、本陣まで一捲に敗走しける。

○真田幸村稻荷陣の事

同役真田父子の敵の疲勞たる時を計り、部卒を數多城外に出して早稻田に赴かしめ、稻穂を刈り取らせしに、寄手の面々之を見て、儲は城中には糧食盡きぬると覺えたり。いで追駈けて撃取れ、と云ふ儘に、大久保、本多一萬餘騎にて咄と喚きて押寄せけるに、此時城兵は稻を刈取り束たばになして脊負せおはんとする所なれば、追駈け來りし者道を塞ぎて聲々に呼はりけるは、不敵なる哉城兵共、此大軍を引受けて稻を刈らんとは不覺なり、と云ふ儘に切つて掛れば、部卒何かは以て堪るべき、刈りたる稻を打捨てて、我れ先きにと城中へ逃入りける。寄手は大に笑ひ、儲々迂濶なる城方の舉動かな。拙くも此の有様、と口々に罵りながら、打捨てたる稻束を本陣に持歸

りける。斯くて夜に入り、人々眠に就かんとする時、頻に焔硝えんせうの匂におなしければ、這は不審と東西尋ね廻りしに、這はそも如何に、取歸りし稻束より炎燃出して陣々に移りければ、儲は又真田が謀略に當りしか、と急に狼狽うろたへぎ出しける所に、城中より三方の城門を押開きて攻寄せければ、關東勢戦はんとする者無く、皆々小諸を指して敗走りける。是れ豫て幸村が計ひにて、稻束の中に密に焔硝を入れ置きたるなり。嗚呼妙智の所爲なる哉。

○太閤勇氣大言の事

豊中秀吉朝鮮を征せんとて京師を發したる時、或人秀吉に謂ひて、彼の國に渡るに漢文を善する者無くては、日本の恥辱とも成りぬる事なれば、宜しく漢文を善する者を従へられて然るべし、と云ひけるに、秀吉笑うて云へるやう、吾れ此の行は、彼が難澁なる鳥跡とりせきの愚文を學ばんとするに非ず。將に彼れをして我が輕便なる假名文を用るしめんとするにありと、其勇氣最も稱すべし。

○朝鮮蔚山の役加藤清正敵情を察する事

朝鮮蔚山の役、寄手鎬貴夜密に伏勢を設けて曉に及び、陣營を焚きて退き走る事數里にして、城兵を誘ひ以て大に之を撃たんと爲しけるに、城兵之を追はんとするを加藤清正許さずして曰く、彼火を擧げて退く、疑ふ可きの一なり。又退くに殿を設けざる、疑ふ可きの二なり。又夜を以て退かずして曉を以てする、疑ふ可きの三なり。是れ將に我を誘うて、之を殲にするの巧なるや鏡に懸けて觀るが如し、と暫く見物し居し程に、明の伏勢は巧みし事空しく成りしかば、欠伸しつゝ現れ出でて、終に復城を圍みければ、皆々清正の明智を感ぜられける。

○黒田長政慢言の事

黒田長政常に人に謂つて云へるには、我れ年齢十四より今に至るまで拔群の功績を樹つる事多しと雖も、大功ある如水の子なるを以て、之と比較來りて目に立たざれば人之を稱せず。然るに淺野幸長は軍功なき彈正の子なるを以て、之と比較來りて目に立てば、寸功ある毎に人之を稱すと。是れ少しく慢言なるに似たりと雖も、情實或は斯くの如きもの有らんか。

○曾呂利新左衛門屢頓智の事

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤、汝の姓名は何と申するぞ、と問ひけるに、其者の對ふるやう、臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申候。太閤、ハ、ア奇な姓も有るものなる哉。して其曾呂利と申す姓には何ぞ所以にても有りつるものなるか、と問はせけるに、又對ふるやう、聊か所以之れ有り候。別に非ず、臣の拵へたる鞘は堅くして曾呂利と入り敢て問へず。是を以て曾呂利と申候。太閤、這は奇なり、又折節來らるべしと。他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、汝の姓名は何とか申せしな。對へて曰く、曾呂利々々々新左衛門々々々々。太閤怪みて其重言を尋ねけるに、新左衛門の對ふるやう、殿下先きに臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ふ。故に臣も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て對へ候なりと。新左衛門或時太閤に對ひ、願くは一日御耳の匂を臭がせられ度し、と有りければ、太閤は不審しく思ひ、頓智夫又何をか爲らんと思ひしが、何は兎もあれ宜し、汝がよきに臭がれよ、と許されしかば、大名の御機嫌伺ひに出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふの體なれば、皆々心中密に驚き、頓智夫何を云ふらんか。若しや我れを讒言する者には非ざるか。頓智夫は頗る殿下の寵愛する所なれば、頓智夫が云ふ事御用る有らんも亦測られずと憂ひ、各自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調べて密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山嶽の如く集ひければ、太閤の御前に出

で謝して云へるやう、殿下一日の御耳を拜借し御馥郁き匂を臭きたる功能によりて、金銀財寶山嶺の如く集ひ來りて、殆ど座するの餘席之れ無く候。是れ全く殿下の御耳の功能なり、と有りければ、太閤も亦呆然として驚愕きけるとなん。又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗る其功ありける程に、太閤の申しけるに、何なりと汝の望める物を賜はせん、と有りけるに、新左衛門の云へるやう、臣敢て大なる望みも之れ無く、唯紙袋二個程米を賜はりたし。太閤、开は甚々易き事なり。餘り寡欲の至りならずや、と仰せ有りけるに、新左衛門、是にて澤山なり、と申して退出なせしが、聽て二個の紙袋を張抜き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出て、前日御約定の米此に賜はり度し、と米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、流石の太閤も是れには呆れて、暫し言句も無かりける。又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水或は其近邊に放ちて娛樂となしけるが、程經て、見厭きたり、とて近習の者に、何ぞ一用を云ひ出づる者には之を與へん、と申されけるにぞ、皆々大に喜び、臣は之を紙押になさんと云ひ、或は、臣は金の茶釜の蓋も無ければ、せめては是を以て其蓋の取手になさんと云ひ、或は、何と云ひ斯と云ひて各々一個づつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、臣は人類の角力も既に見厭きし事なれば、此の蟹を集へて角力を致さんと存するなり、と云ひければ、太閤、角力とあり

ては五個や十個にては其興薄かるべし。悉皆持ち行く可し、と残れる蟹を皆新左衛門に與へけるとなん。其頓才實に驚くべく感ずべし。

○上杉景勝大人氣なる事

東西分目の役、徳川家康將帥百餘人を統べて小山に至りけるにぞ、上杉景勝長沼に軍し、兵を分け嶮を守りて今や遅しと待ちかけたるに、豫て上杉の臣直江兼續の約せし事にしあれば、上方に於て石田三成豊臣秀頼の命を矯り、毛利、浮田、島津、小西諸將と俱に兵を擧げて美濃路に差懸りける。家康此由を聞きて大に驚き、家康子秀康をして萬人を以て宇都宮を守らしめて、其身は自ら兵を引きて西上しける程に、兼續兵を悉して之を躡らんと請ひけるに、景勝聽さず。時に秀康來りて戦はんと請ふに會しければ、景勝答へて云ふやう、先人謙信軍を用ふる未だ嘗て人の危に乗らず。吾れ亦敢て違はず。且公年少し、我が敵に非ず。吾れ公の父内府の還るを待ちて決戦なさんのみ。糧仗如し缺乏る事有らば當に相給すべし、と乃ち兵を收めて會津に歸りける。此事謙信が勝頼に勇を成さしめたる事と同うして、共に大人の所爲と謂ふべし。

常山紀談 卷之十

○馬場重介武功の事

馬場重介職家は陸奥栗尾川貞任が裔孫にて、備前邑久郡北地村に來り居しが、其後も安部といひけるに、京都より來りし馬場氏の人豊原に居て、其の女を妻として遂に馬場と稱しぬ。重介稚名を岩法師と言ひて、十三歳にて邑久郡戸石の城主浮田大和守に奉公し、天文十四年浮田直家は乙子の城に在りて大和と軍あり。直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の島にて鎗を合せ、疵を蒙りて、戸石の城に歸る。今年十四歳なり。大和守膝に抱き上げて、疵の口を自ら吸はれけり。無雙剛の者なりとて、名を二郎四郎と改めさせられぬ。程なく直家、花房又七、近藤五郎左衛門、一説に六、星野十郎を大將にして戸石を攻む。二郎四郎白團の腰差指いて一の城戸口に出る。近藤見て、如何に引くか進むか、と詞を掛くるに、二郎四郎軍場に臨んで引くと云ふ事やある、と言ひも終らぬに、花房、星野共手利の射手にて、弓取り直し是を射る。花房が矢は中指に中り、星野が矢は二郎四郎が持ちたる楯を本はぎまで射貫く。二郎四郎物とも爲す。

敵を追ひ拂ひて歸れり。天文十七年赤坂郡鳥取の砦を、大和守攻めて軍あり。二郎四郎膝の口を篋深に射させ、二町許引き退きたる所に、味方に泉養坊といふ山伏來て、其矢を抜けば、足萎へて歩む事能はず。大和守の馬に乗りて二三町引き退きたりしかども、馬を返してければ、味方も隔りぬ。敵追つ駈け來らば討死せんと思ふ時、妹婚なりし片山彦三郎といふ者の弟來て馬に抱き乗せたるに、血鎧を越えて流れ朱に成りたるを、敵見て深手負ひたりと見なしたれば、十文字の鎗を取延べ、頻に掛落さんとする事幾度といふ事を知らず。漸に遁れ得て歸れり。首を取つて見とられて見るといふ諺有るは此時なる可し、と二郎四郎常に言ひけるとなり。是十七歳の事なり。後二郎四郎直家に奉公し與力六十人附けられたり。美作三星の城は、浦上宗景番手の兵を遣りて守らせたるを、安藝の毛利家より附城を構へ、三村家親大將として度々合戦あり。直家より馬場を加勢として三星に籠めたり。馬場愛宕精進するとて、五月二十四日細き流に行きて身を清むる處に、敵出でたりと聞き、直に行き向へば、三星よりも鎗提けたる士一人來て馬場に並び進む。敵を追詰めたれば附城より出て是を助けて城に入る。門内を見れば、混胃の兵十四五人折敷きて鎗の先を並べ待ちかけたれば、靜々と引き返す。宗景感狀を與へられ、直家夫より重介と名を改めさせ、家の字をやられけり。備前上道郡妙禪寺の砦の合戦に、重介

は刀、敵は鎗にて相戦ひ、溝を飛び越えて敵の手の下に潜り入らんとせしに、躓きて俯伏に伏したり。敵勇みかゝりて思ふ所を突き外し行き餘るを、つと立ち上り切り伏せて首を取る。同郡土田の軍にも長六尺に餘れる梶井と言ふ兵を討ち取りたるを、角南惣菴見て、白き浴衣を著、右の肩を肌脱ぎ、太刀打したる兵の有様昔の辨慶などや斯くもあらん、と驚きたりと言ふ。則重介なり。永祿十年五月十日土田の上蟹目の軍に、敵五人鎗を横たへ山の上より来るを、重介坂の下に有りて一人射倒したれども、味方は續かず。引き返す時、山の腰を引き退く味方、敵追ひ詰めて既に討たれぬ可く見ゆれば、返し合せ敵を切り靡け、味方を助けて引き取れり。備前岡山の城主金光與次郎を、直家謀を以て殺し、城を取り得たれども、近き邊に敵多ければ、戸川平右衛門を城番とするに、與力六十人皆行き兼ねたり。重介、我代らん、といふに、何の子細か有べき、といふを、直家に告げて許しければ、重介が與力六十人一人も辭退する者無きに、戸川が與力も勵まされて、重介、加勢ならば行かん、と言ふより、戸川馬場三年岡山に在り。美作三の宮の城を直家一時に攻めらるゝ時、城主村上勘兵衛士卒六十人許にて突いて出る。重介眞先に進み、鎗武者四人薙刀武者四人と戦ひて城門の際まで追討す。敵鎗を投突にしたるを奪ひ取つて歸る。高城にての軍に、直家重介を谷の受手とす。敵來らざれば谷より上る處に、山の半に鐵炮を五

段にして待ちかけた處に行きかゝり、三段追崩す。四段より搏つたる鐵炮に、右の膝より臀にかけて打通され、敵聲をかくれば、重介、中らさず、というて四段を、追立てる。崩れたる土手あるに、冑の鏝を傾け、寄添ひて待ちたるに、柴折り掛けたる谷の向より打つ鐵炮、脊割具足、右の肩かひがら骨の内より臂まで打貫かれ目暗みたり。氣を靜めて見れば、田中藤介間近く來れり。重介田中を呼びかけ、大事の手負ひぬ。此處を退かんとせば追討に遭はん。爰を死所とせん、といふ。藤介、我一支も爲べし、といふ。重介五間ばかり歩みて、郎等の肩に手をかけ靜に退くを、敵慕ひ來れば、藤介鎗を合せ追退けて歸れり。鐵炮に中りし時、大木を以て袋を突き通すが如く覺え、物の色目分かれず。只朝顔の花の色に見えたり、と後に語りけるとなり。備前兒島八濱にて軍有り。浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將にて、戸川平右衛門、岡平内已下渡海し、麥飯山の敵城近き邊にて草を刈る時、敵出て追つ立つる。與太郎馬に輪をかけて味方の兵を求むる處に、鐵炮の冑に中りて馬より落つ。中村宗介同じく討死す。重介馬を射られ、乗り放し歩立になりぬ。月毛馬、葦毛馬、黒馬に乗りたる敵三騎、重介を目にかけて馬を乗り寄す。重介敵に馬を乗りかけられじと、鎗の鏝を後になして脇に挟み、靜々と退く。疲れはしつ、討死よ、と思ひたるに、敵引きて助かりぬ。戸川見て、今日の働ゆる我一命を續きたり、と重介を譽めたる處に、

寺尾孫四郎、今日は重介を見ず、といふ。重介先にて見ざるか、後にて見ざるか。一番に進みたる敵の馬の毛色、物具は如何に、と問ふに、孫四郎赤面して詞なし。重介、吾鎗脇に弓をもち、後の證に立たれよと云ひて敵一人射倒したる人有り、といへば、鷹見傳兵衛進み出て、某にて候ひき、と言ふ。中納言秀家大坂より備前へ下らるる時、雨中の徒然に、浮田修理、同太郎左衛門、花房又七三人を呼んで、軍物語の時、前代の鎗柱功の勝れたるは誰ぞ、と問はるるに、馬場重介、幸和織部、寺尾孫四郎三人、と答ふ。秀家聞きて、幸和寺尾は武功ありつれど輕薄なりと聞けり。何時とても重介が人に越されたる事なしと聞きつれば、重介こそ勝れ候はんなれ、といはれしかば、三人、重介が武功は申すに言葉も候はず、と云ふ。重介貞實にて諂はず。城下の近き邊に引き込みて、此頃は耕作して有りける由を秀家聞きて、二百石加祿の折紙を、戸川肥後をもて重介に與へらる。如何にしたりけん事達せず。重介是を聞き愈出る心なく、遂に秀家にも仕へず、七十七にて病死す。士は假初にも汚なき心有る可からざるなり。吾數度の戰場に臨み、百死の中に一生を得て、斯く全く終りぬる、と遺言しけり。其子孫池田家に仕へけり。

○利家白雲の琵琶を種村に與へらるる事

種村省稚寺はもと柴田家にて譽あり。後招かるる人々多かりけれども仕へず。前田利家懇に迎へられしかども出ず。利家、種村が琵琶を彈ずることを好むと聞きて、白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば、其志にや引かれけん、利家に仕へて佐々成政と越中朝日山の合戦に、目を驚かす功名を遂けたり。其後淺野長晟に奉公して、彼の白雲の琵琶は今淺野家にありとかや。

○秦桐若威の事

黒田家の士に秦桐若といふ剛の者あり。唐團扇長さ一丈許もあるを指物にしける故、敵見知りて近附かず。或時指物を隠して、近々と成て不意に出せば、敵大に驚きて引き退きたる程の者なりけり。

○澤村大學朱柄の鎗を持する事

駿河を攻めらるる時、東照宮横目の人を召して、昔より皆朱の鎗の柄、瑠璃の柄は、武功勝れたる者ならでは持せざるに、近比は持たする者の數多有りと聞く。心得難き事なり。改めよ、と仰出されけるに、皆朱の柄の鎗持せ、菖蒲草の裁附を著て通る者有り。誰ぞ、と問ふに、細川越

中守が士澤村大學、と答ふ。此の由を申しければ、東照宮、其大學は若き時才八といひつるが、小牧にての事なりし、秀吉二重湊の軍兵を引き取る時、秀吉六萬許青塚に陣せしを、吾小牧より押寄せて、引き退く敵を打破る。其時細川忠興秀吉の先陣に有りて、才八眞先に進み、鎧を合せし有様、今も猶目の前を見るが如く覺えたり。斯かる大剛の者に持たす可し、とて、其餘の者を禁ずる事よ、と仰せられしかば、澤村傳へ聞き、今更我功名を世に擧げたる忝さ、と悦びけり。

○加藤清正天草の一揆退治の事

加藤主計頭清正、小西攝津守行長、各肥後半州を賜はりしに一揆起る。天草領は島にて一揆の勢甚盛なり。小西志岐城を攻めけるに、天草木戸の一揆の長天草民部後巻に押寄せ、志岐の東の山に陣す。清正の先陣山岡道阿彌、岡田將監、南部無右衛門、小野木織部、瀧野三位、莊林隼人、森本義大夫段々に進む。清正鶴平次をして先陣を見せしむるに歸らず。又飯田覺兵衛を遣られしに飯田見切つて歸る。平次、只今軍始らん先に進みて戦に逢んと云ふ。飯田知らぬ事は言ふまじきよ。先陣只今追立てられん。戦に逢ふ場に非ず、とて連れて返る。清正如何に、と問るゝに、飯田、先陣は今打負けて敵追駈け來らん。二の勝は旗本に候、といふ。清正證

は如何に、と問ふ。敵東の山に陣し地の利を得たり、と言ひも果ぬに、先陣敗北して一揆幕地に懸り來る。清正高き處より横合に突いて懸り、天草民部敗軍せしを三里許追討にしたり。清正十文字の鎧を突折り、七度鎧を合せ、其勢に乗じて志岐の城を攻落されけり。清正の鎧は十文字にて三日月の形なり。志津の作なりしが突折りて片鎌と成りし刃を拾取りて、佛木坂の神宮に納めしとぞ。鎧の鞘熊毛なりしに、瘡煩ふ人有れば、其毛一筋抜きて戴かするに、忽落ちけると言傳ふ。朝鮮人は今に至るまで、小兒の啼く時鬼將軍來ると云ひて啼止みけるとかや。かばかりの猛將類稀なる事なり。

○森本義大夫組討功者の事

清正一揆を攻むる時、或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしに、凡そ組討は力によらず候。心剛にて手利きたれば易き物なり、と申すを、清正、組討は危きものなり。勇に誇る時は必ず仕損ずべし、と戒められぬ。其翌日清正の眞先に森本馬を進むる處に、歩行武者一人寄合ひたり。森本聞ゆる馬の上手なれば、敵を横様に當てひらりと飛下り、立上らんとする敵を引組で頓て首を取る。清正に向ひ、夕申せしに違ひ候哉、と言へば、清正大に賞せられけり。

○朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事

東照宮江戸に御座しませしに、秀吉の使來りて朝鮮を伐たる由を申す。斯て一人書院に御座し、まして深く思案の體に見えさせ給ひける時、本田正信御前近く出でたれども御詞も無し。稍有て正信、殿は朝鮮に渡海有る可きや、と申せども、猶默然とせさせ給ふを、斯いふ事三度に及びて後、何事ぞ。喧しきに人や聞くべき。箱根をば誰に守らす可き、と仰有りしかば、正信、さては疾く御思慮定りける、と言ひて退出しけり。

○伊達家の士卒異風出陣の事

朝鮮を伐たる時、關東の諸將も兵を出さる。伊達政宗は遠國たる故に、騎兵三十騎鐵炮百挺鎗百本と軍配を定められけるに、千許の士卒を引具し、天正十九年正月九日岩出山を打立ち、二月十三日京に著く。小西加藤は先陣たり。岐阜中納言秀信を始として關東の諸將帥を出さる。其道は聚樂より戻橋を大宮に押通る。政宗の旗三十本紺地に金の丸附けたる具足著て、弓鐵炮の者も同じ出立に銀の鬘斗附の刀脇差、金の尖笠を冠り、馬上三十人黒袍に金の半月の出でし約

の皮、又は孔雀の尾熊の皮いろくの馬甲かけ、金の鬘斗附の刀脇差、邊も輝く許なる。中にも遠藤文七郎、原田左馬介は佩添に木太刀を一文許に作り帶たりしが、鞆尻の下りければ、金具を真中に設けて糸を結び肩に懸けて馬に乗りたりけり。見物の群衆政宗の軍兵押通る時目を驚かす出立なれば、一同に喚き囀きけるとぞ。

明の援兵朝鮮に來り、平壤に有りて練光亭より日本の兵を望みしに、江上に往來する者大劍を荷ふ。日光下り射て電の如し。是は眞の劍に非ず。白蠟を沃ぎたる物なりと言ふ事、懲録に録せしは、伊達家の二士の木劍の事にや。

○朝鮮南大門合戦附後向の備の事

朝鮮南大門の軍は文祿二年正月二十六日の事なり。明の援兵鴨綠江を涉り押來る。小西行長叶はず引退く時に、小早川隆景は開城府に止り一軍せんと待ちかけたり。浮田秀家使を以て、疾く都城に引返して一所に軍有るべし、と申されしか共、隆景、吾日本を打立ちしより異國に討死せんと思ひ設けたり。年老い候ひぬ。今生の思ひ出に異國の大軍に駈け合せ、大國の耳目を驚かす軍して屍を戰場に晒さんと存する所なり、とて引取らん氣色無かりければ、又大谷吉隆を遣

して、誠まことに雙ななびなき志こころ、古いにしへの名將めいしやうも是こゝには過すぎじ。然さればとて二萬許にほかりの兵へいにて大軍たいぐんに取巻とりまかれ、空くうしく討死うちし有あらん事こと口惜くわしく候まう。只疾ただく都城みやしろに入りて日本の軍いくさの先陣せんぜんせられ候へ、と有りしかば、隆景たかかげ、さらば日本の先陣せんぜんは隆景たかかげ仕つかまつらうするにて候。人に先陣せんぜんをば駈かけさせじ、とて黒田長政くろたながまさ、久留米秀包くろたながまさ打連うちつれて都城みやしろに歸かへられしが、南大門なんだいもんの外碧蹄館へきていくわんに陣ちんせられけり。二十六日の曙あけぼのに李如松りよしやうが軍押來ぐんおしかる。旌旗せいきを立て連ね何十萬とも測かるべからず。秀家を始はじめとして大軍たいぐんに野合のあひの合戦危あひからん。都城みやしろに楯籠たてこもらん、と言いはれし時とき、立花宗茂たちばなむねしげ目を見出し刀かたなの柄つかに手を懸かけ、敵怖てきおそければとて逃にげ籠こもる様さまや候。只馳合たしあはせ蹴散けちらして候はん物を、と勇いさまれしかば、然さらば誰たれか先陣せんぜんせん、と言いふに、隆景たかかげ先陣せんぜんせんと兼かねて言いひつる事ことよ。誰人たれびとにても有あれ思おもひも寄よらず、とて、頓やがて陣ちんを進すすめらる。士大將しだいしやう粟屋四郎兵衛あはや村十彈正むらかみしやう野島掃部のしま三千許喚よめき叫こゝろんで相戦あひまふ。立花宗茂たちばなむねしげ、久留米秀包くろたながまさ、毛利元康もりのつとむ六千餘あまり奇兵きへいとなり、右みぎの方かた三町餘さんちやうあまりに陣ちんせしが、横よこ様に懸かる。隆景たかかげ旗本はたもと一萬餘いちまんにあまりを率そつして一文字いちもんじに切きつて掛かり、忽たちまち敵てきを討破うちやぶり、首數くびあま多おほ得えられけり。宗茂むねしげ取とつたる首くび二つ鞍くらの四方手しほでに附つけ、隆景たかかげの方かたに來きられしを見て、取敢とらず、早事はやことに候、と言いはれしかば、宗茂むねしげ毎ごとも仕つかるにて候、と答こたへられけり。此軍こゝろ未いまだ始はじめらざりし時とき、黒田長政くろたながまさ唯一騎歩いちきふの士し六十七人むそしち召具よめし、隆景たかかげの旗本はたもとに來きる。隆景たかかげ、よくこそ來きられ候へ。先陣せんぜんの粟屋あはやに力ちからを添そへ給たまへ、と言いはれしに、長政ながまさ悦よろこびの色面いろおもてに顯あれて、承うけの候、とて

先陣せんぜんに向むかはれけり。殊ことに寒風かんぷう烈はげしう吹かきたりければ、長政ながまさ大綿帽子おほわたぼうしを被かられしが、先陣せんぜんに行いきて帽子ぼうしを脱ぬいで、世よに聞きえける水牛すいぎやうの胃いの緒いとを締しめられけり。隆景たかかげの軍兵ぐんへいども是こゝを見て、今日けふの軍ぐんに勝かちたり、と勇いさみけるとかや。長政ながまさ今年ことし二十五才にじふごさい、武勇ぶゆうを斯かく人に信しんぜらるる事こと並ならんには非あざりけり。

或説あるつに、漢南かんなんにて明みんの援兵えんぺい大軍たいぐんなりと聞きえしかば、諸將しよしやう評定へいぢやうして吉川元春きつはもとを先陣せんぜんとす。元春もとむつ勇猛ゆうまうの名高なごき故ゆゑなり。元春軍兵もとむつぐんへいを後あと面めんにして敵てきを見せず。敵近てきぢくなりける時とき、士大將しだいしやう某なにか焼飯やきいしを十許じゆ持ち來きりて、時宜ときよろしく候。きこしめされ候へ、と言いふ。元春もとむつ是こゝを九こつ食しし、士大將しだいしやう將二しやうにつ食しして、残のこりを近習きんじゆの者ものに與あへたれども得食えくはずとかや。敵合てきあひ二町許にほかりに成なりける時とき、元春もとむつ下知したちして一同いどうに向むかき直ただり、透すかさず突つ掛かり敵てきを追崩おつづして、頓やがて引取ひきとられけりと言いへり。目めに餘あまる大軍たいぐんに逢あひて士卒しゆそ氣きを奪うばれ見崩みぶれす可べきか、と元春もとむつ思おもひて斯かくせられたりとなり。是こゝに誠まことに味方みかたの氣きを挫くじかしめざる將略しやうりやくにして、元春もとむつは關西無雙くわんさいむしやうの勇將ゆうしやうたる事こと誰たれか非問ひかんすべき。然されども元春もとむつは朝鮮陣てうせんぢんより前に死し去さ有りしかば、隆景たかかげ斯かくせられたりしを傳つたへ誤あやりたらんも知るべからず。

○國富源右衛門組討の事

南大門の軍に明の兵を追かけ、秀家の土國富源右衛門とて剛の者大力なりしが、爽に鎧うたる敵に追附きて、三尺餘ある刀を取延べ、三刀まで斬りたれども甲堅くて手も負はず。國富刀を捨て飛掛り引組んだるに、彼敵國富を取て押へたり。跳返さんとするに大磐石を横たへたるが如し。國富脇差を抽いて二刀刺せども、如何なる甲にや少も通らず。已に危かりし時、味方數十人落合ひて敵をば討取りたり。

○加藤光泰大言の事

朝鮮にて秀家を始め都城に在りしに、加藤清正進んで行程數日を隔つ。諸將糧盡きんとする時、加藤遠江守光泰獨云く、清正都城を放れて敵に向ふ。人々都城を去つて食に就かんとせば清正を捨殺すべし。今爰を去る者は復男子の交は非じ。清正を捨てん事日本の恥なり、といふ。人々糧既に盡きたり。如何せん、と言はれしかば、遠江守怒つて、砂を喰はんものを、といふ。砂は喰れまじ、といへば、遠江守居丈高に成りて、汝等砂を喰はん様よも知らじ。我教ふべき、とて福島正

則を屹つと見て、如何に市松何時の間に大きに成りたるぞや、とて又秀家に向ひて、今までは中納言殿と敬ひ申したりき。今日よりは中納言めと申すべし。清正を捨殺し、恥を異國に晒す人々なり、と言ひ捨てて座を立つ處に、清正糧盡きて都城に引退き、三里許の近所に陣したり、と告げ來れり。遠江守は清正と生死を同じくせんと思へるに免れけり。

○吉田又助川幅を積る事

朝鮮の平安川は深さ八九尋、四五百石積の船の往來有りて、日本にては見ざる大川なれば、川の廣さを諸家の士或は七八町十町、或は十二三町有らんと言へ共審ならず。黒田長政の士吉田六郎大夫（雅名六之介、後壹岐、此時六郎大夫といへり）又助父子に見積り候へ、と下知せらる。斯様の事に慣れず候故覺束なし、と辭すれば、父子が組に巧者も有るべし、と言はれて、翌朝又助組の士を引具し、川岸に出で、川の向に朝鮮人三人見えたり。又助、小柳權七は長高き者なり。彼向の人退かざる間に急ぎ堤の上を行くべし。指物を振る時踏み停れ、と言含め、權七走り行き、其丈向の人と等しく見ゆる時、指物を振りたれば立停りぬ。即其間を打ちて見れば八町五段なり。長政聞きて、又助二十一歳老功の者にも劣らじ、と稱美せられけり。

○清正虎を狩られし事

朝鮮にて何れの所にてか有りけん、清正の陣大山の麓なりけるに、虎夜來りて馬を中に引提け、虎落の上を飛び出でけり。清正口惜き事なりと怒られけるに、小姓上月左膳をもち虎來て啗殺せり。清正夜明くると山を取巻いて虎を狩りたるに、一疋の虎生茂りたる萱原を搔分け、清正を目がけて來る。清正大なる岩の上に在りて鐵炮を持ち狙はるゝに、其間三十間許、虎清正を睨みて立止る。人々鐵炮を揃へて搏たんとするを、清正下知して打たせられず。自打殺さんとの志なり。斯て虎間近く猛り來り、口を開きて飛掛る處を搏たれしに、咽に打込みたれば、其處に倒れ起上らんとせしかども、痛手なれば終に死しぬ。

○清正船を取らせられし事

清正朝鮮にて大川に打臨み、向の岸に船を繋ぎ、陸に陣屋有りて旗を立てたるを見て、彼を見よ。鷗岸に添ひて泛みたるは敵は無きぞかし。誰かある水練の者彼の船取來れ、と下知せられしに、果して清正の言の如し。又清正の陣所に糠無くて馬秣に困めり。清正、藁を細に切りて豆

に雜へて飼へ、と言はれしに、馬の力落ちざりけり。

○太閤名護屋にて大言の事

明の援兵大軍にて朝鮮に來り、日本の軍危しと太閤聞かれ、軍評定有りし時蒲生氏郷進み出で、何程の事か候べき。氏郷に朝鮮を賜り候へば、切取にして打破る可きものを、と言はれしかば、太閤是より氏郷の志有るを忌み憎み給ふ。又同時隆景使を以て、隆景が存する所は、十萬の軍兵渡海せば城々を守らせ、隆景先陣して明朝に押入り北京を攻落すべし。此旨申せと申して候、といふ。秀吉、小早川の智謀さぞあらん。人々能く聞かれよ。秀吉功を遂げずして死するとも、秀次を大將として明朝に攻入らん時、我魂魄雲に乗じて鐵の盾をつき、唐土の奴原を一々に蹴殺して捨てなんものを。昔も柘榴を嚙みて火となせし者の有りしと聞く。其小男の名を忘れたり、と言はれしかば、施樂院秀成、夫は北野の天神の御事にて候、と申す。秀吉、夫ぞかし。雷になりて天に上りしと言ひ傳ふれど、吾陰囊の垢程もあらぬ物を、と大音に言はれしを、聞く人毎に驚きけり。

○菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事

黒田長政朝鮮の全義館に陣せられしに、或曉俄に騒ぎければ、敵夜討にや寄せたる、と井樓に上られしに、虎馬屋に入りたるにてぞ有りける。恐れて出づる者も無かりしに、菅政利刀を提けて走り向ふ。虎咆み掛る處を飛違へて腰骨を深く斬附けたり。虎前足にて立上り、愈猛りて危かりし處に、後藤基次駈け來り、肩先を乳の下かけて切り附くれば、菅得たりやと虎の眉間を切り割つて殺しぬ。長政、汝等先陣の士大將として下知する身なるに、獸と勇を争ふ事大人氣無しとぞ言はれける。政利が刀に林羅山銘を作りて南山と名附く。周處白額虎の故事なり。銘に曰く、

節彼南山 山惟劍鋌 苛政除去 酷吏逃藏 截邪斬佞
惟刀在箱 惟其言虎 若有真偽 傳之萬世 爲子孫常
朝鮮機張にて長政虎狩せられしに、虎一匹人の群たる中に駈け來る。菅六之助が足輕の肩を唾みて後に擲け、又一人をも腕を唾みて投倒しけるが、六之助其日朱具足を著たるをや目に懸けけん、忽ち飛懸りて、菅二尺三寸有りける刀を抜いて忽に切伏せたり。其刀今に

菅の家に持傳ふ。備前吉次が作なりき。大徳寺春庵和尚其刀に斃秦と名を附けたり。秦は虎狼の國と言ひし故にこそ羅山林子も銘を作られたりと言ふ一説あり。

○泗川の城に狭間を切る時の事

文祿五年朝鮮にて、泗川といふ處に城を構へたる時、門脇の狭間を垣見和泉守家純上て切れ、と下知しけるを、長曾我部元親見て、人の胸邊より腰邊を當てて切りたるこそよけれ、といふ。和泉守、下けたらば敵城内を覗ふ可き、と言ふ。元親、此門へ押寄せ、心よく内を見る程の城兵にて有りたらば、一支もすべきや。上げて切らば敵の首の上を射べきかと笑ひけるとぞ。

○加藤嘉明拔懸高名の事

慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置きて日本の軍船を防ぐ。諸將番船を乗取るべき評定有り。加藤左馬助嘉明、目に餘る大軍を小勢をもて争か打勝つべき、と言はれしが、密に手の者に下知し、五人十人船に乗り番船の方に漕向ふ。嘉明、法を背く者共を押留めよ、とて追々船を出されしが、稍有りて、我押止すば止らじ、と言捨て船に乗り漕出す。河合庄大夫、同庄次郎、荻野作右

衛門、かぎ懸の三介五人打乗りて番船の中に押入たり。三介、船は何れ、と問ふ。正中の本船に著けよ、と下知し、聽て乗移る。敵其勢に恐れ、船底に入りて劔を抜き、鏃を揃へて待ちかけたるに、嘉明少もためらはず飛込みたれば、從者なにかは残るべき、續いて飛入りて撫切にして本船を乗取りたれば、諸將も追續き船を押し出される。既に鐵炮の藥に火移り、燒船を乗取る者多し。河合庄次郎は十六歳なるが、飛入るとて海に飛込溺死す。佃次郎兵衛、加藤權七郎勝れたる功名せり。嘉明一人の武勇にて七月十六日白晝に押寄せ、番船百二十艘、一艘に五百人三百人乗組たるを、僅の士卒にて悉く海に切沈めたるは古今に稀なる事共なり。秀吉感状を與へ、六萬二千石に増祿して十萬石を與へらる。池田家の長臣池田河内が妻は嘉明の女にて、河内が男伊賀は外孫なり。伊賀若き時外祖父に武功の事を尋ねければ、今は年老て過ぎつる事皆忘れたり、とのみ言ひて止めぬ。から島の船軍の事を問ふに、十五六歳なる小姓の船に乗移る時、矢に中り海に落ちて死したりき。不便の至りなり、と只此事を語りて他の事に及ばざりしとぞ。

○淺野長政諫言の事

太閤名護屋に御座して朝鮮の軍はかぐしからぬを怒り、諸大將を集め、今は秀吉自ら押渡る

べし。三十萬の軍勢を二手にして利家氏郷に先陣させ、三道より打破り、眞直に明朝に攻入るべし。日本の事は徳川殿御座せば心に懸る事なし。如何に思ふ、と有りければ、東照宮聞し召し、利家氏郷に向はせ給ひ、人多き中より撰び出されて、一方の大將たらん事面目にてこそ候へ。抑我等弓箭を取りて年寄候。斯る時に人の跡に屈み残りたらんは口惜き事なり。必一方の先驅を承るべし、と仰せられけるに、淺野彈正少弼長政進み出て、暫く待ち候へ。殿下此年月の御振舞昔に替りて候。古狐の入替りたると存するなり、と申しも果てぬに太閤大に怒り、やあ秀吉が心に狐の入替りたる所謂屹と申せ、申損じなば首打落さんものを、と睨まれたるに、長政ちつとも騒がず。長政が如き何十人が首刎ねられんも何條事の候べき。抑由無き軍を起して朝鮮八道は申すにや及ぶ、日本六十餘州に父を討たせ兄弟を失ひ、夫に離れ子に先立ち歎き悲しむ者満々たり。夫に兵糧の運送相加はり、六十餘州の内悉く荒野となる。今發向候ひなんには五畿七道盜賊發起せん事必然なり。徳川殿如何に思召し候とも争か是を防ぎ給ふべき。爰を思し召して先陣とは仰せ候やらん。殿下昔の御心ならんには、是程の事など御心附の無るべき。是唯事に非ず、一定古狐の入替りたるに候。鄙き人の詞に、人取らんとする鼈は必ず人に捕らるゝとは此事に候、と憚る所なく申し放てば、太閤何れにもせよ己が主に斯雜言するこそ奇怪なれ、とて飛蒐らん

とし給ふを、人々押隔てたり。長政はさあらぬ體にて、人々に色代して靜に座を立ちて陣所に歸る。斯る所に肥後國に逆徒一揆を企つと聞えければ、太閤大に驚き、長政を召出し、汝が嫡子左京大夫幸長罷向ひて切靜むべし、と下知せられ、本多中務大輔忠勝を添へて肥後國へぞ向けられる。

○井口與市主從功名の事

朝鮮にて、何れの所の事にや、廣き野に道有りて向うは山の麓なるに、大穴を構へ射手を伏置きて、行きかゝる日本人餘多射殺しけり。黒田家の兵井口與市が從者山崎喜藏、いで參つて見申さん、と言ひも敢ず走り行き、井口も馬より下り走入りければ、山崎射手三人斬伏せる。井口續て攻入り追散す。井口、恩賞に望候はず。天晴朱柄の鎗免され候へ、といふ。物師共寄合ひて、武功度重るか、或は一日の中に首七つ取る時は朱柄の鎗持すると申す事の候、輕々しく許し難き事にや、といふ。井口是を聞き、其後一日に首七つ取りて朱柄の鎗持せけり。

○清正の武備嚴重なりし事

朝鮮にて清正全州に在る時、釜山海より十里餘の程、日本の軍兵城々を守りて、七八里或は十里許にて伴の城を設けたり。清正を太閤呼れしかば、日本に歸るとて打立たれけり。戸田民部少輔高政密隅に有りて清正と舊友なれば、饗すべき用意して待たれしが、士大將眞鍋五郎左衛門神谷平右衛門を途中まで迎とす。四里許出づれば清正の先陣見ゆ。其頃は四方に敵無く無事なり。二人とも革羽織袴にて出でたるに、清正の軍兵皆物具して簞食附け旗を張り立て、磨筒の鐵炮五百挺眞先に押して、鐵炮には火繩を挟み火を附けたり。清正は溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の緒をしめ、頬常脚常して草鞋をはき、銀の九本馬蘭の馬印を自ら背に指し、月毛の馬に白泡嚙ませて來れり。二人馬より下て迎へけるを、清正見て、民部よりの迎の使者骨折なり。早くそれへ著陣せん。殊外に人々垢附きぬ、風呂をたて下々まで湯を賜はりなば大慶ならん。此由疾く歸りて申されよ、と詞を懸らる。二人、承り候、とて馬に乗り、急ぎ歸りて斯くといふ。程無く清正著陣せられ、屏重門より入る。椽にて民部近習の士二人寄りて、清正の指されし馬蘭を取つて旗籠に立つる。清正椽に上らんと草鞋の紐を解き脚當の緒を解く時、清正腰に附けたる緋曇子の袋を座敷へ投入れたるに、どうと落つる。米三升許に味噌銀錢三百文入れられたり。馬印を指すに腰の釣合是にて能し、となり。民部驚きて、十里近きに敵も無くて如何なる事ぞ、と言へば、清正も

のは大事と心得たるぞよき。油斷大敵といふ事有り。我物具せず身を安じ度くは思へども、左有らんには皆懈るべし。夫故に身は苦しけれども懈無き爲に斯くはせしなり。萬一の事有らん時懈りて事を仕誤るならば、今迄の武名虚名にならん事を慮ればなり。凡上を學ぶ下とて、大將寛けば下は大に怠るものなれば、常々陣法を嚴にする事に候。上一人の心下萬民に通ずるとか

○朝鮮より虎と象とを渡す事

朝鮮より虎と象とを引き来る。象は柔順のものなれば細き綱にて引きけり。虎には鐵の鎖を附け左右より七八人取附て引来る。朝鮮渡海の諸將一旦名護屋に歸り集られし時、彼虎に大力の男數多左右に鎖を控へ、嘯と言つて駈け出し、幾らも並居たる中を通りければ人皆驚きたるに、清正膝立直し拳を握り、臂を張りて虎を屹と睨まれしに、虎も暫し立止まりて清正を睨みて打過ぎぬ。嘉明は壁に倚り掛りて居眠して在りしが、虎通り過ぎたる後も初に異らず。稍有りて目を開き、何事に騒がれ候ぞ。虎を引通れる故にや、といと靜に言はれけり。

○清正の士卒土穴に住みし事

慶長二年二月、清正再び朝鮮に渡られしに、船の著きたる處は北地にして寒風烈し。土民ども土穴を穿ちて其中に住居りしに、日本の軍兵押渡ると聞き逃走りしかば、清正の兵共土穴に入りて臥す。清正漫に民を殺さず、非道を嚴に戒めしかば、後には商人も物を馬に附けて來り賣りしに、寒氣以ての外に甚しくて、馬の毛に氷柱の下りてからめきて鳴る聲、土穴の中に聞えけるとかや。王元美が詩に、

風劈面疑裂 凍粘髭有聲

と言へるを懐ひ合されぬ。軍兵晝は終日風砂の中に立ち、夜は土穴に臥しける故、皆雀目に成りしを、土民教へて鳶を食して癒えけるとぞ。

○森本庄 林 黒白鳥毛の鎗鞘の事

朝鮮にて何れの處の戦にや、清正の士大將森本義大夫流矢に臂を射させたり。斯る處に庄林隼人馳來るを見て、如何に手負ひたり。此矢抜いて給はれ、といふ。庄林馬より下りて抜いて捨

つれば、森本、さても快き事かな、と言ひも敢ず馬にひらりと打乗り、一鞭打つてつと駈け出し、庄林に續かれよと云ひ捨てて敵に逢ひ首を得たり。一人とも清正の士大將大剛の者なり。森本が鎗は白鳥毛を鞘とし、庄林は黒鳥毛を以て鞘とす。世の人黒鳥毛白鳥毛と言ひ合へり。

○清正の花押筆畫多かりし事

朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時、清正の花押殊に筆畫重り、稍暇要りしかば、福島正則冷笑ひて、病重くなりて遺言の時の状態からん、と言はれしに、清正、我はさは存ぜず。戰場に屍を晒すとも、汚く逃げて褥の上に死んとは思ひ設けず候。然れば遺言状何かは候べき、と答へられしかば、正則詞無かりけり。

○後藤基次龜甲の車を造る事

晋州の城を攻めらるゝ時、黒田長政の士大將後藤又兵衛基次、龜の甲といふ車を作らせり。厚板の箱を拵へ内に強き切梁を設け、石を落し掛けても箱の摧げざる手當をし、箱の内へ後藤入りて、棒の棹を指し車を箱に仕かけ、進退自由に廻る様にして城際へ押詰め、石垣を崩して乗入けり。

○和寧館合戦栗山利安武功用意の事

慶長二年日本の軍復渡海し、黒田長政の先陣栗山備後利安、後藤又兵衛基次、衣笠因幡、母里但馬、黒田宗右衛門以下三千許和寧館全義館に陣せし處に、明の援兵押寄する。其由長政に告げよ、とて書簡を書きけるを利安見て、敵懸り候間早々に救はせ給へと言ふ詞や有る。書き改めよ。敵押寄せ候。先陣は少も心を勞せらるゝ事有る可からずとこそ申すべけれ、とて直させてぞ告げたりける。斯くて敵寄來れば利安先陣して打破りたり。長政聞くと等しく打出て揉みに揉んで駈け來られしに、敵早護龍臺を指して敗北しけり。先利安が陣所に入りて、何とて軍を仕たるや、と言ひも終らぬに、利安目を見出し、押寄する敵に辭退する事や候、と申す。長政、汝等討死せば我生甲斐無しと思ひて斯くは言ひしなり。何とて疾告來らざるや、と言はれしかば、傍より、告げ申す書簡の詞を書改むると遅かりき、と申す。利安夫は臣が改めさせて候。仔細は云々なり。假令疾く救はせ候へと申すとも、行程隔りたれば無益なり。敵は四萬許も候はん。味方必死を思ひ定めて軍すべきにて候。假令屍を異國の野原に晒すとも、名は後の世に傳はるべし。黒田が先陣の剛の者共、大敵に取巻れ潔く討死したりと言えなん。又疾く救はせ候へと申さんに

は、後日に黒田が者共主君の援ひを待ち兼ね、皆打殺されたりと人に笑はるべし。是日本の武名を穢すに候はずや。弓箭取身は假にも名こそ惜く候。且は今生に暇乞と存じて、告げ奉る書簡殊更に改め申しき、と申しければ、長政大に悦ばれけり。

○栗山利安儉約の事附日根野備中守黒田家に銀を返す事

利安若き時は善介といひ、中頃は四郎兵衛といふ。長政に筑前を賜りし時、名島の城に長政居て、左右良の城に利安を置かれけり。祿一萬五千石、極めて儉なる人なり。人の衣服の美麗なるを見ては褻晴といふ事の有りといひ教へ、又價高く馬を購ふ者有れば、然ばかりの馬も二疋の用をば爲さじ。何とて無益の費するぞ、と戒めけり。然れども事に臨みて金銀を惜むの心なし。從者を勞り憐み、貧乏を助くる事、尋常の人に大に踰え勝れり。

日根野備中守朝鮮に使として往く時、黒田如水に銀を借り、歸りて後如水の許に行きしに、如水近習の士に、先に人の贈りし鯛を三つにして、その骨を烹て饗し候へ、と言ひしかば、吝嗇の甚しき事よ、と思ひ居たり。頓て肴を出し酒宴有りし後、彼借りたる銀百枚取出し返せしに、如水始より返し給はらんとの心にて貸し候はず。異國に渡らるゝにより頼まれしかば

送り參らせしなり、とて受取らずして止め。栗山も如水の風に習ひたるにや、君臣共に頼母しき事ぞかし。栗山の戒をもて惣て世の有様を見るに、士と言はるゝ人の體こそ無下に口惜しけれ。多くは美衣を著飾り明暮酒宴して、馬具武具様の物如何に有るやらんも知らず。多くは商家に典當し、或は茶の湯よとて古び缺けたる器の何の用も無き物に數金を費し、博奕とてあらぬ戯に夜を明し、斯ばかり無二に言ひ交しけん人の黄金を奪ひて、其人の赤裸になるも顧みず。是はそも盜賊の心にも劣り果てたる事なるべし。扱物語するを聞けば、多くは女色の戯れごとのみにて、禮義廉恥は露ばかりも知らず。又或は儉約にことよせて利倍の事には錐刀の末をも争ひ、人を欺きて己が得有らん事を願ひ、或は奢侈に耽りて用度に苦み、商人に向つて首を垂れ、其人の恩を得て金銀を借り、是を恥ともせず。門を出づれば從者數多召具し、我は門地の云々なりとて、途中にて人を厳しく追拂はしめ、家人を飢ゑしめて購ひたる價を遣らず。大國の君も亦大かた斯の如し。不仁不義の行を爲して、世の人の誹笑も知らず。世界は皆斯くなるよと思へば、風俗の衰へ無下に口惜き事なり。

常山紀談 卷之十一

○竹中重治心掛の事

竹中重治 曰、分に過ぎたる價を以て馬を購ふ可らず。其馬に乗りたる時能き敵と見かけ追詰め
て飛下りんと思ふ歟、或は又鎗を合せんと下立つ時、馬副の人の續かざれば此馬人の物に成る
べし。又斯る馬は得難しと思ふ心出て期を延す事有り。此能馬故に却つて名を失ふ事も有るべ
し。かせ士は金十兩にて馬を購はんとするに五兩にて求むべし。惜氣もなく飛下り乗放ちて能
き時は捨てますべし。扱て五兩の金にて又馬を求むべし。馬に限らず此心得有るべきなり。身を
も義によりて捨つるぞかし。まして財寶をや。塵芥とも思はぬ心掛常に有るべきこそ士の本意
なれ、とぞ。

北條家の厩を預りし諏訪部といふ者度々功名あり。何れの時の軍にや、勝田八左衛門とい
ふ者と二人物見に出る。敵不意に出でて附慕ふ。二騎引取る時、諏訪部は馬を預る故勝れた
る馬に乗りたる故、乗切つて馳歸る。勝田は後れたり。敵追詰めたれば下立ちて相戦ふ。味

方助け來れば勝田打伏せられ頭半切られたり。敵引取りたるに勝田助らじと思ふ。勝田手
にて頭を持ち上げ、未だ死せざるに人々は捨てて歸るや、と言ふを聞て助けて歸りけり。勝
田も度々の功名あり。後松平右衛門大夫に仕へけり。竹中が論尤士たる者の知るべき處な
り。弓箭取る身は朝夕に軍旅の事を論ぜん事有らま欲しき事なり。然らずば必ず天の冥加
に盡くべきなり。戦國に生れし人は、其事に臨みて功有りて祿を得たるにてこそあれ。今泰
平の時に生れ、父祖の蔭にて祿を世々にするは、天より士の職を命ぜられたるなり。天より
命ぜられたる其任を忘れなんには、天の冥加に盡ん事必定なり。又天下の四民の上在り
て下を鎮むる職疎にせんは、口惜かるべき事にこそ。

○峯澤某謙信を撃たんとせし事

謙信の許に峯澤何某といふ士、罪有りて放斥せられしに、越中の椎名に奉公し、謙信越中へ師を
出されし時、彼士叢に隠れ、鐵炮を持ちて伺ひ居たりしが、俄に鐵炮を傍に投捨てて泣居たり。
謙信見出して、如何に峯澤珍し、と言はれしに、さばかりの仁君智將を討ち奉らんと存ぜし事悔
しく成りて候。今遙に見奉りて、先に屋形の心に背き、又斯る設を工み申す事此上も無き大罪に

て候。疾うく首を刎ねらるべし、と言ひて平伏しければ、謙信打笑ひ、吾に智仁とは相應せざる虚名なり。疾馳歸りて椎名に能く仕へよ、と言はれしかども、彼の士越後に歸りて、農夫と成りて一生を終りたりとかや。

○久世三四郎坂部三十郎物見の事

東照宮何れの時の軍にや、久世三四郎宣廣、坂部三十郎廣勝二人を物見に出し給ふ。坂部は勇める色あり。久世は氣色甚だ悪う見えしかば、側より笑ふ人の有りしに、東照宮、坂部は天性の剛の者なり。久世が及ぶべきに非ず。然れども久世は人に劣りて生甲斐無しと思ひ定めたる者なり。其故に務めて勵む故、心を勞して其氣色顯れて見ゆ。今見よ、久世は坂部よりも敵近く進み行きて見て歸らん物を、と仰せける處に、二人歸り参りたるが、果して御詞の如くなりけり。東照宮、坂部は生得の勇を頼にして懈あり。久世は勵むをもて味深し、と感ぜさせ給ひけり。

○野々口彦助物語の事

明智光秀が士野々口彦助、山中鹿之介に逢ひて功名せん事を問ふ。鹿之介、物前には必ず目の明かぬものなり、能心得られよ、といふ。彦助させる事とも思はず。其後何れの戦にや、川際に野々口打出でたる處に、朝霧棚引きて物色見え分かず。時に山中が教へし事を思ひ出し、手綱を控へ、爰にて目が見えぬと言ひしは吾後れたるならん、と目を塞ぎ心を静めて目を開きたるに、川の半に物具したる武者大差物を指して只一騎渡り来るを見附けて、心も爽に目も明に成りたれば、押並べて引組んで落ち首を取りたり。後に彦助、是も我眞實の功名には非じ。彼敵大差物に身の疲れて輒く我に組敷かれたるならん。彼敵も物前に目が見えざりつらん、と語りき。

○石谷定清御供に参る事

石谷十藏定清は、先祖は遠江石谷村の人なり。大坂御出陣の時江戸に残させ給ひしに、御跡より従者一人に具足箱を脊に負せ、自ら鎗を荷ひて潜に江戸を出で、駿府にて追附き奉りけり。兼て心易かりし近習の人に頼り、江戸に残り申す事口惜く存じ、重き御法を破りて参りぬ。首を刎ねられん事は素より覺悟したる事なれば、如何に御咎蒙らんとも露ばかりも悔む事は候はずと申上けて給はり候へ、と言ひしかば、將軍には殊に法制を嚴に思召し給ふなれば争か御許されの有るべき。若し御宥有らんには御跡より引續きて追々に來るべければ、必ず烈しき刑に行はれなん。

然れども捨置くべき事ならねば斯くと申すに、台徳院殿黙して御座します。十藏は既に我事聞えつる上は、今夜か明朝は首を刎られなん、とて待ち居たりしに、十藏呼べ、とて召されけり。思ひ極めて進み出づれば、如何して法を破りたるや。憎き奴哉。切つて棄てばやと思へども、若き者なれば許すよ、と仰せ出されて黄金二枚賜りけり。扱て、江戸へは重ねて、誰人にもあれ一人も忍びて御供に参りたらば重罪たるべし、と固く仰せ出されたるとなり。

○坪内玄蕃心得の事

石谷十藏定清、坪内玄蕃に向ひて、度々の功名世に高し。天晴心掛にて功名を遂ぐべき道も有らば教へられよ、といふ。坪内聞きて、能くこそ問はれたれ。人々事に臨みて神の力を頼み、八幡八幡といふ。我も又頼みては相頼になりて成就せじと思ふにより、我は毎も八幡といふ神を刺通さんと、一筋に思ひて後を取らざりし、と言ひけるとぞ。

○道化清十郎平野與兵衛に對面の事

道化清十郎は美濃の人にて、信長に仕へて度々武功勝れたる故に、信長清十郎が指物に無雙道

化といふ四字を書きて與へられしかば、世の人無雙道化といへり。平野與兵衛に齋藤家の士なるが、是も武功譽れ高く、信長是を招かれし時、人々往きて平野に對面するに、道化も打連れて物語せしが、道化曰く、御身は懸るに先立ち引くに殿ると聞く。其趣を委しく語りて教へられよ、といへば、平野、更に心懸故にも候はず。齋藤家に冥加に叶ふ士は皆々討死しつ。我生残りて重ての軍には必死と思ひつれ共、其武勇の不足故に死を遁れ、今日の間に會ひ恥の上の恥に會ひ候、と答へければ、只今の答至極の道理にて候。先断後殿は必死を不志しては成難し、と大に譽めて感じけり。

○谷太郎右衛門物前心得の事

谷太郎右衛門は武功の士にて、黒田家に客の會釋にて招き置かれけり。谷が曰く、軍の場にて先敵より味方に氣を附くべし。一人先に進み出で踏み堪ゆる處に、跡より二人三人行重らば、始出でたる者を強と知るべし。其處へ行く可からず。吾は又別の所に獨踏出して堪へ居るべき志せよ。暫くすれば又其處へ味方續くぞかし。又日比心安き人の我が主君に寵愛せらるゝとも、軍場にて其人の側に寄るべからず。必ず獨立の心得すべし。又士は弓鐵炮の上手と言はるゝ事好

む事に非ず。敵を打立てたき時か、或は城へ射込みたき事の有らんには、足輕は進み難き故に、人を指して命の有らん時、射當てざれば面目なし。危き場は敵も堅く守る故に、多くは犬死する事有り、といへり。

○可兒才藏が事

可兒才藏吉長は、尾州可兒山の人にて大剛の者なり。篠を指物にす。首を取りて篠の葉を口中に押し込み、投棄して後の證としける故、世の人篠の才藏といひ傳ふ。關白秀次に仕へ、長久手の軍に秀次引退かれしに、岡本嘉介、村善右衛門等踏留りて支へしに、才藏が來るを見て山に倚りかゝる心地せしとなり。扱才藏、殿は何方にぞ、と問ひて其退かれたる方に行きけり。目前の敵を見捨てて引退きしは、聞きしにも似ぬ才藏かな、と論じけるが、或日聚樂にて語り出して、才藏に如何なる所存有りしや、と問ふ。才藏聞きて、何心なく殿の跡を慕ひたるばかりなりき。今人々の論を聞くに尤なり。然らば暇申す、とて宿へも歸らず直に立去りけり。後に福島正則招きて七百五十石の祿を與へらる。才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり。才藏其祿の半分を與へ、竹内久右衛門といふ。才藏が墓藝州廣島に在りといへり。

○石田三成が事

石田治部少輔三成は、近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子にして、幼かりし時佐吉と言しが、家貧しく近き邊の寺に遣りて在りけり。或時秀吉彼寺に行き、佐吉が明敏なる故呼出して側に仕へしめしが、頻に祿を増し、水口四萬石與へられける。後三成に、人數多招きたらん、と問はれしに、鳥左近一人呼出し候、と申す。秀吉、其は世に聞ゆる者なり。汝が許に小祿にて如何で奉公すべき、と言はれしかば、三成、祿の半分を分ち二萬石與へ候、と答ふ。秀吉聞きて、君臣の祿相同じといふ事昔より聞きも傳へず。いかさまにも其志ならではよも汝には仕へじ。由々數も計ひたるかな、と深く感ぜられ、鳥を呼出して手づから羽織を與へて、是より三成に能く心を合せよ、と言はれけり。三成、佐和山を賜りたる時、鳥に祿増與ふべき由言ひけれども、祿更に不足にも候はず。他の人々に賜はり候へ、と辭しけり。左近が父元室町將軍家に仕へ、江州高宮の傍に甲斐無き様に隠れ居たりしを、三成招き出しけり。

○關白秀次公生害の事附吉田修理が事

秀吉秀次を養ひて關白を譲り、夫より太閤と申す。文祿二年秀頼誕生あり。秀次善からぬ事ども種々有りければ、文祿四年七月八日三成太閤の前に出でて、關白の謀叛既に顯れし、とて證を正したる書を見せ申せば、太閤怒りて、宮部善祥坊、堀尾吉晴等に下知して、疾く伏見に來らるるか、一先高野に退き申開き有るか。二つの中よ、と云送られしかば、秀次畏り、承り候、とて其後粟野木工頭秀用、白江備後守成定、熊谷大膳亮直澄三人に、此事如何有るべき、と問はるゝに、白江聞きも敢ず、殿下只今聚樂を出給はん事然るべからず候。此三人の中一人伏見へ參りて犯さぬ罪を申開くべし。叶はで討手來らば防矢射て思召し定められん外他有らんや、と申す。熊谷此謀尤さる事なれども、帝都の騒ぎとならん事其恐なきに非ず。又謀叛人と言はれんも口惜かるべし。父子の禮儀なれば都を出でて東坂本に赴き、讒者を糺されん事を申すべし。御許され無くば唐崎濱に打出て勝負を決するの外道なし、とぞ申ける。粟野、只今危きに逼りて宥を請ふとも聞入れられじ。逆も遁れぬ所なれば、今夜伏見に押寄せて屍を城に晒すべし。婦人の縊れて死するが加くならんは口惜しき事なり、と申しけれども、秀次皆用ひずして高野山に赴きけるが、一説に、吉田修理此時申しけるは、謀叛眞實に御座しまさば人數一萬我に附けられ候へ。今夜伏見に夜討して只一時に城を乗破るべし、と言ひけれども、聞入れざりしとなり。修理後に

越前秀康卿に仕へ、大坂陣に忠直の供して先陣たり。五月五日天王寺口の御先手加賀利常に命ぜられしかば、忠直甚忿られし時、本多伊豆守然らば明日眞先駆けて加賀の軍兵を踏越え、思ふ儘なる軍せん。斯る事は吉田修理能く決斷する者にて候、とて呼出す。修理聞きも敢ず、夜も短く候。早支度して打立つべし。人々續かれよ、と言捨てて、己が陣所に歸るや否やひたくと物具し、先駆して加賀の軍兵の押行く所に修理馬を乗寄せ、今度の命には岡山表は加賀、天王寺表は越前の三河守先陣を承りたり。各は知らざるや、と云ひも敢ず、眞一文字に押破り駈抜けたれば、越前の軍兵押續く。修理は今日必死と思ひ定めければ、本多忠朝の陣より鐵炮を打懸ると等しく、死ねやく、と聲々に呼はり、眞田が陣を切崩し、北ぐる敵を追つかけ、天満川の深みに馬を乗入れ溺死しけるとぞ。青巖寺にて自害あり。彼の三人も所々にて自害せり。是三成太閤の歿後世を覆す可き爲に先關白を失ひける、と後にぞ人申しける。

○木村常陸介最後の事

關白秀次高野の青巖寺にて自害ありければ、事を司り寵愛せられし人々、所々に誅せられ自害

しける中に、木村常陸介師春檢使の松田勝右衛門に向ひ、今度關白聚樂を出て伏見に赴かせ給はん。と定められし時、師春申しぬるには、太閤御對面だに御座しませんが、讒者の程明め給はん。然れども、夫までも無く中途より遠國へ放流せられ給ふか、甲斐無く御身を白刃に伏し給はん。必ず此二つの間なるべし。天晴太閤の使者を斬つて捨て、諸將の妻子聚樂に有るを人質に取り、罪無き事を申し開かせ給ふべし。さもあらんには和睦も堅く定り、又戦にも勇名を遺すべし。空しく聚樂を出でさせ給ふ様や有るべき、と再三諫め申しけれども、吾太閤に敵する心無しとして承引候はざりき。然れば關白に於て異心座しまさざる事明なり。此旨を達して給はりなば、其恩黄泉の下にも忘るべからず、と云ひ置きけるを、松田折を得て秀吉に申しければ、太閤木村が志を慰みて、妻子に米百石を與へて、京都誓願寺の近所に住居せしとぞ。

○秀吉有岡城へ使者に行かれし事附河原林越後山脇源大夫が事

秀吉信長の使者として荒木村重が有岡の城に来る。村重が土河原林越後守治冬、猿めが面魂遂に仇をなすべし。今刺殺さん事易からん、と村重に囁きけれども村重聞入れず。此事を秀吉に語りければ、秀吉治冬を呼出して懇に詞をかけ、差したる脇指を抜きて引出物にぞしたりける。

村重、指替の無くて、と言へば、秀吉、吾刀一つを頼みて信長に奉公する者に非ず、と言はれけり。後秀吉世を平けて治冬を深く惡み、探し出して殺されけるに、治冬君の爲に其仇を除くは武士の常の事なり。秀吉舊き怨を忘れず無道なり、と言ひて死したりけり。

秀吉河原林に與へられし脇指は三條吉廣が作なり。河原林が舊友山脇源大夫重信に傳へたり。山脇は攝州の人、幼かりしより勇名の聞えあり。甲州に往きて内藤修理が許に在り。其後攝州に歸り、荒木攝津守村重に仕へ、頻に用ひられて長臣たり。村重神田伊賀守と軍の時、神田が軍奉行郡兵大夫は勝れし剛の者なるを、毛附して討取つたり。凡首數九十八取りて首供養三度せしとなり。荒木亡びて重信中川清秀の許に隠れ居たり。清秀の妻は重信が叔母なり。前田利家、柴田勝家、丹羽長秀一萬石をもて招かれしかども引籠り居たりしを、護國公池田信懇に招かせ給ひしかば來り仕へ、山崎合戦に明智が士大將、丹波國にてしら山と言ひける城を預り居たる村上源之丞と馬上にて鎗を台す。山脇が鎗は十文字にて村上が馬の額に疵附き、馬飛出でければ源之丞馬より落ちけるを、從者駈け來り助くるを、源大夫詞をかけ村上和引組みける所を、味方數多落ち合ひて村上が首を得たり。其後も功名有りて士三十騎の將たり。

○成田助九郎誅せらるゝ事

秀吉北國に赴きし時、丹羽長重の小松の城に立寄りたるに、長重の士成田助九郎といふ者あり。秀吉先殿を北陸道の管領にせん、と賤が嶽にて約束有りつるが、加賀二郡越前若狹を賜りはぬ。先殿過ぎさせ給ひて後小松十二萬石に減じ、既に滅亡に近しとも申すべし。秀吉の不義憎むに餘り有り。臣に討手仰附けられよ。輒く刺殺すべし、と言ひけれども、長重聞入れずして止みたるを、秀吉如何にして洩聞かれけん、大に怒りて成田を憎む事甚しかりければ、成田小松を退きて伊勢の朝熊に隠れ居たりしを、終に搜出して殺されけり。成田が子半左衛門、長重に仕へて小松の軍に戦功あり。

○秀吉公連歌の事

秀吉或時紹巴に向ひ、吾發句せん。汝脇句せよ、とて、
奥山にもみぢふみわけなく螢
とせられしに、

しかとも見えぬ燈火のかけ

脇紹巴の句なり。紹巴、螢は鳴く蟲に候はず、と申す、秀吉聞きて、螢に聲無くとも、吾鳴かせん

とせば鳴かずしてや有るべき、と言はれし時、細川幽齋側より、

武藏野やしのをつかねて降る雨に螢よりほか鳴く蟲もなし

と詠める歌の候、と言はれければ、秀吉悦ばれけり。

此歌は螢の聲有りといふ心には非ず。雨降る夜は皆蟲の鳴止むなれば、光の見ゆる螢より

外蟲無しといふ事なり。

○三木牛之介鍬形の詩歌の事

三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり。五尺許の鍬形打ちたる冑を著て、

運在^レ天 見^レ敵無^レ退

又、

人は只さし出でぬこそよかりけれ軍にだにも先がかけをせば

と詠める歌を鍬形に書きたりしが、天文十一年正月河内の合戦に一番鎗を合せ、敵の大將を打

取りたり。天文十六年七月二十三日、三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死しけり。後此歌の事を秀吉に物語する人有りければ、秀吉、歌の趣意宜からず。吾ならば、

人はたゞさし出づるこそよかりけれ軍の時も先かけをして
と詠むべき物を、と言はれけり。

○谷大膳武勇討死の事

天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時、谷大膳は濱手の大將たり。兼て大膳は寄騎にと秀吉望まれしか共、信長許されずして加勢たらしめらる。大膳、敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討取りたり。秀吉、疾かさの丸名なり攻められよ、といへば、大膳、城堅固にして容易に攻取り難し、と答ふ。秀吉、日頃勇名高き大膳、小城一つ破り兼たるや、と詞を懸けられければ、大膳も怒り、秀吉も既に刀の柄に手を懸くべき色なりしかば、竹中半兵衛立塞がり、戦場の勝負こそ力を盡すべきに如何なる事ぞ、といふ處に、蜂須賀彦右衛門も來りて秀吉の轡を取て押返す。夜に入りて秀吉酒肴を持たせて大膳が陣屋に至り、今日の武功拔群なり。先の問答は我過にて、後悔大方ならず、とて懇情甚し。其後大膳手勢を率てかさの丸へ攻めかゝる。城中も此處を大事と防ぎ、矢

石を打出せども大膳少しもひるまず。士五十騎歩卒二百許、一の城戸口を押破りたれば、手負死人数を知らず。寄手押續けば大膳念なく乗破りたるが、數ヶ所手を負ひて、踞居たる所に、法師武者猩々緋の羽織著たるが、引返して大膳に向ふ。大膳、吾疲れたり。近寄りて首を取つて高名にせよ、と言ふを聞き、走懸りて一太刀打つ。大膳敵の草摺を取つて引寄せ、脇差を抽きて刺貫く處に、別所が士大將由井小兵衛、と名乗りて引返して馳來り、大膳を一太刀斬りたり。斯る處へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄つて、疊みかけて由井を打つて芝居に打据ゑ、押へて首を取り父に向へば、大膳は息絶えたり。出羽は父の死骸を陣屋に入れ、取りたる首を秀吉の實檢に備ふ。秀吉大膳が討死せし由を聞きて、せめて死骸になりとも對面せん、とて陣屋に行き、惜き人を討たせけるよ、とて涙に咽ばれけり。
秀吉家譜に載せたるとは大に異れり。然れども此一條は、谷の家に傳へたる説なる由なれば、家譜は誤なるべし。
大膳は江州犬上郡の人、信長に仕へて、川尻肥後守、稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人に加へらる。十四歳より四十七歳まで鎗を合する事九度、首を取る事十七度なり。

○戸川肥後守秀吉公を負ふ事

浮田秀家伏見にて秀吉を襲しける時、廊下より行く處の白砂の上に、戸川、花房を始として並び居て拜謁す。秀吉戸川達安に、吾を負へと言はれしかば、戸川、秀吉を掻負うて書院に行きけり。秀吉斯る振舞多かりければ、其よりして古き家々の禮儀も多く失ひたりとぞ。

○黒田如水先見の事

秀吉病重かりしかば、朝鮮渡海の軍兵を引取らんと計られける時、朝鮮へは必ず徳川殿赴かせ給ふべし。さらば日本は自ら徳川殿に歸服すべし、と人々言ひし處に、思の外に秀吉石田三成に命ぜられて朝鮮に赴きけり。偕ては日本の權威は三成に歸すべし、と言ひ振らす。黒田如水獨是を然りとせず。朝鮮の事三成是を承るにより、日本は徳川殿の掌の中に有りと覺ゆ。三成是より伐りて人は嫉みなん。然らば徳川殿の仁徳に靡き従ひて、日本は自然と徳川殿に歸服せん、と言はれしが、果して然りき。

○秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事

越前の秀康卿伏見にて、國といふ妓女を召して舞はせられし時、襟に掛けたる水晶の珠數見苦しき、とて物具の上に掛け給ふ珊瑚の珠數を賜はりけるが、暫舞ひける時、頻に涙を流し給ふ。人々怪みければ、秀康卿、今天下に幾千萬の女有れども、天下一の女と世に譽められ、名高きは此女なり。吾天下第一の男と世に言はれず。彼の女にさへ劣り果てたるかと思へば泣かれける、と仰せ有りけり。

○直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳子、樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて景勝に至る。景勝、奥州にて百萬石を賜りし時、米澤三十萬石を直江に與へられ、陪臣の中第一の大祿なり。長高く容儀骨柄雙無く、辯舌明に殊更大膽なる人なり。且文藝にも暗からず、五臣注の文選は此人板行させたるとなり。詩をも作りて、

春雁似吾吾似雁 洛陽城裏背花歸

などいふ句も世に聞えけり。伏見の城にて諸大名幾等も並居たる中に、伊達政宗懐中より金銭取り出して人々に見せられしに、其頃金銭の始りし比にて、珍しとて持離さる。直江が末座に有りしを、これ見られよ、と有りし時、直江扇の上に金銭を置きて打返し、女童の羽根つく様にして觀しかば、政宗、否苦うも候はず、手に取られよ、と言ひも終らぬに、直江、謙信の時より先陣の下知して應取り候手に、斯る賤しき物取れば汚れ候故、扇に載せて候、とて政宗の方に投戻しけり。兼續父も山城守といふ。元僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

○石田三成直江兼續密謀の事

石田三成或雨夜の徒然成りしに、直江を近附け私語きけるは、卑賤より出でて天下を治むるは大丈夫の志なり。我豊臣家の恩深し。太閤斯く世に御座しまさん中は思ひ立つべからず。然れども終には旗を揚げ、天下を取らばやと存するなり。其の時徳川家父子をば如何して討亡すべき。武略を廻らし給はらんや、と語りしに、直江此を幸とや思ひけん。是こそ志す所に候へ。然れ共徳川父子關八州を領して、且蒲生氏郷といふ勇將に親み有り。輒く勝つべからず。先氏郷を滅し、景勝に會津を賜りなんや。然らば吾景勝に謀りて旗を揚げ、我先陣して師を出すべし。其

時西國の諸將達を談ひ押寄せて、關東を討亡す可きよ、と細々と相謀り、終に氏郷を毒害し、後秀行八十萬石の地を削りて、會津を景勝に秀吉賜りたるは、此謀よりの事起ると言へり。

○兼續惺窩先生に逢ひし事

直江兼續、惺窩藤斂夫に對面せんと言へ共聞入れられず。兼續押して行きたれば不在なり。度々招けども、行かざるに、今日來りたるにも逢はず。偽りて他に出でたるとや思はん、とて直江が許に行かれしに、直江其日關東に赴きしかば、跡を追ひて大津に至りて對面あり。直江、廢れたる家を急に取立つる時、人臣の心得は如何に、と問ふ。惺窩、事を速にせんとせば却りて敗る基なり、とぞ答へける。後に直江景勝に勸めて旗を揚げさせ、必ず家を滅すべし、と惺窩言はれしが、果して景勝に事を起させたるが、其功成らざりき。

○石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事

慶長三年八月十八日太閤逝去。其比台徳院殿伏見に御座しまして、太閤の病重かりしかば、關東に赴かせ給はん事延引なりしが、俄に十九日伏見を發して關東に歸らせ給ふ。是れ東照宮遠

大の神慮なるべし。四老奉行内々相計り、徳川殿伏見に有りて權威日々に増長すべし。秀頼公を早く大坂へ移し、諸方一同に参り集りて尊敬すべき事然るべし、と東照宮に強て申して、同四年正月十日大坂に移居あり。東照宮も送らせ給ひて、大坂へ御出あり。片桐東市正且元が宅に御止宿有りけるが、十二日の曙に俄に打立ち給ひて、淀川を御船にて上らせ給ふ處に、枚方近く川岸に人多く群りけり。若や謀り奉る叛反の輩に有るべきか、と驚く處に、井伊直政が足輕と見ゆる、と申す者あり。程無く御船近く成りければ、脇五右衛門などいへる物頭跪きて待ち奉りて、頓て伏見に入らせ給ひぬ。

又此時御乗物には村越與三右衛門を乗せさせ給ひ、東照宮には陪者の騎馬の中に御雜り有りたりとも言へり。又井伊直政は馬上にて御迎に出で、物具して其上に常の衣服著たり。直政が手の者皆下に具足を著、弓鐵炮の者彼是二千許にて参り、殊に御愛ありける彌八鹿毛を引き來りければ、其儘打乘らせ給ひて歸らせ給ふとも言へり。此頃既に世間さまざまに言振し、如何なる事か出來らん、と人々危みおもへり。東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結はせられ、御門を押し開き、敵寄せ來らば堅固に防ぎ守らせ給ふべき設あり。御門を開く事然る可からず、と申す者有りければ、門を閉ぢて守らば敵に悔らるゝな

り。只押晴れて軍の支度をせよ、と仰せ有りけるとぞ。京極高次参りて、大津の城へ引移らせられんや、と進め申されけるを聞召し、敵寄せば上の臺へ押し上げ、金札の宮の邊にて眞丸に成りて一合戦すべし。吾兵二千許や有らん。敵何萬もあれ打破る事難からず、と仰せられけり。正月十九日、安國寺瓊長老、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀四人四老五奉行の使として、東照宮に参りて、伊達政宗、福島正則、蜂須賀至鎮縁組の事によりて、徳川家獨擅なる事共、豊臣家の爲然る可からざる由申す旨あり。依りて世の中愈々様々なる風説あり。其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて、二月二十五日尾州宮に著きけるが、伏見の騒がしき由を聞き、日夜道を急ぎて、道すがらにて聞けば、伏見にて、既に東照宮の御館へ敵押し寄せたりなどと言ひ振らす。二十六日の晩膳所にて伏見よりの飛脚に行逢ひ、未だ弓箭は始まり申さぬ、と言ふを聞き、康政悦んで則ち膳所に陣し、秀頼の下知と稱し、伏見の騒に附き東海、東山兩道の人留すると振れさせ、勢田、矢橋を三日押留めたり。其比の騒しきに諸國より聞傳へ、京伏見に集る人殊の外多かりしに、押留められ、草津、野洲を始めとして、何萬といふ數計るべからず。扱康政三日の後未刻に、構へたる關所を開かせたれば、旅人一同に京伏見に入る。康政膳所を立ちて、七千許の人を率ゐて伏見へ入りければ、京にて關東より數萬の軍兵馳著きたり、と

ひ振らす。康政小具足著し鉢巻し。馬印押立てて参りければ、御前に召して御手づから御鬘斗を下されけり。康政下知して、御藏より料足數千貫出させ、人々に分渡し、内府の軍兵六萬にて駈け著きたれば、館にて兵糧の用意俄に設け兼ねたり、と言はせて店屋物を買ひ來らしむ。數千人、京、伏見、淀に馳廻りて、赤飯菓子酒様の物一つも残らず買ひ來れば、關東より十萬の軍兵集りたり、と人々思はぬ者も無し。是に依りて石田が謀空しくなると言へり。東照宮、柳生又右衛門は、石田が士大將島左近と同國の好にて懇なりと聞召され、左近方へ行き物語して、彼は如何にか言ふらん。聞きて來れ、と仰有りしかば、柳生左近に逢ひて世間の物語し、如何に成るべき事ならん、と言ひければ、左近聞きて、今松永、明智二人の智謀決斷有る人無ければ何事か有るべき、と打笑ひけり。此子細は、或時石田密謀に及びけるに、左近、豊臣家の爲を存せんに斯くあらで止むべきや。然れども爰に存する旨あり。大事を企つるには、我志す處を無二無三に決斷して、少しも猶豫有るべからず。然るに去年より度々仕課すべき圖を空しく外し給ふ事多し。既に時を失ひぬ。能々世の有様を見るに、石田の家を惡む人々、大かた徳川殿に心を寄せたり。當家の存亡計るべからず。一日の過ぐるも残り多し。只理を非に曲けて、唯今まで疎遠の諸大將達へも遜りて、遺恨無く計ひて交り親しみ、暫く時

を待つべきも一つの計策にてこそ、と言ひければ、三成、されば縱令一時に能く志を遂ぐるとも、後の安かるべき様を計るなり、と言ひけるに、左近、否々事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候べき。内府に親しき人々を積るに、其兵二萬に過ぐべからず。味方素より心を合する大國の人々、又近國の兵を集むるとも、忽馳寄つて五六萬には及ぶべし。景勝卿采配を取つて下知し、關東を攻破らんは何程の事か候可き、とて又存する旨を言ひ出しけるに、客の來て三成坐を立ちければ、榎原彦右衛門居残りて左近に向ひ、如何にも仰せ然る事なり。松永彈正、明智光秀は無雙の惡逆の者なれど、事を決斷するに誰か相並ぶべき。此詮議の破り相手に頼む可きものを、と言ひけるとかや。其に依りて斯く柳生には答へけるとなり。

○細川忠興忠告の事

石田三成を始め相組する人々、加賀利家を推尊みて、東照宮を傾け奉らんと日夜相謀れり。利家の長子利長、細川越中守忠興を招きて、累年親みたる間薄からず。さぞな危ふからんを扶け給はんや、と問はるゝに、二代の知音にて候へば、聊、籠略候まじ、と答へらる。利長、尤斯こそ有るべけれ。頃日石田三成、小西等相計つて、内府の向島の館を攻圍まんと議決しぬ。潜に知

らせ候ぞ。と語られしかば、忠興熟々と聞きて、日比の親み、斯る大事を告知らせ候事淺からぬ事なり。心得候ひぬ。明日参りて申合せ候はん、とて歸られけるが、

是は之れより前、東照宮は藤森に御座しけるに、井伊直政が土木保土佐、若し風に乗じて御館の隣なる宅に火を懸けなんは危き事なり、と申しければ、東照宮、御寢所へ土佐を召して具に聞し召され、其翌日向島に移らせ給ひけり。

直に向島へ参りて、東照宮御對面有りしかば、忠興、近習の人を屏けて、只今参る事別の子細も候はず。石田等黨を結び利家を依頼として、君を亡し申すべきと企て候。利長と年頃の親しみに依りて具に洩れ承りぬ。彼等が謀に落ちざる御設こそ然るべく候へ、と申されける

を聞し召し、過ぎにし年信長攝州出陣の比、弱年にて武勇の譽有りし故申し通せしなり。斯る深志有らんとも知らざりける悔しさよ、と悦ばせ給ひて、榊原康政を召して、如何有る可き、と仰有り。事急に候。後れては人に制せらる可し、と申す處に、忠興、國の輔は人の與する事最

一に候へば、淺野幸長を召され候へ。彼は必ず徳川家に心を寄すべし、と申されければ、頓て使を走らせらるるに、取敢ず参られたり。忠興出で向ひて事の子細を語らるるに、人多き中に斯る事を知せらるる事交の甲斐有り。斯る時は疑の生じ易き習に候、とて忠興、幸長先誓紙を

書きて奉りぬ。若し敵寄せば幸長は宇治川を固め候ひなん。忠興は敵の中に打交り、不意に一軍仕り候可し、とぞ相計られける。然れども是も始終勝を全うすべき道にも非ず。利家と利平有るに踰ゆる事候まじ。只兩人に任せ給ひ候へ、とて其翌日、忠興夙に利長の許に行き向ひ

て、昨日の密謀一々内府に告げたり、とぞ語られける。利長色を變じて、こはそも戯に候や實に候や、と驚かれけり。忠興、されば愚者も千慮の一得候。此事を思慮するに、石田謀つて兩雄を闘はしめ、其弊に乗らんと料るものに候。兩雄相闘ひて亡びなば、安藝の輝元、備前の秀家などを大將として、吾等が如き者は手も無く攻平けなん所存見顯し候。寛仁の内府に與してこそ家をも起すべけれ。三成と心を合せて名を汚し身を失はんは必定にて候。斯く申す詞を許容候ひな

ば、疾く内府と令親家と和睦有りて、世穩かならん事こそ然るべう候へ。是全く前田家を佑くる所にて候、と詞を盡して規誨せられしかば、利長も深く思慮して、道理に當れる事共にて候。然らば父に申さばや、とて利家に斯くと告げて利害を詳に語られけるに、利家も諾せられけり。

又一説に、五老五奉行の内争論不和の事あらば、生駒雅樂頭親正、中村式部少輔一氏、堀尾帶刀吉晴三人和平を取計ふべし、と兼て太閤の遺言に因りて、井伊直政に就きて和平の事を謀れりとも言へり。

常山紀談 卷之十二

○東照宮細川家の難を救ひ給ひし事

關白秀次生害の後、細川忠興の家に罪蒙るべき事起れり。其子細は、秀次當時の大名財用乏しきには、潜に金銀を貸し給ふ事あり。是は人の心を攪らんが爲、且は財を利せんが爲なりけり。忠興も黄金二百枚を借りてければ、彼家金銀出納の事を司れる人、急ぎ彼の金かへし給ふべし。券契を破り捨て候べし。左なからんには太閤の奉行に券契を出すべし、とぞ申しける。忠興、如何にも叶ふ可からず。此事太閤に泄聞えなば、罪科に處せられん事疑なし。如何爲べき、と案じ煩ひ、長臣相集りて議しけるに、松井佐渡守申しけるは、某年頃徳川殿の御内なる本多佐渡守正信と親しく相語らひ候。彼に附きて徳川殿を頼み參らせん。徳川殿はさる頼母しき人にて御座しませば、いかでは程の事にて、人の家亡びんとするを見捨て給ふ事は候まじ、と申す。忠興、我日比内府と親しくも無し、斯る事頼むに便なし。されども、汝正信と親しからんには、試に計り見よ、といふ。松井、本多に云々のこと有りといふ。徳川殿聞し召

し、其儘松井を召され、人を退けて尋ね問はせ給ひ、正信して唐櫃二つひらかせらる。一つに黄金百枚づつを入れられたり。其の黄金の箱に題せし年月を見よ、と仰有り。正信是を考ふるに、二十一年の前末三河に御座有りし時に候、と申す。徳川殿松井に向はせ給ひ、凡そ金銀は出納の司有る事にて、若し人知れず用ひんとする時に吾心に任せ難し。さればこの黄金を貯ふる事、斯る事を待つに年久し。今其の家の爲に吾年比の志達しけるこそ嬉しけれ、とて自らはを松井に賜ふ。松井大に悦び、斯る有難き御事こそ候はね。既に亡びんとする家の、斯再び繼ぐべく候事偏に君の御恩なり。細川が家の候はん限は、争で此情を忘れ奉るべき。速に本國に申し下して黄金召し上せ、償ひ奉る可きにて候、と申す。東照宮聞し召し、否々此事世に泄聞えなんには兩家の禍にこそあれ。夫故に斯く人知れず用ふべき料の物取出したれ。努々償はん事然る可からず、と仰せられしかば、松井殊更に悦び、急ぎ歸りて此由を申し候はん、とて御前を立ちて出でにけり。遙經て忠興其の事となく御館に參り、御對面の序に正信を呼出し、東照宮に向ひて申しけるは、年頃忠興が家人に仰せ下されし事謹んで承り候。何事の御座します可きには候はねども、若し御家に事有らん時は、必ず君の御爲國をも身を捨て、此度の御情に報じ奉らんするにて候。さりながら、忠興常に伺公仕りて候はんには本意遂げん事叶ふ可か